

IBM® DB2 Connect™



DB2 Connect™ Enterprise Edition
概説およびインストール

バージョン 8.2

IBM® DB2 Connect™



DB2 Connect™ Enterprise Edition
概説およびインストール

バージョン 8.2

ご注意!

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： GC09-4833-01
IBM® DB2 Connect™
Quick Beginnings for DB2 Connect™ Enterprise Edition
Version 8.2

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2004.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1993-2004. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2004

目次

第 1 部 DB2 Connect の紹介 1

第 1 章 DB2 Connect について 3

DB2 Connect の製品オファリング 4

DB2 Connect のホストおよび iSeries サポート 6

第 2 章 DB2 Connect のシナリオ 7

DB2 Connect EE でのホストまたは iSeries DB2 データへのアクセス 7

リモート・クライアントからの DB2 データへのアクセス 13

Java を使用した Web から DB2 データへのアクセス 13

構成アシスタントを使用したデータベース接続の管理 16

Administration Server について 17

DB2 管理ツールを使用したインスタンスおよびデータベースの管理 17

DB2 Application Development Client を使用したアプリケーションの開発 19

第 2 部 DB2 Connect の移行 21

第 3 章 DB2 Connect の旧バージョンからの移行 23

第 3 部 DB2 Connect のインストール 25

第 4 章 インストールの概要 27

DB2 Connect Enterprise Edition: インストールおよび構成の概要 27

第 5 章 インストール要件 29

ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX) 29

インストール要件 (Windows) 30

DB2 Connect Enterprise Edition (Windows) のインストール要件 30

DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows) 31

インストール要件 (UNIX) 34

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (AIX) 34

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (HP-UX) 36

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (Linux) 37

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (Solaris オペレーティング環境) 38

第 6 章 プリインストール・タスク 41

IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX) 41

DB2 UDB 用の Java SDK レベル 43

ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows) 44

カーネル・パラメーター (UNIX) 45

カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX) 45

推奨されるカーネル構成パラメーター (HP-UX) 46

カーネル・パラメーターの変更 (Linux) 47

カーネル・パラメーターの変更 (Solaris オペレーティング環境) 48

第 7 章 インストール・タスク 49

DB2 Connect EE のインストール (Windows) 49

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Windows) 49

DB2 Connect EE のインストール (UNIX) 51

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (AIX) 51

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (HP-UX) 54

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Linux) 56

zSeries 上での DB2 UDB for Linux のインストール準備 58

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Solaris オペレーティング環境) 59

第 8 章 ポストインストール・タスク 63

最新のフィックスバックの適用 (Windows および UNIX) 64

DB2ADMNS および DB2USERS ユーザー・グループへのユーザー ID の追加 65

DB2 Connect ライセンスの活動化 66

db2licm コマンドを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール 66

ライセンス・センターを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール 67

db2licm コマンドを使用したライセンス・タイプの設定 68

ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプの設定 68

第 4 部 DB2 Connect 通信のためのホストおよび iSeries データベースの準備 71

**第 9 章 DB2 Connect 通信のための
DB2 for OS/390 and z/OS データベ
ースの準備 73**

DB2 Connect からの接続のための DB2 Universal
Database for OS/390 and z/OS の準備 73
DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS 用の
TCP/IP の構成 74
DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の構成 77
VTAM の構成 78

**第 10 章 DB2 Connect 通信のための
DB2 UDB for iSeries データベースの準
備 83**

DB2 Connect からの接続のための DB2 Universal
Database for iSeries の準備 83

**第 11 章 DB2 Connect 通信のための
DB2 for VM & VSE データベースの準備 85**

DB2 Connect からの接続のための DB2 for VSE &
VM の準備 85

**第 5 部 ホストおよび iSeries デー
タベースへのアクセスの構成. 87**

第 12 章 構成アシスタントの使用 89

CA を使用した、ホストまたは iSeries データベ
ース・サーバーへの接続の構成 89
構成タスク 89
 ディスクバリーを使用したデータベース接続の構
 成 89
 プロファイルを使用したデータベース接続の構成 91
 構成アシスタント (CA) を使用したデータベー
 ス接続の手動による構成 92
構成アシスタントによるデータベース接続のテスト 94

**第 13 章 DB2 Connect Sysplex のサポ
ート 95**

DB2 Connect Sysplex のサポート 95
OS/390 および zSeries SYSPLEX を活用する際の考
慮事項 95
Sysplex の構成の要件 96
DB2 Sysplex の活用 97

**第 6 部 クライアントのインストール
および構成. 99**

第 14 章 インストールの概要 101

DB2 クライアント. 101
DB2 クライアントのタイプ. 102
 DB2 Administration Client 102
 DB2 Application Development Client 102
 DB2 Run-Time Client 103
 DB2 Run-Time Client Lite 103

第 15 章 インストール要件. 105

DB2 クライアントのインストール要件 (Windows) 105
DB2 クライアントのインストール要件 (AIX). . . . 106
DB2 クライアントのインストール要件 (HP-UX) 107
DB2 クライアントのインストール要件 (Linux) . . . 108
DB2 クライアントのインストール要件 (Solaris オ
ペレーティング環境). 109

第 16 章 インストール 111

DB2 クライアントのインストール (Windows). . . . 111
DB2 クライアントのインストール (UNIX). 112

**第 17 章 DB2 Connect を使用するた
めの DB2 クライアントの構成 115**

構成タスク 115
 ディスクバリーを使用したデータベース接続の構
 成 115
 プロファイルを使用したデータベース接続の構成 117
 構成アシスタント (CA) を使用したデータベー
 ス接続の構成 118
データベース接続のテスト 119

**第 18 章 クライアントおよびサーバ
ー・プロファイルの使用 121**

クライアント・プロファイル 121
構成アシスタントを使用したクライアント・プロフ
ァイルの作成およびエクスポート. 121
構成アシスタントを使用したクライアント・プロフ
ァイルのインポートおよび構成 123
プロファイルのエクスポートとインポート. 124

第 7 部 DB2 Connect の使用 125

**第 19 章 各自のアプリケーションの実
行 127**

**第 20 章 DB2 Connect のバインディ
ング・データベース・ユーティリティー. 129**

第 8 部 参照 131

**第 21 章 DB2 製品 CD-ROM のマウン
ト 133**

CD-ROM のマウント (AIX) 133
CD-ROM のマウント (HP-UX). 134
CD-ROM のマウント (Linux) 135
CD-ROM のマウント (Solaris オペレーティング環
境). 135

**第 22 章 DB2 Connect のアンインス
トール 137**

DB2 UDB のアンインストール (Windows). 137
DB2 UDB のアンインストール (UNIX). 138

第 9 部 付録 141

付録 A. 言語サポート 143

DB2 インターフェース言語の変更 (Windows).	143
DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX).	144
サポートされる DB2 インターフェース言語	144
別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行 する場合の言語 ID	145
文字データの変換	146

付録 B. DB2 Universal Database 技術 情報 149

DB2 資料およびヘルプ	149
DB2 資料の更新	149
DB2 インフォメーション・センター.	150
DB2 Information Center のインストール・シナリオ	152
DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)	154
DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (Windows)	157
DB2 インフォメーション・センターの呼び出し	160
コンピューターまたはイントラネット・サーバーへ の DB2 インフォメーション・センターの更新イン ストール	161
希望する言語で DB2 Information Center のトピック を表示する	162
DB2 PDF 資料および印刷された資料	163
DB2 の基本情報	163
管理情報	164
アプリケーション開発情報	165
ビジネス・インテリジェンス情報	166

DB2 Connect 情報	166
入門情報	166
チュートリアル情報	167
オプション・コンポーネント情報	167
リリース・ノート	168
PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法	169
DB2 の印刷資料の注文方法	170
DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す	170
コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを 呼び出す	172
コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼 び出す	172
コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼 び出す	173
DB2 チュートリアル	173
DB2 トラブルシューティング情報	174
アクセス支援	175
キーボードによる入力およびナビゲーション	175
アクセスしやすい表示	176
支援テクノロジーとの互換性	176
アクセスしやすい資料	176
ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム	176
DB2 Universal Database 製品の共通基準認証	179

付録 C. 特記事項 181

商標	183
--------------	-----

索引 185

IBM と連絡をとる 189

製品情報	189
----------------	-----

第 1 部 DB2 Connect の紹介

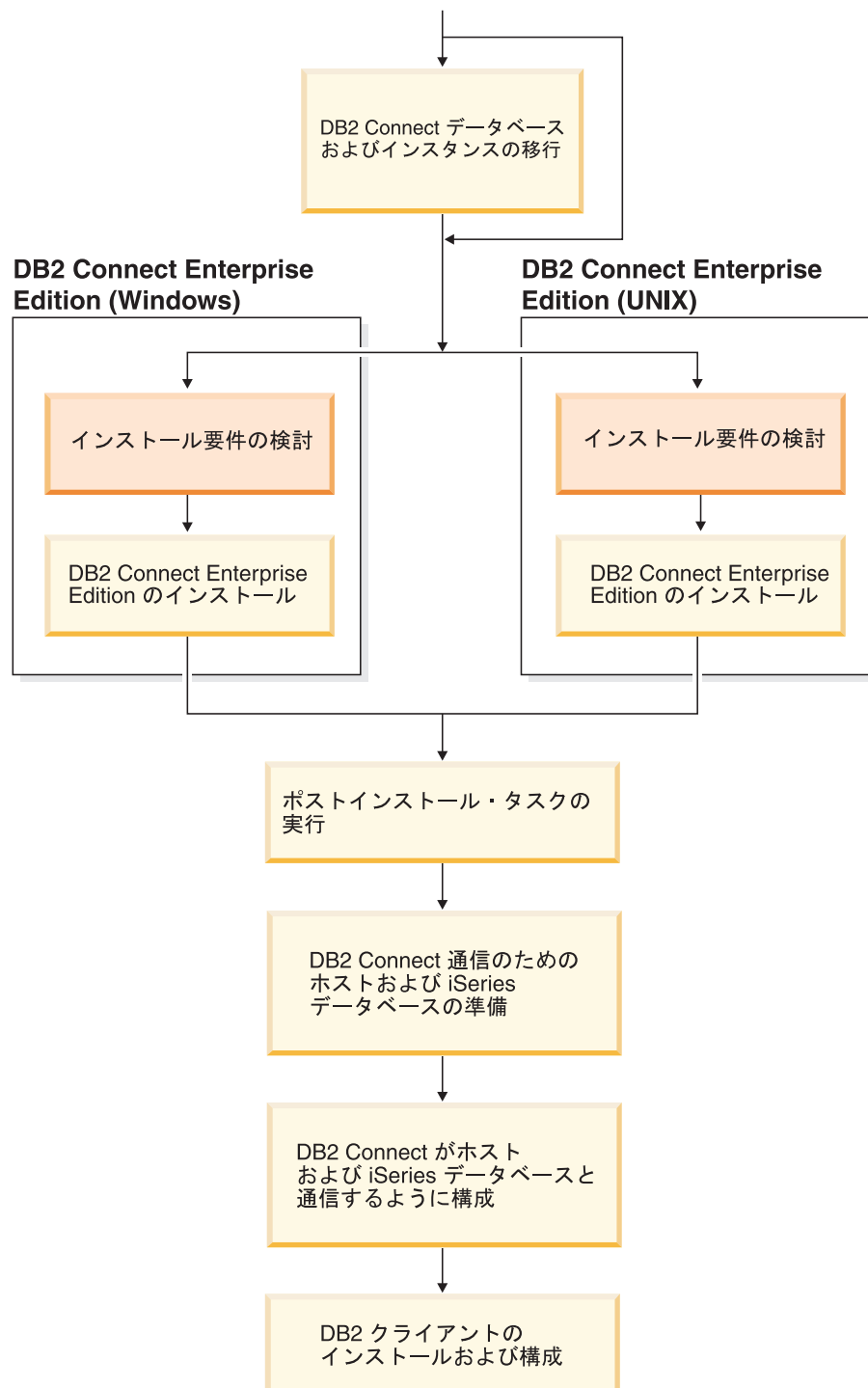
続くセクションでは、異なる DB2 Connect 環境の例を含め、DB2 Connect の概要について説明します。解説されている内容は以下のとおりです。

- 使用可能な DB2 Connect のバージョン
- 異なるビジネス環境に対する各バージョンの適合性
- DB2 Connect とともに使用できる管理ツールおよびクライアント・ツール
- DB2 Connect が Java、Web アプリケーション、およびトランザクション処理に関係するシナリオ

このセクションの対象読者

- DB2 Connect を、現在の、または今後のビジネスの運用に統合する方法を調査しているマネージャー
- DB2 Connect のインストールを準備しているテクニカル・スタッフ

第 1 章 DB2 Connect について



DB2 Connect は、Windows、および UNIX ベースのプラットフォームから、メインフレーム・データベースおよび中性能データベースへの接続を提供します。 OS/390

and z/OS、iSeries、VSE、および VM 上の DB2 データベースに接続することができます。分散リレーショナル・データベース体系 (DRDA) に準拠した非 IBM データベースに接続することもできます。

DB2 Connect の製品オファリング

DB2 Connect には、接続に関する複数のソリューションがあります。

DB2 Connect Enterprise Edition

DB2 Connect Enterprise Edition は、複数のデスクトップ・クライアントや Web アプリケーションからホスト・システムや iSeries システムで実行される DB2 サーバーへの接続を集中管理する接続サーバーです。IBM の DB2 Universal Database (UDB) for iSeries、DB2 for OS/390 and z/OS、および DB2 for VSE & VM などのデータベースは、世界中の大手企業の最重要データを管理するシステムとして最適であり、これからもそのようなシステムとして位置付けられます。しかし、これらのホスト・データベースや iSeries データベースでデータを管理する一方で、そのデータを Windows、UNIX などのワークステーション上で動作するアプリケーションに統合したいという強い要望もあります。

DB2 Connect Enterprise Edition を利用すれば、ローカルおよびリモートのクライアント・アプリケーションで、SQL (構造化照会言語)、DB2 API (アプリケーション・プログラミング・インターフェース)、ODBC (Open Database Connectivity)、JDBC (Java Database Connectivity)、SQLJ (Embedded SQLJ for Java)、DB2 CLI (コール・レベル・インターフェース) を使い、DB2 データベースやホスト・システムの作成、更新、制御、管理を行うことが可能になります。さらに、DB2 Connect は、Microsoft Windows のデータ・インターフェース (ActiveX データ・オブジェクト (ADO)、リモート・データ・オブジェクト (RDO)、オブジェクトのリンクと埋込 (OLE) DB など) もサポートしています。

DB2 Connect Enterprise Edition は現時点で、AIX、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、Windows の各オペレーティング・システムで使用可能です。これらのサーバーは、UNIX (AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境)、および Windows ワークステーション上で動作するアプリケーションをサポートします。

DB2 Connect Enterprise Edition は多くの場合、DB2 クライアントをホストまたは iSeries データベースに接続するために、中間サーバーにインストールされます。さらに、複数のローカル・ユーザーがホスト・サーバーまたは iSeries サーバーに直接アクセスする必要があるマシンでも使われます。

たとえば、DB2 Connect Enterprise Edition は多数のローカル・ユーザーを有する大型マシンにインストールすることができます。さらに、Web サーバーやトランザクション・プロセッサ (TP) モニターを実行しているマシン、およびローカルの SQL アプリケーション・プロセスやスレッドが複数ある他の 3 層アプリケーション・サーバーにインストールすることもできます。これらのケースでは、システムを単純にしておくため DB2 Connect Enterprise Edition を同一のマシンにインストールすることもできれば、CPU サイクルの負荷を減らすために別個のマシンにインストールすることも可能です。

DB2 Connect Enterprise Edition が最も適しているのは、以下に示すような環境です。

- サーバーがネイティブの TCP/IP 接続をサポートしておらず、デスクトップ・ワークステーションからの SNA を介した直接接続が望ましくない環境。
- Web サーバーが Web ベースのアプリケーションを実行する環境。
- Web サーバーが、データ認識 Java アプリケーションを使った Web ベースのアプリケーションを実行する環境。
- 中間層アプリケーション・サーバーが使われている環境。
- TP モニター (CICS、Encina、Microsoft Transaction Server (MTS)、Tuxedo、Component Broker、MQSeries など) が使われている環境。

DB2 Connect Personal Edition

DB2 Connect Personal Edition は単一のワークステーションからの、サーバー (OS/390、z/OS、OS/400、VM および VSE など) 上に置かれている DB2 データベースへの、または UNIX、および Windows オペレーティング・システム上にある DB2 Universal Database サーバーへのアクセスを提供します。DB2 Connect Personal Edition には DB2 Connect Enterprise Edition と同じ豊富な API セットが用意されています。

この製品は現時点で、Linux および Windows オペレーティング・システムで使用可能です。

DB2 Connect Personal Edition は、Windows オペレーティング・システム、あるいは Linux の単一ワークステーションを、ホスト・データベースまたは iSeries データベースに接続するのに使用します。DB2 Connect Personal Edition が最も適しているのは、ネイティブの TCP/IP サポートが DB2 サーバーによって提供されており、配置するアプリケーションが従来の 2 層クライアント/サーバー・アプリケーションであるような環境です。

たとえば、従来の 2 層から成る VisualBasic および Microsoft Access アプリケーションを利用する場合は DB2 Connect Personal Edition が適しています。アプリケーションが中間層アプリケーション・サーバーを必要とする場合は、DB2 Connect Enterprise Edition を使わなければなりません。

DB2 Connect Unlimited Edition

DB2 Connect Unlimited Edition は、DB2 Connect を柔軟に配置することができ、製品の選択やライセンス入手も簡単に行える、ユニークなパッケージ製品です。この製品には DB2 Connect Personal Edition と DB2 Connect Enterprise Edition の両方が含まれており、ライセンス条件では、任意の DB2 Connect 製品を無制限に配置できるようになっています。ライセンス料金は、DB2 Connect のユーザーが使用する S/390、あるいは zSeries サーバーの規模に応じて決まります。

このパッケージ製品は、OS/390 および z/OS システム用だけが使用可能です。また、ライセンス供与は DB2 for OS/390 and z/OS のデータ・ソースに対してのみ有効です。

DB2 Connect Application Server Edition

DB2 Connect Application Server Edition は、テクノロジーの面では DB2 Connect Enterprise Server と同一であり、要求の多い大規模な環境に合わせた設計になっています。しかし、ライセンス交付の契約条件は、多層構造のクライアント/サーバー・アプリケーションや、Web テクノロジーを利用したアプリケーションのニーズに特に合わせた内容になっています。

関連タスク:

- 「*DB2 Connect Personal Edition 概説およびインストール*」の『DB2 Connect Personal Edition のインストール (Windows)』
- 「*DB2 Connect Personal Edition 概説およびインストール*」の『DB2 Connect Personal Edition のインストール (Linux)』
- 49 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Windows)』
- 59 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Solaris オペレーティング環境)』
- 56 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Linux)』
- 54 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (HP-UX)』
- 51 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (AIX)』

DB2 Connect のホストおよび iSeries サポート

DB2 Connect は、以下のホストおよび iSeries サーバーをサポートします。

- 以下の APAR のフィックスを適用した、DB2 for OS/390 バージョン 6.1 およびバージョン 7.1。PQ62695、PQ55393、PQ56616、PQ54605、PQ46183、および PQ62139。および DB2 for z/OS バージョン 8 またはそれ以降。
- DB2 UDB for iSeries V5R1 およびそれ以降。必要な iSeries 保守レベルについては、APAR II13348 を参照してください。APAR 詳細を表示するには、以下の Web サイトを参照してください。
 - <http://www-912.ibm.com/supporthome.nsf/document/20300257>
- DB2 Server for VM/VSE バージョン 7 およびそれ以降。必要な保守レベルについては、以下の Web サイトを参照してください。
 - <http://www.ibm.com/software/data/db2/vse-vm/support/dwnldsf.html>

関連概念:

- 「*DB2 Connect ユーザーズ・ガイド*」の『DB2 Connect』
- 7 ページの『DB2 Connect EE でのホストまたは iSeries DB2 データへのアクセス』

関連タスク:

- 89 ページの『CA を使用した、ホストまたは iSeries データベース・サーバーへの接続の構成』

関連資料:

- 「*DB2 Connect ユーザーズ・ガイド*」の『ホスト・データベース』

第 2 章 DB2 Connect のシナリオ

DB2 Connect EE でのホストまたは iSeries DB2 データへのアクセス

DB2[®] Connect サーバーを使用して、LAN 上の DB2 クライアントから、ホストまたは iSeries[™] システムに保管されているデータにアクセスすることができます。DB2 Universal Database[™] Enterprise Server Edition は、DB2 Connect[™] サーバー・サポート・コンポーネントなどで構成されます。DB2 Connect Enterprise Edition という場合はすべて、DB2 Connect サーバー・サポート・コンポーネントも指しています。

大量のデータを扱う組織では、DB2 UDB for iSeries、DB2 UDB for OS/390[®] and z/OS[™]、または DB2 Server for VSE & VM が一般的にデータの管理に使用されます。サポートされている任意のプラットフォームでアプリケーションを実行した場合、あたかもローカル・データベース・サーバーがそのデータを管理しているかのように、データを透過的に処理することができます。DB2 Connect Enterprise Edition は、ホストまたは iSeries データにアクセスし、トランザクション・モニター (たとえば、IBM[®] TxSeries CICS[®]、Encina[®] Monitor、Microsoft[®] Transaction Server、BEA Tuxedo) や、Java[™] アプレットとしてインプリメントされるアプリケーションを活用するアプリケーションをサポートするのに必要です。

さらに、広範囲の既製またはカスタム開発されたデータベース・アプリケーションを、DB2 Connect とその関連ツールと共に使用することができます。たとえば、DB2 Connect 製品を次のものと一緒に使用できます。

- スプレッドシート (ロータス 1-2-3 (Lotus[®] 1-2-3[®]) および Microsoft Excel など)。データ抽出やインポート手順に手間と費用をかけずに、リアルタイム・データを分析できます。
- 意思決定支援ツール (BusinessObjects、Brio and Impromptu、および Crystal Reports など)。リアルタイム情報を提供します。
- データベース製品 (Lotus Approach および Microsoft Access など)。
- 開発ツール (PowerSoft PowerBuilder、Microsoft Visual Basic、および Borland Delphi など)。クライアント/サーバー・ソリューションを作成します。

DB2 Connect Enterprise Edition は、次のような環境に最も適しています。

- ホストおよび iSeries データベース・サーバーがネイティブの TCP/IP 接続をサポートせず、SNA を経由したデスクトップ・ワークステーションからの直接接続が望ましくない場合 (9 ページの図 1 を参照)。
- アプリケーションがデータ認識型の Java アプレットを使用してインプリメントされる場合 (15 ページの図 5 を参照)。
- Web サーバーが Web ベースのアプリケーションをインプリメントするために使用される場合 (12 ページの図 4、および 15 ページの図 5 を参照)。
- 中間層アプリケーション・サーバーが使用される場合

- IBM TxSeries CICS および Encina Monitor などのトランザクション・モニター、IBM Component Broker、IBM MQSeries[®]、Microsoft Transaction Server (MTS)、および BEA Tuxedo が使用される場合 (10 ページの図 2 を参照。)

これにより、DB2 Connect は、分散データ管理用の標準アーキテクチャーを介して、ホスト・データまたは iSeries データに透過的にアクセスできます。この標準規格は、Distributed Relational Database Architecture (DRDA) と呼ばれます。アプリケーションは、DRDA[®] の使用によって、高価なホストまたは iSeries コンポーネントや所有権付きのゲートウェイを使わずに、ホストおよび iSeries データベースに迅速に接続することができます。

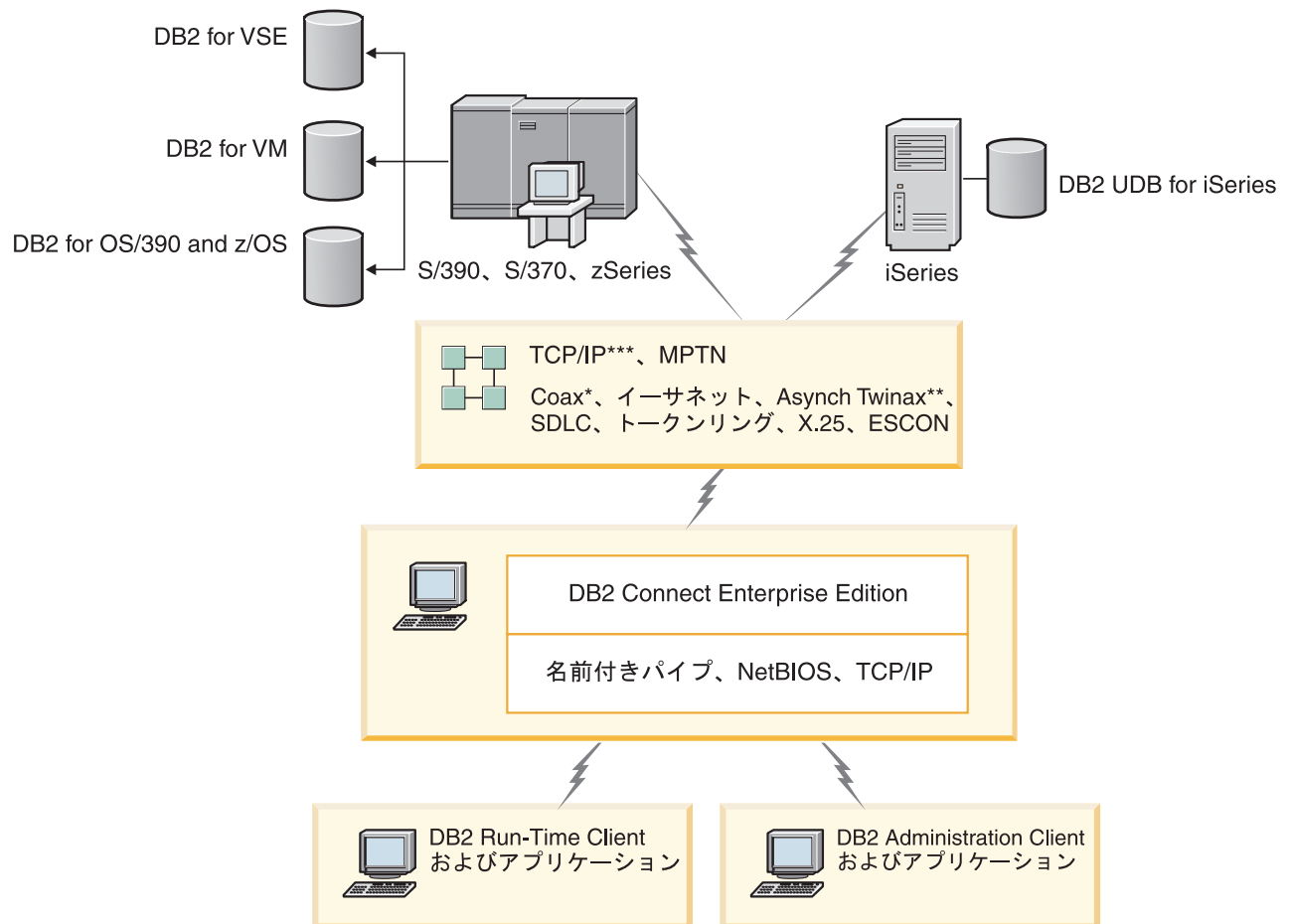
DB2 Connect はしばしば、DB2 クライアントからホストまたは iSeries データベースに接続するために、中間サーバー・マシンにインストールされますが、複数のローカル・ユーザーがホストまたは iSeries サーバーに直接アクセスするマシン上にもインストールされます。たとえば、DB2 Connect は、たくさんのローカル・ユーザーを持つ大規模なマシンにインストールされることがあります。

また、DB2 Connect は、Web サーバー、トランザクション・プロセッサ (TP) モニター、または複数のローカル SQL アプリケーション・プロセスおよびスレッドを持つ、他の 3 層アプリケーション・サーバー・マシンにもインストールされることがあります。この場合、簡素化のために DB2 Connect を同じマシン上にインストールするか、または CPU サイクルの負荷軽減のために別のマシンにインストールするかを選択できます。

DB2 Connect サーバーにより、複数のクライアントからホスト・データまたは iSeries データに接続することができ、さらにエンタープライズ・データへのアクセスを確立して維持するために必要な手間を大幅に省きます。9 ページの図 1 は、DB2 クライアントが DB2 Connect Enterprise Edition を介してホストまたは iSeries データベース・サーバーへの間接接続を行う環境のための、IBM のソリューションを図示しています。

この例では、DB2 Connect サーバーを、DB2 Connect サーバー・サポート・コンポーネントをインストールした DB2 サーバーに置き換えることができます。

| IBM メインフレーム・データベースに接続するには、ライセンス交付を受けた DB2
| Connect 製品、または DB2 Universal Database Enterprise Server Edition のような、
| DB2 Connect コンポーネントを含むライセンス交付を受けた製品が必要です。DB2
| Run-Time Client を使用して IBM メインフレーム・データベースに接続することは
| できません。



すべてのプロトコルがすべてのプラットフォームでサポートされているとは限りません。

凡例

- * ホスト接続の場合のみ
- ** iSeries の場合
- *** TCP/IP 接続には DB2 for OS/390 V6 またはそれ以降、iSeries V5R1 またはそれ以降、または DB2 for VM V6.1 が必要です。

図 1. DB2 Connect Enterprise Edition

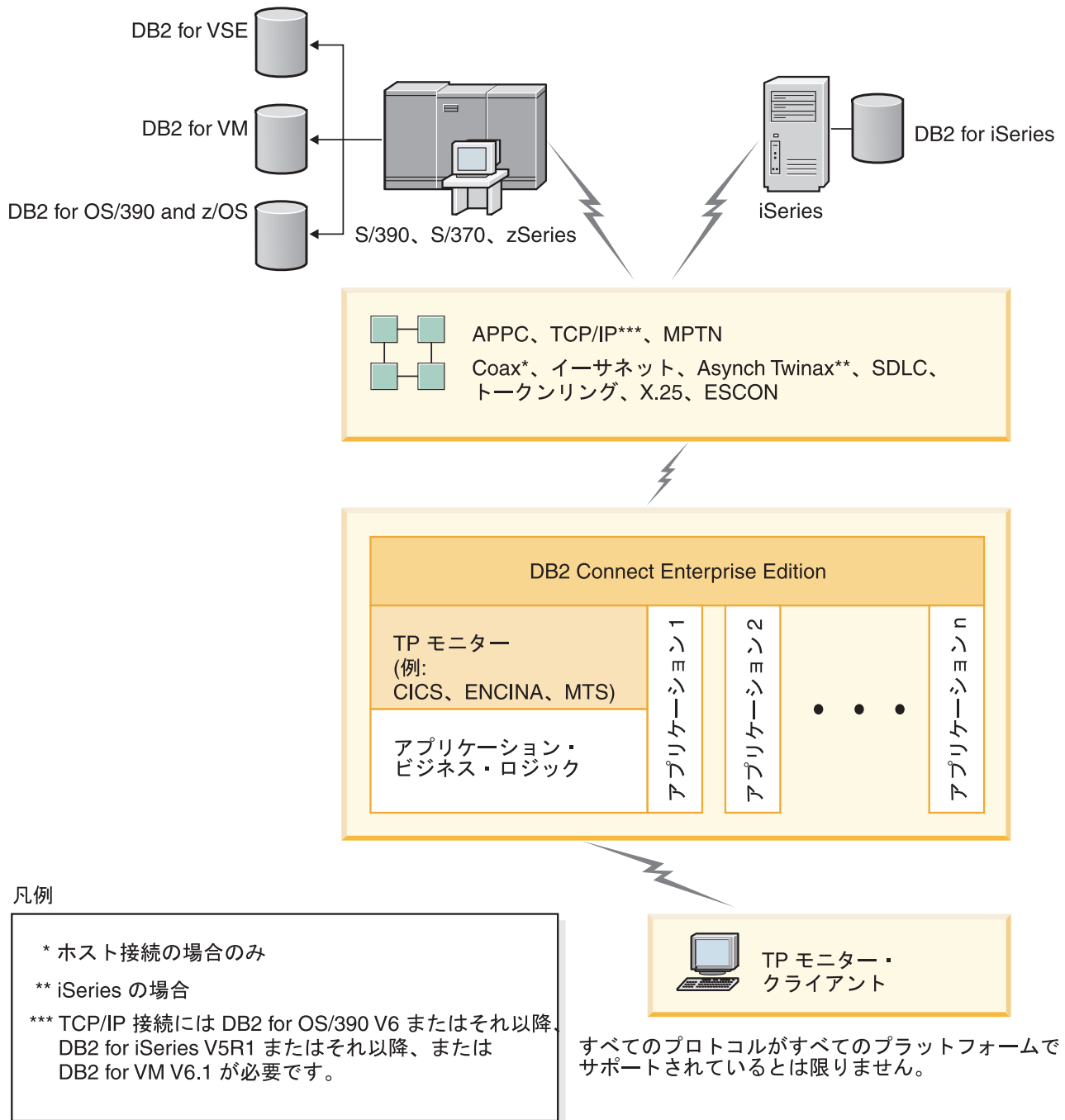


図2. DB2 Connect と共同作業するトランザクション・モニター：

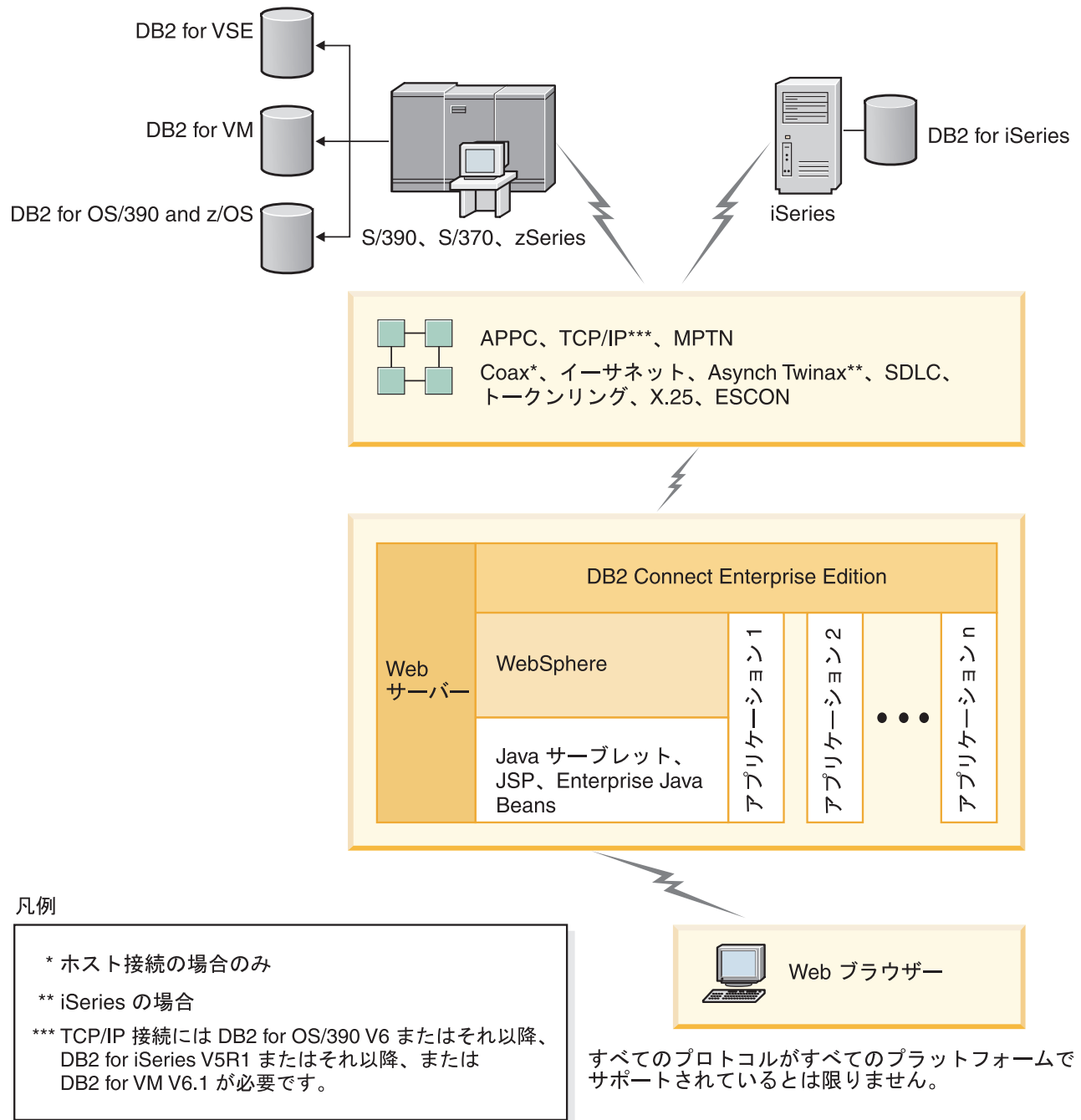


図3. DB2 Connect における WebSphere® および Java サーバー機能性

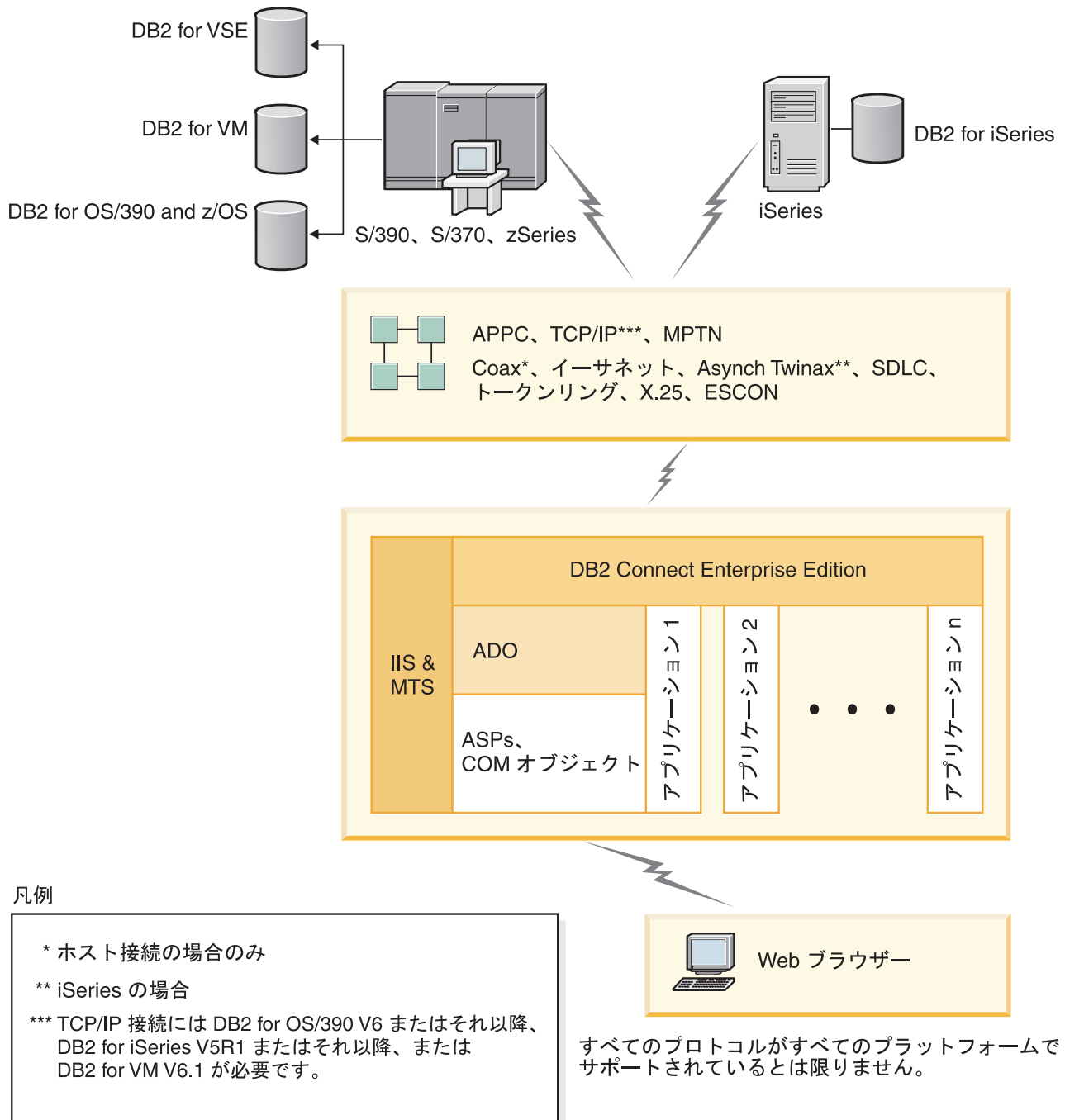


図4. DB2 Connect と Microsoft インターネット情報サーバー (IIS)

関連概念:

- 27 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition: インストールおよび構成の概要』

リモート・クライアントからの DB2 データへのアクセス

DB2[®] クライアントは、クライアント・アプリケーションから 1 つ以上のリモート・データベースにアクセスするためのランタイム環境を提供します。DB2 Administration Client を使用して、DB2 サーバーまたは DB2 Connect[™] サーバーをリモート管理することができます。すべてのアプリケーションは、DB2 クライアントを介してデータベースにアクセスしなければなりません。Java[™] アプレットは、Java 対応ブラウザを介してリモート・データベースにアクセスすることができます。

DB2 クライアントは、次の環境でサポートされます。

- UNIX[®] (AIX、HP-UX、Linux、および Solaris オペレーティング環境)
- Windows[®] 98、Windows ME、Windows NT[®]、Windows 2000、Windows XP (32 ビットおよび 64 ビット)、および Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット)。

関連概念:

- 101 ページの『DB2 クライアント』
- 103 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 102 ページの『DB2 Administration Client』
- 102 ページの『DB2 Application Development Client』

Java を使用した Web から DB2 データへのアクセス

DB2[®] には JDBC (Java[™] Database Connectivity) および Java Embedded SQL (SQLJ) が備えられており、Web から DB2 データベース内のデータにアクセスするアプリケーションを作成できます。

組み込み SQL を含むプログラム言語は、ホスト言語と呼ばれます。Java は、SQL を組み込む方法に大きな影響を与えるという意味で、従来のホスト言語 C、COBOL、および FORTRAN とは異なります。

- SQLJ および JDBC はオープン・スタンダードで、これらにより、他の標準に準拠したデータベース・システムから DB2 Universal Database に SQLJ または JDBC アプリケーションを簡単に移植できます。
- 複合データおよび可変サイズのデータを表す、すべての Java タイプには、特別扱いされる値 null があります。この値は、SQL NULL 状態を表すのに使用され、他のホスト言語に備わっている NULL 標識の代替値を Java プログラムに与えます。
- Java は、元々、異機種間で移植可能なプログラムをサポートするように設計されています (「スーパー移植可能性」または単に「ダウンロード可能」とも言う)。Java タイプのクラス・システムおよびインターフェースと共に、この機能によってコンポーネント・ソフトウェアが使用可能になります。特に、Java で作成された SQLJ 変換プログラムは、許可、スキーマ検査、タイプ検査、トランザクション、およびリカバリー機能などの既存のデータベース機能を利用し、特定のデータベースに合わせて最適化されたコードを生成するために、データベース・ベンダーによって特定されるコンポーネントを呼び出すことができます。

- Java は、静的 SQL を使用するデータベース・アプリケーションのバイナリー移植性を使用可能にする、異機種混成ネットワーク中のバイナリー移植性のために設計されています。
- クライアントのプラットフォームが何であっても、Java が使えるブラウザの、ある任意のシステムにおいて、Web ページ内で JDBC アプレットを実行できます。クライアント・システムには、このブラウザ以外の追加のソフトウェアは必要ありません。クライアントおよびサーバーは、JDBC および SQLJ アプレットおよびアプリケーションの処理を分担します。

DB2 JDBC アプレット・サーバーと DB2 Connect™ サーバーは、Web サーバーと同じマシンに常駐しなければなりません。DB2 JDBC アプレット・サーバーは DB2 クライアントを呼び出して、ローカル、およびリモート・データベースに接続します。アプレットが DB2 データベースへの接続を要求した場合、JDBC クライアントは、Web サーバーが実行されるマシン上の DB2 JDBC アプレット・サーバーへの TCP/IP 接続をオープンします。

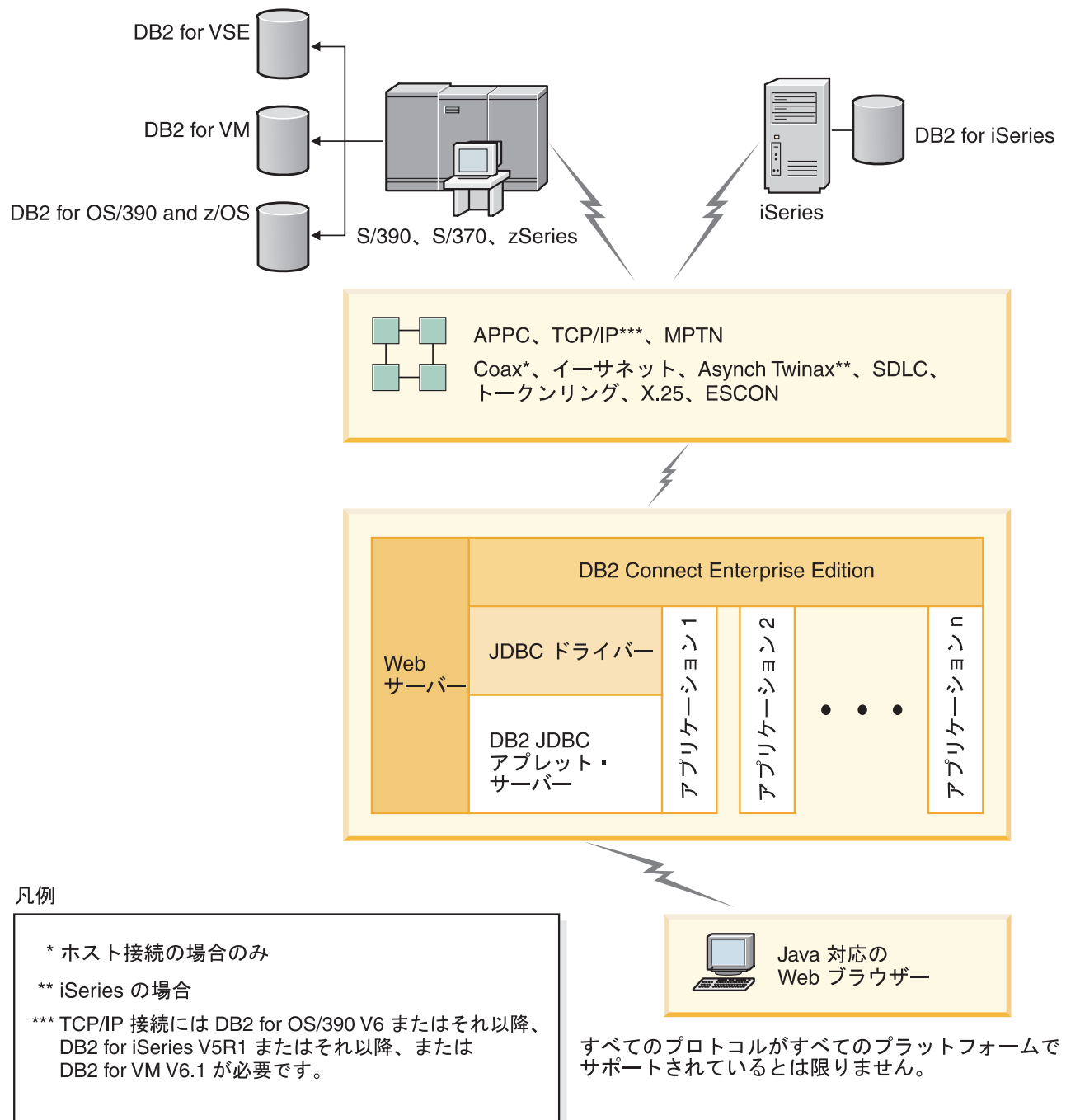


図5. JDBC と DB2 Connect

JDBC および SQLJ アプリケーションは、DB2 クライアントがインストールされている任意のシステムから実行できます。Web ブラウザーと Web サーバーは不要です。

Java 使用可能性の詳細については、Web ページ <http://www.ibm.com/software/data/db2/java/> を参照してください。

JDBC API の詳細は、Web ページ <http://java.sun.com/> を参照してください。

関連概念:

構成アシスタントを使用したデータベース接続の管理

構成アシスタント (CA) は、リモート・サーバーへのデータベース接続を管理するのに役立ちます。これは、クライアントからサーバーへの通信をセットアップする望ましい方法です。

コマンド行プロセッサを使用すると、どんなプラットフォームでも、DB2® クライアントをセットアップできます。

CA を使用すれば、以下のことを行えます。

- アプリケーションによって使用できるようにデータベースをカタログする。次の 3 通りの方法を使えます。
 - データベース管理者から提供されたプロファイルを使って、接続を自動定義します。そのデータベース用のクライアント・アクセスが自動的にセットアップされます。
 - 使用可能なデータベースをネットワークで検索し、いずれかを選びます。プロファイルに定義されているデータベース用のクライアント・アクセスが自動的にセットアップされます。ホストまたは iSeries データベースを定義された DB2 Connect Enterprise Edition サーバーを介する場合を除き、DB2 Connect™ Personal Edition は、ホストまたは iSeries™ データベースを検索できません。
 - 必要な接続パラメーターを入力して、データベースへの接続を手動で構成します。
- カatalogされたデータベースを除去したり、カatalogされたデータベースのプロパティを変更します。
- クライアント用のデータベースおよび構成情報を含むクライアント・プロファイルをエクスポートおよびインポートします。
- システムで識別されたローカルまたはリモート・データベースへの接続をテストします。
- リストでユーティリティまたはバインド・ファイルを選択して、アプリケーションをデータベースにバインドします。
- CLI/ODBC データ・ソースを追加、変更、除去してから、CLI/ODBC 構成設定値を構成します。
- システム上のクライアント構成パラメーターを調整します。パラメーターの選択時には、パラメーターは論理的にグループ分けされ、提案される設定がインターフェースに表示されます。
- データベース・サーバー・パスワードを更新します。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成』
- 129 ページの『第 20 章 DB2 Connect のバインディング・データベース・ユーティリティ』
- 89 ページの『CA を使用した、ホストまたは iSeries データベース・サーバーへの接続の構成』

Administration Server について

DB2® Administration Server (DAS) は、DB2 管理ツールおよび 構成アシスタント (CA) からの要求に応えます。たとえば、DB2 管理ツールによって、サーバーでデータベース・マネージャー構成パラメーターを開始、停止、および設定できます。CA で Administration Server を使用すれば、クライアントでデータベースをカタログすることができます。

Administration Server は、管理および検出したい各サーバーに常駐していなければなりません。Administration Server は、自動的に作成および開始されます。そのデフォルト名は、UNIX® では db2as です。セットアップ・プログラムは、インスタンスが所有するマシンで Administration Server を作成し、自動的にブート時に開始します。デフォルトでは DAS インスタンスは DB2AS ですが、これは「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードを使用して作成されるデフォルト・ユーザー ID です。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DB2 Administration Server』

関連タスク:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DB2 Administration Server の作成』

DB2 管理ツールを使用したインスタンスおよびデータベースの管理

DB2® 管理ツールを使用すると、ローカルまたはリモート・サーバーを管理できます。コントロール・センターを使用して、DB2 インスタンスおよびデータベースの構成、データのバックアップとリカバリー、ジョブのスケジュール設定、およびメディアの管理などのサーバー管理タスクを、すべてグラフィカル・インターフェースから実行します。

コントロール・センターには、DB2 UDB for OS/390® and z/OS™ の付加的なサポートがあります。コントロール・センターから DB2 for OS/390 and z/OS の機能にアクセスする方法は次のとおりです。

1. 次の情報についてシステム管理者に問い合わせてください。
 - a. DB2 UDB (OS/390 版) (バージョン 6) または DB2 UDB for OS/390 and z/OS (バージョン 7 以降) のライセンスがあること。
 - b. 以下のうちの 1 つを使用していること。DB2 Enterprise Server Edition、DB2 Connect Personal Edition、または DB2 Connect™ Enterprise Edition。
2. DB2 Management Clients Package (DB2 (OS/390 版) バージョン 6 および DB2 for OS/390 and z/OS バージョン 7 以降) および DB2 Administration Server (DAS) for OS/390 and z/OS (DB2 for OS/390 and z/OS バージョン 7 以降でのみ使用できます) の FMID を適用します。DB2 (OS/390 版) バージョン 6 サーバーを管理している場合に、DB2 (OS/390 版) バージョン 6 のサブシステムが置かれているのと同じシステムに DB2 Administration Server をインストールすると、System Console Interface、Cloning、および JCL Building and Creation などの、コントロール・センターの特定の機能しか使用することはできません。

DAS は、DB2 for OS/390 and z/OS バージョン 7 サーバーに付属しているオプション・フィーチャーですが、DB2 UDB (OS/390 版) バージョン 6 サーバーと一緒に使用することができます。DB2 for OS/390 and z/OS、DB2 Management Clients Package、および DB2 Administration Server for OS/390 and z/OS のプログラム・ディレクトリーを読んでください。プログラム・ディレクトリーは、各テープまたはカートリッジごとの FMID の内容を識別し、説明しています。またプログラム・ディレクトリーには、インストールの要件と解説も述べられています。

3. プログラム・ディレクトリーの説明どおり、DB2 UDB (OS/390 版) (バージョン 6) または DB2 UDB for OS/390 and z/OS (バージョン 7 以降) への追加のサービスを適用します。
4. IBM® DB2 Universal Database™ コントロール・センター バージョン 8 には、複数のプラットフォーム上の DB2 データベースを管理するのに役立つサポートが備わっています。DB2 UDB for OS/390 and z/OS サブシステムを管理するには、各 DB2 サブシステムごとに一連のストアード・プロシージャー、ユーザー定義関数、およびバッチ・プログラムをインストールする必要があります。

DB2 UDB (OS/390 版) バージョン 6 をインストールする場合、DB2 UDB (OS/390 版) バージョン 6 用の 390 使用可能フィーチャー (JDB661D) をインストールする必要があります。DB2 UDB for OS/390 and z/OS バージョン 7 をインストールする場合、DB2 UDB for OS/390 and z/OS バージョン 7 用の 390 使用可能化フィーチャー (JDB771D) をインストールする必要があります。Cloning および JCL Building and Creation を含め、OS/390 および z/OS 版の DB2 UDB コントロール・センター バージョン 8 のすべての機能を活用したい場合、DB2 for OS/390 and z/OS バージョン 7 のフィーチャーとして付属している DB2 Administration Server (DAS) for OS/390 and z/OS をインストールする必要があります。DB2 Administration Server は、システムごとに 1 回しかインストールする必要はありません。

そのシステムで DB2 UDB (OS/390 版) バージョン 6 も管理する場合、DB2 UDB (OS/390 版) バージョン 6 でサポートされている DB2 UDB コントロール・センター バージョン 8 の機能を使用することができます。これらの製品のインストール方法の詳細は、以下の各製品のプログラム・ディレクトリーを参照してください。

- JDB661D : Program Directory for IBM DB2 UDB for OS/390 DB2 Management Tools package (GI10-8193-02)
- JDB771D : Program Directory for IBM DB2 UDB Server for OS/390 and z/OS DB2 Management Clients package (GI10-8218-00)
- HDA8810 (または HAH8810)

5. ストアード・プロシージャー・アドレス・スペースを使用可能にしたかどうか確認します。
6. DB2 Administration Server が始動していることを確認します。

サーバーでの通信の管理:

コントロール・センターを使うと、サーバーのプロトコル設定値を表示、更新、およびリセットできます。これらの機能にアクセスするには、インスタンスで右マウス・ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから「通信のセットアップ

(Setup communications) オプションを選択します。デフォルトでは、セットアップ・プログラムは、システム上で見つかるほとんどの通信プロトコルを検出し、構成します。

コントロール・センターを使うと、データベース・マネージャー構成ファイルで、サーバーのプロトコル設定値を維持または編集できます。

- データベース・マネージャーのパラメーターを構成するには、インスタンスで右マウス・ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから「**構成 (Configure)**」オプションを選択します。
- クライアントを構成するのに使えるプロファイル中のデータベース情報をエクスポートするには、システムで右マウス・ボタンをクリックし、ポップアップ・メニューから「**サーバー・プロファイルのエクスポート (Export Server Profile)**」オプションを選択します。

Visual Explain を使用しての SQL アクセス・プランの表示:

ホストまたは iSeries™ データベース上でアクセス・プランを生成するのに Visual Explain を使うことはできません。

Visual Explain は、データベース管理者およびアプリケーション開発者が以下のことを行うのに役立ちます。

- 特定の SQL ステートメント用にデータベース・マネージャーのオプティマイザーが選んだアクセス・プランを表示する。
- SQL ステートメントを調整してパフォーマンスを向上させる。
- アプリケーション・プログラムとデータベースを設計する。
- システム・カタログ内の統計も含め、アクセス・プランの詳細をすべて表示する。
- 表に索引を追加するかどうかを決定する。
- アクセス・プランまたは SQL ステートメントのパフォーマンスを分析して、問題の源を識別する。
- ポータブル・スナップショット機能を使って、任意のリモート DB2 サーバーからスナップショットを表示する。
- サポートされるすべての DB2 構成上での照会のアクセス・プランを表示する。

関連タスク:

- 19 ページの『DB2 Application Development Client を使用したアプリケーションの開発』

DB2 Application Development Client を使用したアプリケーションの開発

DB2 Application Development Client は、データベース・アプリケーション開発者の要件を満たすよう設計されたツールの集まりです。これには、文字ベース、マルチメディア、またはオブジェクト指向のアプリケーションを作成するためのライブラリー、ヘッダー・ファイル、文書化された API、およびサンプル・プログラムが含まれます。

プラットフォーム固有の DB2 Application Development Client は、各サーバーの CD-ROM に収録されています。さらに、開発者エディションのパッケージには、サポートされている複数のオペレーティング・システム用の Application Development Client が含まれています。たとえば、パーソナル開発者エディションのパッケージには、Windows、および Linux 用のアプリケーション開発 CD-ROM が含まれています。さらに、Universal Developer's Edition のパッケージには、サポートされるすべてのオペレーティング・システム用のアプリケーション開発 CD-ROM が含まれています。

これらのアプリケーションは、DB2 クライアントを介してすべてのサーバーにアクセスすることができ、また DB2 Connect 製品 (または DB2 Enterprise Server Edition に付属している DB2 Connect 機能) を使用すれば、DB2 UDB for iSeries、DB2 for OS/390 and z/OS、および DB2 for VSE & VM データベース・サーバーにアクセスすることもできます。

DB2 Application Development Client では、次のようなインターフェースを使用するアプリケーションを開発することができます。

- 組み込み SQL
- コール・レベル・インターフェース (CLI) 開発環境 (Microsoft の ODBC と互換性があります)
- Java データベース・コネクティビティ (JDBC)
- Java Embedded SQL (SQLj)
- 管理機能を使用して DB2 データベースを管理する、DB2 アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API)

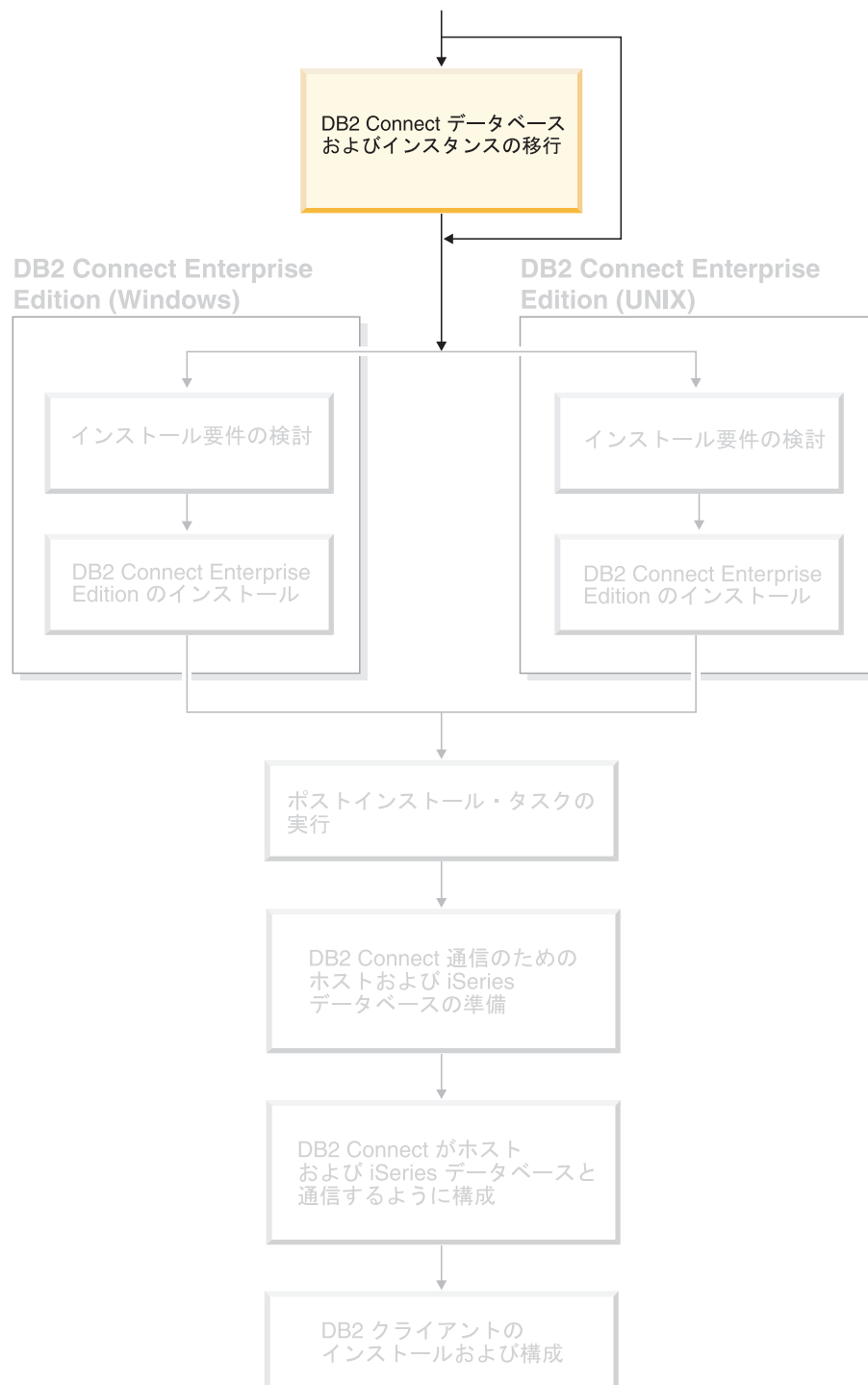
関連概念:

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『DB2 Developer's Edition 製品』

関連資料:

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Application Development Client』

第 2 部 DB2 Connect の移行



第 3 章 DB2 Connect の旧バージョンからの移行

DB2 Connect バージョン 8 は、DB2 バージョン 6 およびバージョン 7 で作成された DB2 データベースとインスタンスの移行をサポートします。これらのバージョンのいずれかから DB2 Connect バージョン 8 へ移行する場合には、DB2 のインストールの前に、ご使用のデータベースおよびインスタンスを移行に備える必要があります。

DB2 Connect Enterprise Edition (EE) はホスト・データベース接続のためのサーバーであるため、DB2 Connect EE サーバー・インスタンスの中に置くことのできるデータベースは、DB2 トランザクション・マネージャー・データベースのみです。このデータベースは、DB2 統合トランザクションの状態情報を保管するために DB2 によって使用されます。

UNIX プラットフォームで、各自のインスタンスのドロップと再作成を防ぐには、DB2 Connect インスタンスを移行する必要があります。このインスタンスは、すべてのリモート・ノードおよびデータベース上で再カタログする必要があるからです。各自のインスタンスをドロップおよび再作成すると、そのインスタンスのドロップの前に存在した NODE、DCS、または DB カタログを再カタログする必要が生じます。

前提条件:

root 権限を持つユーザーとしてログインする必要があります。

db2imigr コマンドを実行する前に、次の事柄が勧められています。

- /tmp フリー・スペースが 20 MB なければなりません。インスタンス移行トレース・ファイルが /tmp に書き込まれます。
- **db2imigr** を実行する前に、**db2ckmig** を手動で実行してみて、問題があれば解決しておくこと。**db2imigr** は **db2ckmig** が問題を検出する限り、移行を実行しません。

制約事項:

DB2 Connect バージョン 6.x またはバージョン 7.x からの移行のみサポートされます。

手順:

以下を行って、インスタンスを移行します。

1. **db2imigr** コマンドを使用して、インスタンスを移行します。

```
DB2DIR/instance/db2imigr [-u fencedID] InstName
```

ここで、

DB2DIR

AIX では /usr/opt/db2_08_01、UNIX ベースのオペレーティング・システム以外では /opt/IBM/db2/V8.1 です。

-u fencedID

fenced ユーザー定義関数 (UDF) およびストアド・プロシージャが稼働するユーザー。このパラメーターが必要なのは、クライアント・インスタンスからサーバーに移行する場合だけです。

InstName

インスタンス所有者のログイン名です。

関連概念:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『移行に関する推奨事項』

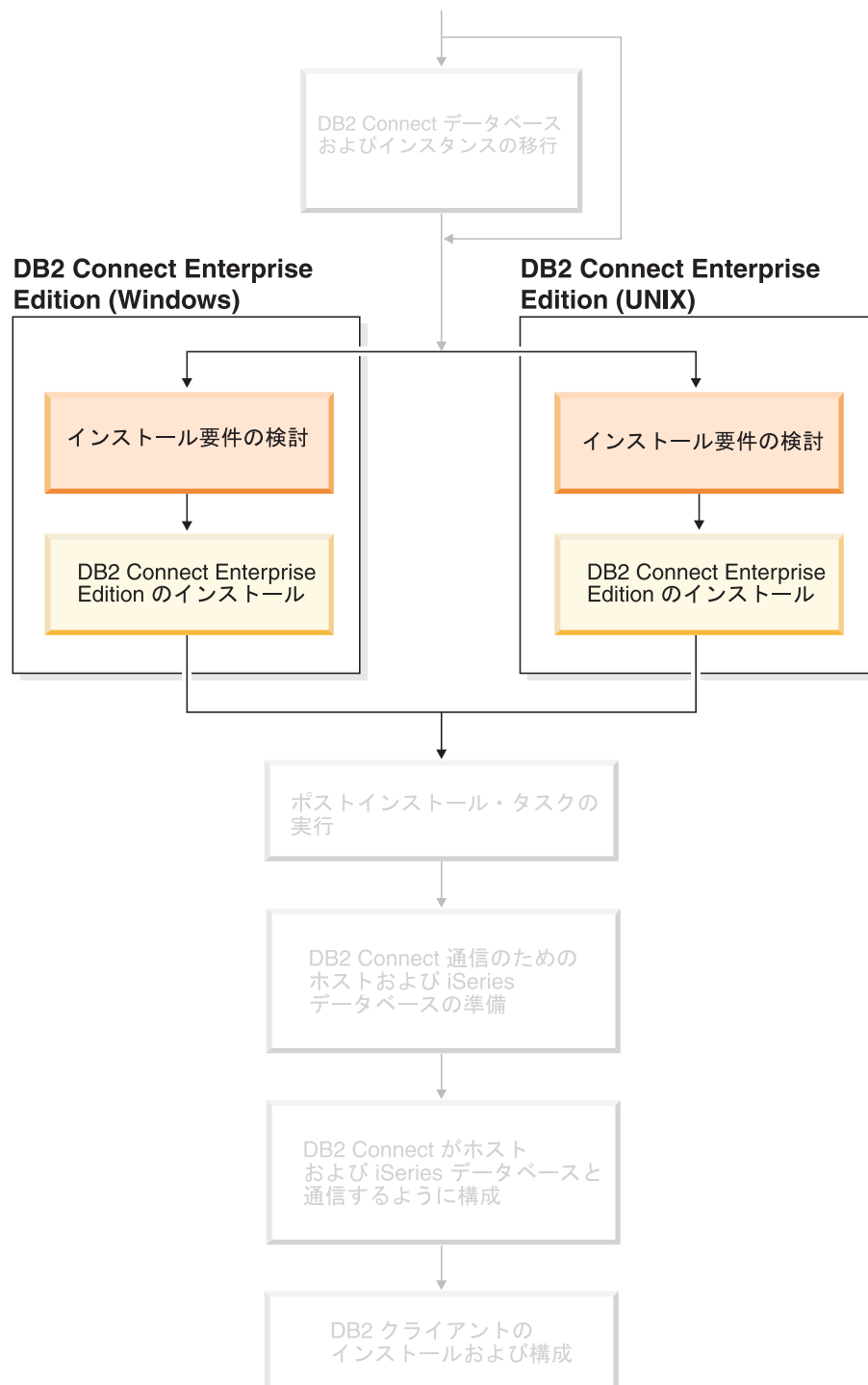
関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 ファイルのためのリンクの作成』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 の移行の前のデータベースのバックアップ』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『データベースが移行できる状態にあることの確認』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『データベースの移行』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『Explain 表の移行』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『インスタンスの移行 (UNIX)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB の移行 (Windows)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 UDB サーバーの移行 (UNIX)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『移行の注視点』

第 3 部 DB2 Connect のインストール



このセクションの情報を活用して、インストールのそれぞれのステップを計画できます。前提条件のソフトウェアとその修正レベル、オペレーティング・システム、および必要な通信プロトコルは、すべて 1 つの表にまとめられています。この表に

より、システムが DB2 Connect のインストールの要件に適合しているかどうかを簡単に調べて、インストール手順に進むことができます。

DB2 Connect の以前のバージョンから移行する場合、23 ページの『第 3 章 DB2 Connect の旧バージョンからの移行』を参照してください。

DB2 Connect 製品を手動でインストールする場合は、DB2 製品を手動でインストールする方法について「インストールおよび構成 補足」を参照してください。

このセクションの対象読者

- DB2 Connect システムをインストールし構成するテクニカル・スタッフ

第 4 章 インストールの概要

DB2 Connect Enterprise Edition: インストールおよび構成の概要

DB2[®] Connect のセットアップは、複数のステップから成るプロセスです。DB2 Connect[™] Enterprise Edition には多くの場合、ホストまたは iSeries[™] データベース・サーバーに接続される数百または数千のクライアントがインストールされます。そのため、下記に概略されているテスト・インストールを使用することをお勧めします。テスト構成が安定していることを確認できたら、その構成を DB2 Connect および社内クライアントを不在インストールするためのテンプレートとして使用することができます。

DB2 Connect Enterprise Edition をインストールおよび構成するための標準的なステップは、次のとおりです。

1. DB2 Connect をネットワーク内でどのように活用したいかを決定します。
2. ハードウェア前提条件とソフトウェア前提条件を、ワークステーションでもホスト・データベース・サーバーでも満たしていることを確認します。
3. ホストまたは iSeries データベース・サーバーが、DB2 Connect サーバーからの接続を受け入れられるように構成されていることを確認します。
4. DB2 Connect のソフトウェアをインストールします。現在のワークステーションを使用して、ホストおよび iSeries の接続を構成および検査します。
5. インストールが完了したならば、DB2 Connect とホストまたは iSeries データベース・システムとの間の接続を確立します。DB2 Connect は、すべての TCP/IP 接続とほとんどの SNA 接続を検出して、構成することができます。構成アシスタント (CA) を使って、ホストまたは iSeries データベースを構成することができます。
6. DB2 Connect に付属しているプログラムおよびユーティリティを、ホストまたは iSeries データベースへバインドします。
7. 接続をテストします。
8. (オプション) マルチサイト更新フィーチャーを使用可能にします。
9. WebSphere[®]、トランザクション・モニター、または独自に作成したアプリケーション・サーバー・ソフトウェアを使用する計画がある場合には、それらの製品またはアプリケーションをインストールしてください。WebSphere のインストールについての情報は、DB2 Connect Enterprise Edition 製品パッケージの一部としてこれらの製品に付属の資料を参照してください。他の製品についての情報は、それらの製品に付属しているインストール資料を参照してください。
10. DB2 クライアントをインストールし、構成します。このワークステーションを使用することによって、DB2 クライアントからホストおよび iSeries データベース・サーバーへの接続をテストしたり、この接続を使用するアプリケーションをテストしたりします。
11. 構成アシスタントを使用して、DB2 Connect 経由でホストまたは iSeries システムにクライアントを接続します。

12. ホストおよび iSeries データベース・サーバーに接続するアプリケーションを使用することになるすべてのエンド・ユーザー・ワークステーションに、DB2 クライアントをインストールします。
13. これで、DB2 Connect とすべてのアプリケーションを使用する準備が整いました。アプリケーション開発に使用するワークステーションには、DB2 Application Development Client をインストールしてください。
14. ワークステーションを使用して DB2 UDB for OS/390® and z/OS™ または DB2 Universal Database for UNIX®, Windows® NT、Windows 2000、Windows XP、Windows Server 2003 サーバーを使用したい場合は、DB2 Administration Client をインストールしてください。

関連概念:

- 101 ページの『DB2 クライアント』

関連タスク:

- 「DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」の『コントロール・センターを使ったマルチサイト更新の使用可能化』
- 129 ページの『第 20 章 DB2 Connect のバインディング・データベース・ユーティリティー』
- 89 ページの『CA を使用した、ホストまたは iSeries データベース・サーバーへの接続の構成』

第 5 章 インストール要件

ディスクおよびメモリーの要件 (Windows および UNIX)

ディスク要件:

この製品に必要なディスク・スペースは、選択するインストールのタイプ、およびご使用のファイル・システムのタイプに応じて異なります。DB2 セットアップ・ウィザードは、標準、コンパクト、またはカスタム・インストールの際に選択したコンポーネントに基づいて、動的なサイズの見積もりを行います。

Windows の場合、FAT (File Allocation Table) ドライブでは、クラスター・サイズが大きいため、NTFS (New Technology File System) ドライブよりもかなり大きなスペースが必要になります。

必須のソフトウェア、通信製品、およびドキュメンテーションのために必要なディスク・スペースの余裕をとるよう気をつけてください。

メモリー要件:

DB2 UDB は 256 MB 以上の RAM を必要とします。GUI ツールを使用する場合、512MB の RAM が推奨されます。メモリー要件を判断するときは、以下の点に注意してください。

- DB2 クライアント・サポートについては、これらのメモリー要件は 5 つの並行クライアント接続を基本としています。5 クライアント接続ごとに、さらに 16 MB の RAM が必要です。
- システム上で実行される他のソフトウェアのために、追加のメモリーが必要です。
- DB2 GUI ツールのパフォーマンスを高めるために、追加のメモリーが必要になる場合があります。
- パフォーマンス上の個々の要件によって、必要なメモリー量は異なります。
- メモリー要件は、データベース・システムのサイズおよび複雑さの影響で変わります。
- メモリー要件は、データベース・アクティビティーの増加、およびシステムにアクセスするクライアントの数の影響で変わります。
- Linux では、最低でも RAM の 2 倍の SWAP スペースが推奨されています (要求されているわけではありません)。

インストール要件 (Windows)

DB2 Connect Enterprise Edition (Windows) のインストール要件

DB2 Connect Enterprise Edition をインストールするには、以下の要件を満たさなければなりません。

ハードウェア要件

32 ビット DB2 製品では、Pentium または Pentium 互換 CPU が必要です。64 ビット DB2 製品では、Itanium または Itanium 互換 CPU が必要です。

オペレーティング・システム要件

以下のいずれかです。

- Windows NT バージョン 4 (Service Pack 6a) 以降
- Windows 2000
- Windows XP (テストおよび開発用)
- Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット)

次のいずれかの環境で DB2 アプリケーションを実行するには、Windows 2000 Service Pack 3 と Windows XP Service Pack 1 が必要です。

- ODBC を使用する COM+ オブジェクトを持つアプリケーション
- OLE DB リソース・プールを使用不可にした状態で、ODBC に対して OLE DB Provider を使用するアプリケーション

ご使用のアプリケーション環境が上記の条件に合うかどうか分からない場合は、適切な Windows サービス・レベルをインストールすることをお勧めします。

COM+ に関連したこの問題については、次の Microsoft Knowledge Base の記事をご覧ください。

- <http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=KB;EN-US;306414>

DB2 サーバー自体または DB2 製品の一部として出荷されているアプリケーションを実行するためには、Windows 2000 Service Pack 3 と Windows XP Service Pack 1 は必要ありません。

ソフトウェア要件

- MDAC 2.7 が必要です。「DB2 セットアップ (DB2 Setup)」ウィザードは、MDAC 2.7 がまだインストールされていない場合はインストールします。
- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。
- オンライン・ヘルプを表示するにはブラウザが必要です。

通信要件

- APPC、TCP/IP、および MPTN (TCP/IP を介した APPC) を使用できません。

- SNA (APPC) 接続の場合、次に示す通信用ソフトウェア製品のいずれかが必要です。

注: 今後のリリースの DB2 Connect では、SNA がサポートされない可能性があるため、TCP/IP に切り替えるべきかどうかを検討する必要があります。SNA の場合、構成に関するかなりの知識を必要とし、構成プロセスそのものがエラーを生じやすくなります。TCP/IP のほうが、簡単に構成することができ、保守コストも低く、しかもパフォーマンスに優れています。

- Windows NT の場合:
 - IBM Communications Server バージョン 6.1.1 以降
 - IBM パーソナル・コミュニケーションズ バージョン 5.7 以降
 - Windows 2000 の場合:
 - IBM Communications Server バージョン 6.1.1 以降
 - IBM パーソナル・コミュニケーションズ バージョン 5.7 以降
 - Microsoft SNA Server バージョン 3 (Service Pack 3 適用) 以降
- Windows Server 2003 64 ビットは、SNA をサポートしていません。

関連概念:

- 「DB2 Connect Personal Edition 概説およびインストール」の『非管理者による DB2 Connect (Windows) のインストール』

関連タスク:

- 49 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Windows)』

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 サーバーのインストールに必要なユーザー・アカウント (Windows)

Windows NT、Windows 2000、Windows XP、または Windows Server 2003 にインストールする場合には、以下の DB2 サーバー・ユーザー・アカウントが必要です。

- インストール・ユーザー・アカウント
- 1 つ以上のセットアップ・ユーザー・アカウント
 - DB2 Administration Server (DAS) ユーザー・アカウント
 - DB2 インスタンス・ユーザー・アカウント

インストール・ユーザー・アカウントは、DB2 セットアップ・ウィザードの実行に先立って定義する必要があります。セットアップ・ユーザー・アカウントは、インストールの前に定義することもできるし、DB2 セットアップ・プログラムに作成させることもできます。

すべてのユーザー・アカウント名は、ご使用のシステムの命名規則と DB2 命名規則に従ったものでなければなりません。

Windows 上での DB2 拡張セキュリティ:

DB2 は現在、拡張された Windows セキュリティを提供しています。任意のユーザー ID を使用して DB2 をインストールできますが、そのユーザー ID が DB2ADMNS または DB2USERS グループに属するのではない限り、そのユーザー ID は DB2 コマンドを実行できません。

DB2 インストーラーはこれら 2 つの新しいグループを作成します。新しい名前を使用するか、デフォルト名を受け入れることができます。

このセキュリティ機能を使用可能にするには、DB2 のインストール時に、DB2 のオブジェクトに関するオペレーティング・システムのセキュリティを有効にするパネルで、オペレーティング・システムのセキュリティを有効にするチェック・ボックスを選択している必要があります。DB2 管理者グループ・フィールドと DB2 ユーザー・グループ・フィールドで、デフォルト値を受け入れてください。デフォルトのグループ名は DB2ADMNS と DB2USERS です。既存のグループ名と競合する場合には、グループ名を変更するようプロンプトが出されます。必要であれば、ユーザー独自の値を指定できます。

DB2 サーバー・ユーザー・アカウント:

インストール・ユーザー・アカウント

ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントは、インストールを実行するために必要です。ユーザー・アカウントは、インストールを実行するマシンの管理者グループに属していなければなりません。

ドメイン・アカウントの場合、DB2 サーバー上のユーザー ID を確認するには、インストール・ユーザー ID は、アカウントが作成されるドメイン上のドメイン管理者グループに属していなければなりません。

組み込み LocalSystem アカウントを使用して、DB2 UDB Enterprise Server Edition 以外のすべての製品のインストールを実行することもできます。

DB2 Administration Server (DAS) のユーザー・アカウント

ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントは、DB2 Administration Server (DAS) に必要です。

応答ファイル・インストールを実行している場合には、応答ファイル内のローカル・システム・アカウントも指定できます。詳細については、db2¥windows¥samples ディレクトリーにあるサンプル応答ファイルを参照してください。

DB2 Administration Server (DAS) は、GUI ツールをサポートするために使用される特殊 DB2 管理サービスで、ローカルおよびリモート DB2 サーバー上の管理作業を援助します。DAS には、DAS サービスの開始時にコンピューターに DAS サービスをログオンするために使用される、ユーザー・アカウントが割り当てられています。

DAS ユーザー・アカウントは、DB2 をインストールする前に作成することもできるし、DB2 セットアップ・ウィザードに作成させることもできます。DB2 セットアップ・ウィザードに新規ドメイン・ユーザー・アカウントを作成させたい場合には、インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントが、ドメイン・ユーザー・アカウントを作成する権限を持っている必要があります。ユーザー・アカウントは、インストールを実行する

マシンの管理者 グループに属していなければなりません。このアカウントは、以下のユーザー権限を付与されます。

- オペレーティング・システムの一部として機能
- デバッグ・プログラム
- トークン・オブジェクトの作成
- メモリー内のロックされたページ
- サービスとしてログオン
- クォータの増加
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

メモリー特権内の「ロック」ページは、AWE (Advanced Windowing Extensions) サポートに必要です。「デバッグ・プログラム」特権が必要なのは、DB2 グループ検索がアクセス・トークンを使用するよう明示的に指定された場合に限られます。

ユーザー・アカウントがインストール・プログラムによって作成されると、そのユーザー・アカウントにはこれらの特権が付与されます。ユーザー・アカウントがすでに存在する場合にも、そのアカウントにこれらの特権が付与されます。インストールが特権を付与する場合には、それらの特権のあるものは、特権が付与されたアカウントが最初にログオンする時、またはリブート時に初めて有効になります。

ご使用の環境内のそれぞれの DB2 システム上の DAS ユーザーに、SYSADM 権限を与えることをお勧めします。そうすれば、必要であれば、それが他のインスタンスを開始したり停止したりすることができます。デフォルトでは、管理者 グループに参加しているユーザーには SYSADM 権限があります。

DB2 インスタンス・ユーザー・アカウント

ローカルまたはドメイン・ユーザー・アカウントは、DB2 インスタンスに必要です。どの DB2 インスタンスにも、インスタンスの作成時に割り振られる 1 つのユーザーがあります。インスタンスの開始時に、DB2 はこのユーザー名でログオンします。

組み込み LocalSystem アカウントを使用して、DB2 UDB Enterprise Server Edition 以外のすべての製品のインストールを実行することもできます。

DB2 インスタンス・ユーザー・アカウントは、DB2 をインストールする前に作成することもできるし、DB2 セットアップ・ウィザードに作成させることもできます。DB2 セットアップ・ウィザードに新規ドメイン・ユーザー・アカウントを作成させたい場合には、インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントが、ドメイン・ユーザー・アカウントを作成する権限を持っている必要があります。ユーザー・アカウントは、インストールを実行するマシンの管理者 グループに属していなければなりません。このアカウントは、以下のユーザー権限を付与されます。

- オペレーティング・システムの一部として機能
- デバッグ・プログラム
- トークン・オブジェクトの作成
- クォータの増加

- メモリー内のロックされたページ
- サービスとしてログオン
- プロセス・レベル・トークンの置き換え

メモリー特権内の「ロック」ページは、AWE (Advanced Windowing Extensions) サポートに必要です。「デバッグ・プログラム」特権が必要なのは、DB2 グループ検索がアクセス・トークンを使用するよう明示的に指定された場合に限られます。

ユーザー・アカウントがインストール・プログラムによって作成されると、そのユーザー・アカウントにはこれらの特権が付与されます。ユーザー・アカウントがすでに存在する場合にも、そのアカウントにこれらの特権が付与されます。インストールが特権を付与する場合には、それらの特権のあるものは、特権が付与されたアカウントが最初にログオンする時、またはリブート時に初めて有効になります。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『ユーザー、ユーザー ID、およびグループの命名規則』

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『単一パーティションのインストール (Windows)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『パーティション・インストール (Windows)』

インストール要件 (UNIX)

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (AIX)

DB2 Connect Enterprise Edition をインストールするには、以下の要件を満たさなければなりません。

ハードウェア要件

- IBM RISC/6000
- eServer pSeries

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

DB2 Connect Enterprise Edition は、以下で使用することができます。

バージョン 4.3.3 (32 ビット)

- 保守レベル 9 と、IY22308 および IY32690 の APAR、または
- 保守レベル 10 またはそれ以降、および APAR IY33024 (ML-10 には IY22308 が含まれている)
- 保守レベル 11 で APAR 必要なし

バージョン 5.1.0 (32 ビット)

- 保守レベル 2 またはそれ以降、および APAR IY31254、IY32217、IY32905、IY29345 および IY31080、または
- 保守レベル 3 またはそれ以降

バージョン 5.1.0 (64 ビット)

- 保守レベル 2 またはそれ以降、および APAR IY31254、IY32217、IY32905、IY33023、IY29345、IY32466 および IY31080、または
- 保守レベル 3 またはそれ以降

バージョン 5.2.0 (32 ビットおよび 64 ビット)

現在のところ APAR は必要ありません。

注: `instfix -v -i -k <APAR>` コマンドを使用して、特定の APAR がシステムにインストールされているかどうかを照会できます。たとえば、`instfix -v -i -k IY31254`。

次の AIX ファイル・セットは、英語以外の言語で DB2 をインストールまたは実行するのに必要です。

- X11.fnt.ucs.ttf (AIX Windows Unicode TrueType フォント)
- x1C.rte 5.0.2.x
- x1C.rte 6.0
- アジア諸国の言語の場合、次のファイル・セットも必要です。
 - X11.fnt.ucs.ttf_CN (zh_CN または Zh_CN 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_KR (ko_KR 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_TW (zh_TW または Zh_TW 用)
- AIX バージョン 4.3.3 では、次のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix43.rte 5.0.2.x
 - x1C.aix43.rte 6.0
 - OpenGL.OpenGL_X.rte.base 4.3.3.76
 - OpenGL.OpenGL_X.rte.soft 4.3.3.75
 - X11.adt.lib 4.3.3.10
- AIX バージョン 5.x では、次のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix50.rte 5.0.2.x
 - x1C.aix50.rte 6.0

AIX ファイル・セットは、<http://techsupport.services.ibm.com/server/fixes> からダウンロードできます。

ソフトウェア要件

DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。

Kerberos 認証を使用する場合には、IBM Network Authentication Service クライアント v1.3 またはそれ以降を、AIX V5.2 またはそれ以降上で実行していることが必要です。

通信要件

APPC、TCP/IP、および MPTN (TCP/IP を介した APPC) を使用できます。

- TCP/IP 接続の場合、追加ソフトウェアは必要ありません。
- SNA (APPC) 接続の場合、次に示す通信用ソフトウェア製品が必要です。
 - IBM eNetwork Communications Server for AIX バージョン 6.1 またはそれ以上

注: 今後のリリースの DB2 Connect では、SNA がサポートされない可能性があるため、TCP/IP に切り替えるべきかどうかを検討する必要があります。SNA の場合、構成に関するかなりの知識を必要とし、構成プロセスそのものがエラーを生じやすくなります。TCP/IP のほうが、簡単に構成することができ、保守コストも低く、しかもパフォーマンスに優れています。

- LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サポートを使用するには、IBM SecureWay Directory Client V3.2.1 またはそれ以降が必要です。

関連概念:

- 41 ページの『IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)』

関連タスク:

- 51 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (AIX)』

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (HP-UX)

DB2 Connect Enterprise Edition をインストールするには、以下のオペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の要件を満たす必要があります。

ハードウェア要件

- HP 9000 シリーズ 700 または 800 システム
- HP Integrity シリーズ・サーバー

オペレーティング・システム要件

DB2 Connect Enterprise Edition は、以下で実行することができます。

以下をインストール済みの PA-RISC 2.x (PA-8x00) プロセッサを持つシステム用の HP-UX 11i (11.11)

- 2001 年 12 月 GOLDBASE11i バンドル
- 2001 年 12 月 GOLDAPPS11i バンドル
- パッチ PHSS_26560、PHKL_28489、および PHCO_27434
- Java SDK 1.3.1 用パッチ。必要なパッチについては、<http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html> を参照してください。

DB2 Connect Enterprise Edition は、パッチ PHKL_30065 を適用した Itanium ベースのシステム用の HP-UX バージョン 11i v2 (B.11.23) 上で実行できます。

ソフトウェア要件

オンライン・ヘルプを表示するにはブラウザが必要です。

DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。

通信要件

APPC、TCP/IP、および MPTN (TCP/IP を介した APPC) を使用できます。

- TCP/IP 接続の場合、追加ソフトウェアは必要ありません。
- SNA (APPC) 接続のためには、SNAplus2 Link R6.11.00.00 または SNAplus2 API R6.11.00.00 が必要です。今後のリリースの DB2 Connect では、SNA がサポートされない可能性があるため、TCP/IP に切り替えるべきかどうかを検討する必要があります。SNA の場合、構成に関するかなりの知識を必要とし、構成プロセスそのものがエラーを生じやすくなります。TCP/IP のほうが、簡単に構成することができ、保守コストも低く、しかもパフォーマンスに優れています。

関連概念:

- 41 ページの『IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)』

関連タスク:

- 54 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (HP-UX)』

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (Linux)

DB2 Connect Enterprise Edition をインストールするには、以下のハードウェア、分散、ソフトウェア、および通信の要件を満たす必要があります。

ハードウェア要件

以下のプロセッサのいずれかでもかまいません。

- x86 互換のもの (Intel、AMD、または Cyrix)。
- 64 ビット・バージョンの Linux 用の Intel Itanium プロセッサ (IA64)。
- AMD 64-bit
- S/390 9672 Generation 5 またはそれ以降、Multiprise 3000
- IBM eServer zSeries
- Linux をサポートする IBM eServer iSeries
- Linux をサポートする IBM eServer pSeries

分散要件

サポート・レベルの Linux に関する最新の技術情報を調べるには、ブラウザで <http://ibm.com/db2/linux/validate> を参照してください。

注: DB2 31-bit for Linux390 は、Linux390 64-bit オペレーティング・システム上ではサポートされません。 DB2 64-bit for Linux390 は、Linux390 31-bit オペレーティング・システム上ではサポートされません。 Linux390 64-bit オペレーティング・システム上では、 DB2 64-bit for Linux390 64-bit オペレーティング・システム・イメージを使用してください。 Linux390 31-bit オペレーティング・システム上では、 DB2 31-bit for Linux390 31-bit オペレーティング・システム・イメージを使用してください。

ソフトウェア要件

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。
- Kerberos 認証を使用する場合には、以下のファイルセットを使用する、Red Hat Enterprise Linux Advanced Server 2.1 (32 ビット Intel のみ) が必要です。
 - krb5-libs
 - krb5-workstation
- オンライン・ヘルプを表示するにはブラウザが必要です。

通信要件

TCP/IP 接続の場合、追加ソフトウェアは必要ありません。

関連概念:

- 41 ページの『IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)』

関連タスク:

- 56 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Linux)』

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (Solaris オペレーティング環境)

DB2 Connect Enterprise Edition をインストールするには、以下のオペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の要件を満たす必要があります。

ハードウェア要件

Solaris オペレーティング環境 UltraSPARC ベースのコンピューター

オペレーティング・システム要件

DB2 Enterprise Server Edition は、次のバージョンの Solaris オペレーティング環境でサポートされます。

- Solaris オペレーティング環境 7 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106327-10
- Solaris オペレーティング環境 7 (64 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106300-11
- Solaris オペレーティング環境 8 (32 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108434-03 および 108528-12

- Solaris オペレーティング環境 8 (64 ビット) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108435-03 + 108434-03 および 108528-12
- Solaris オペレーティング環境 9 (32 ビット)
- Solaris オペレーティング環境 9 (64 ビット)

「推奨 & セキュリティー・パッチ」は、<http://sunsolve.sun.com> Web サイトから入手できます。SunSolve Online Web サイトで、左側のパネルで「Patches」メニュー項目をクリックします。

さらに J2SE Solaris オペレーティング環境 Patch Cluster も必要です。

64 ビット Fujitsu PRIMEPOWER システムで DB2 を使用するには、以下も必要になります。

- Solaris オペレーティング環境 8 KU15 921040-01
- Solaris オペレーティング環境 9 FCS 912041-01

次のソフトウェアは Solaris オペレーティング環境に DB2 をインストールするために必要です。

- SUNWlibC

ソフトウェア要件

DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。

Kerberos 認証を使用する場合には、SEAM v1.0.1 を使用した Solaris オペレーティング環境 8 またはそれ以上が必要です。SEAM v1.0.1 は、Solaris オペレーティング環境 8 Admin Pack に組み込まれています。

通信要件

APPC または TCP/IP を使用することができます。

- TCP/IP 接続の場合、追加ソフトウェアは必要ありません。
- APPC (CPI-C) 接続の場合は、SNAP-IX for Solaris オペレーティング環境 V7.02 が必要です。

注: 今後のリリースの DB2 Connect では、SNA がサポートされない可能性があるため、TCP/IP に切り替えるべきかどうかを検討する必要があります。SNA の場合、構成に関するかなりの知識を必要とし、構成プロセスそのものがエラーを生じやすくなります。TCP/IP のほうが、簡単に構成することができ、保守コストも低く、しかもパフォーマンスに優れています。

- DB2 Connect は、以下の場合に Sun クラスタ上でサポートされます。
 - ホストに対するプロトコルが TCP/IP (SNA でない) である。
 - 2 フェーズ・コミットを使用しない。ユーザーが共用ディスク上で SPM ログを構成し (これは、*spm_log_path* データベース・マネージャー構成パラメーターを使えば可能です)、そしてフェイルオーバー・システムにそれと同一の TCP/IP 構成 (同じホスト名、IP アドレスなど) を備えれば、この制約は緩和されます。

関連概念:

- 41 ページの『IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)』

関連タスク:

- 59 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Solaris オペレーティング環境)』

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

第 6 章 プリインストール・タスク

IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)

DB2[®] が DB2 コントロール・センターを使用したり、ストアード・プロシージャやユーザー定義関数などの Java アプリケーションを作成および実行したりするには、IBM[®] Developer Kit for Java[™] (SDK) 1.3.1、SDK 1.4.1、または SDK 1.4.2 が必要です (ご使用のオペレーティング・システムによって異なる)。IBM Software Developer's Kit (SDK) は、HP-UX JDK および Solaris オペレーティング環境 JDK とともにサポートされます。

ハイブリッド・プラットフォームは、同じインストールで 32-bit および 64-bit のインスタンス・サポートを取得するプラットフォームです。ハイブリッド・プラットフォーム上では、SDK の 32-bit バージョンが DB2 製品インストール中にインストールされます。64-bit バージョンはインストールされません。SDK の 64-bit バージョンは別の CD-ROM で出荷されます。ハイブリッドでないプラットフォーム上では、DB2 製品インストール中に、31-bit、32-bit、または 64-bit のうちの適切な SDK がインストールされます。

64-bit SDK は、ハイブリッドでない 64-bit プラットフォーム上では、DB2 製品 CD-ROM の一部です。ハイブリッド 64-bit プラットフォームの場合、64-bit SDK は別個の CD-ROM 上にあり、DB2 製品 CD-ROM の一部としては出荷されません。

SDK は、Java を必要とするコンポーネントがインストールされているときにインストールされます。ただし、SDK がすでにインストールされていることをインストーラーが検出した場合、再びインストールされることはありません。SDK は独自のディレクトリーにインストールされ、以前のレベルの SDK を上書きすることはありません。

64-bit Java が必要な場合には、Java 64-bit が必要であることを知らせるメッセージが表示されます。このメッセージが表示された場合には、Java 64-bit をインストールしなければなりません。このことは、ハイブリッド・プラットフォームにのみ適用されます。

制約事項:

以下の DB2 インストール方式のいずれか 1 つを使用している場合にのみ、Java SDK のインストールが試行されます。

- GUI インストール・プログラム (db2setup)
- 応答ファイル・インストール (db2setup -r response_file)

SMIT や db2_install スクリプトを使用するそれ以外の方式では、Java SDK はインストールされません。

手順:

SDK を手動でインストールするには、以下のようにします。

1. ご使用のオペレーティング・システムに適切なコマンドを、
/cdrom/db2/<platform>/Java-1.4 ディレクトリーから実行します (<platform>
は、ご使用のオペレーティング・システムを表します (たとえば、aix または
solaris)。)

オペレーティング・システム	コマンド	インストール・ディレクトリー
AIX® 32-bit (SDK 1.3.1)	installp -acgqX -d . Java131.adt	/usr/java131
AIX 64-bit (SDK 1.3.1)	installp -acgqX -d . Java131_64.adt	/usr/java13_64
AIX 32-bit	installp -acgqX -Y -d . Java14.sdk	/usr/java141
AIX 64-bit	installp -acgqX -Y -d . Java14_64.sdk	/usr/java14_64
HP-UX 32-bit および 64-bit	swinstall -x allow_incompatible=true -x mount_all_filesystems=false -s <path_to_depot_dir>/sdk14_1420_1100.depot T1456AA 注: path_to_depot_dir は、"/" で始まり、デポ・ファイル・セットを含むディレクトリーへの実際のパスでなければなりません。たとえば、HP-UX 32-bit CD 上の path_to_depot_dir は /cdrom/db2/hpux/Java-1.4/ になります。	/opt/java1.4
HP Itanium 32-bit および 64-bit	swinstall -x allow_incompatible=true -x mount_all_filesystems=false -s <path_to_depot_dir>/sdk14_14201_1122.depot T1458AA 注: path_to_depot_dir は、"/" で始まり、デポ・ファイル・セットを含むディレクトリーへの実際のパスでなければなりません。たとえば、HP-UX 32-bit CD 上の path_to_depot_dir は /cdrom/db2/hpux/Java-1.4/ になります。	/opt/java1.4
Linux IA32	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.i386.rpm	/opt/IBMJava2-141
Linux IA64	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.ia64.rpm	/opt/IBMJava2-141
Linux 390	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.s390.rpm	/opt/IBMJava2-s390-141
Linux 390 64-bit	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.s390x.rpm	/opt/IBMJava2-s390-141
Linux PPC 32-bit	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.ppc.rpm	/opt/IBMJava2-ppc-141
Linux PPC 64-bit	rpm -ivh IBMJava2-SDK-1.4.1-2.0.ppc64.rpm	/opt/IBMJava2-ppc64-141
SUN 32-bit	pkgadd -d . SUNWj3rt SUNWj3dev SUNWj3man SUNWj3dmo	/usr/j2se
SUN 64-bit	pkgadd -d . SUNWj3rt SUNWj3dev SUNWj3man SUNWj3dmo SUNWj3rtx SUNWj3dmx SUNWj3dvx	/usr/j2se

2. IBM SDK がインストールされたことを確認するには、**<path>/jre/bin/java -version** コマンドを実行します (<path> は SDK がインストールされたパスを表します。) 上述されている各プラットフォームごとのインストール・ディレクトリーを参照してください。

次のような出力を受け取ります。次の例は AIX の場合です。

```
java version "1.4.1"
Java(TM) 2 Runtime Environment, Standard Edition (build 1.4.1)
Classic VM (build 1.4.1, J2RE 1.4.1 IBM AIX build ca141-20030930
(JIT enabled: jitc))
```

IBM SDK は次の IBM developerWorks® Web サイトでも入手可能です。

- <http://www.ibm.com/developerworks/java/jdk/index.html>

Linux 上での DB2 の RPM ベースのインストール:

DB2 Universal Database™ バージョン 8 を Linux 上にインストールする場合には、RPM ベースのインストールが、IBM Java RPM (IBM SDK 1.4.1 SR2) をインストールしようとする。さらに新しいレベルの RPM、たとえば IBM SDK 1.5.1 SR1 がすでに存在している場合、バックレベルの RPM はインストールされません。

ただしこの場合、インストールの **JDK_PATH** データベース構成パラメーターは、バックレベルのパスを指したままになります。このため、DB2 ツール・カタログを含め、Java に依存する機能はどれも作動しません。

問題を解決するには、インスタンスの所有者として以下のコマンドを実行します。

```
db2 update dbm cfg using JDK_PATH <existing SDK path> <back-level SDK path>
```

このように更新すれば、DB2 Universal Database が正しい IBM Developer Kit を指すようになります。

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 UDB 用の Java SDK レベル

DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、下記にリストされた適切なレベルの SDK が必要です。

インストールされるいくつかのコンポーネントが SDK を必要とするものの、SDK がまだインストールされていない場合には、DB2 セットアップ・ウィザードまたは製品をインストールする応答ファイルのいずれかを使用すれば、SDK がインストールされます。

SDK は DB2 Run-Time Client ではインストールされません。

最新の SDK 情報については、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> にある DB2 UDB システム要件 Web ページを参照してください。

最新の Linux SDK 情報については、以下の IBM developer kit for Linux Web ページを参照してください。

<http://www-106.ibm.com/developerworks/java/jdk/linux/tested.html>

以下の表は、オペレーティング・システムに応じた DB2 用の SDK レベルをリストします。

オペレーティング・システム		SDK レベル
Windows	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 1
	64 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 1
AIX 4.3.3	32 ビット	SDK 1.3.1
AIX 5	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 1
	64 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 1
Solaris オペレーティング環境 (ハイブリッド)	32 ビット	SDK 1.4.2
	64 ビット	SDK 1.4.2
HP-UX RISC (ハイブリッド)	32 ビット	SDK 1.4.2.01
	64 ビット	SDK 1.4.2.01
HP-UX Itanium (ハイブリッド)	32 ビット	SDK 1.4.2.01
	64 ビット	SDK 1.4.2.01
LinuxIA	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
	64 ビット	詳しくは、DB2 UDB システム要件 Web ページを参照してください。
Linux390	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
	64 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
LinuxAMD (ハイブリッド)	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
	64 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2 (32-bit ・バージョン)
LinuxPPC (ハイブリッド)	32 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2
	64 ビット	SDK 1.4.1 サービス・リリース 2

関連概念:

- 41 ページの『IBM Developer Kit for Java のインストール (UNIX)』

ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows)

Windows 2000 または Windows Server 2003 で Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用する予定の場合、ディレクトリー・スキーマを拡張して、DB2 オブジェクト・クラスおよび属性定義を組み込まなければなりません。この作業は、DB2 製品をインストール前に行う必要があります。

前提条件:

Windows ユーザー・アカウントは、スキーマ管理権限をもっていなければなりません。

手順:

ディレクトリー・スキーマを拡張するには、以下の手順に従います。

1. ドメイン・コントローラーとしてログオンします。
2. スキーマ管理権限で、インストール CD から **db2schex.exe** プログラムを実行します。このプログラムは、以下のようにスキーマ管理権限を使用して、ログオフおよび再度ログオンをすることなく実行できます。

```
runas /user:MyDomain¥Administrator x:¥db2¥Windows¥utilities¥db2schex.exe
```

ここで、x: は CD-ROM の文字です。

db2schex.exe が完了したならば、DB2 製品のインストールに進むことができます。

関連資料:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 サーバーのインストール要件 (Windows)』

カーネル・パラメーター (UNIX)

カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX)

DB2 for HP-UX 製品をインストールする前に、ご使用のシステムのカーネル構成パラメーターを更新する必要があるかもしれません。カーネル構成パラメーターを更新した後、コンピューターを再始動する必要があります。

前提条件:

カーネル・パラメーターを変更するには、root 権限が必要です。

手順:

次のようにして、カーネル・パラメーターを変更します。

1. **sam** コマンドを入力して、System Administration Manager (SAM) プログラムを開始します。
2. 「カーネル構成 (Kernel Configuration)」アイコンをダブルクリックします。
3. 「構成パラメーター (Configurable Parameters)」アイコンをダブルクリックします。
4. 変更するパラメーターをダブルクリックし、「公式/値 (Formula/Value)」フィールドに新規値を入力します。
5. 「OK」をクリックします。
6. 変更するすべてのカーネル構成パラメーターについて、これらのステップを繰り返します。
7. カーネル構成パラメーターをすべて設定し終えたならば、「アクション (Action)」 --> (アクション・メニュー・バーから) 「新規カーネルの処理 (Process New Kernel)」を選択します。

カーネル構成パラメーターの値を変更した後、HP-UX オペレーティング・システムが自動的に再始動します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2osconf - カーネル・パラメーター値のためのユーティリティー・コマンド』

推奨されるカーネル構成パラメーター (HP-UX)

DB2 UDB 64-bit を実行している HP-UX システムの場合には、**db2osconf** コマンドを実行して、ご使用のシステムに適切なカーネル構成パラメーター値を提案してください。

DB2 UDB 32-bit を実行している HP-UX システムの場合には、適切なカーネル構成パラメーターの推奨値について、以下の表を調べてください。

表 1. カーネル構成パラメーターの推奨値 (HP-UX)

カーネル・パラメーター	物理メモリー : 64MB - 128MB	物理メモリー : 128MB - 256MB	物理メモリー : 256MB - 512MB	物理メモリー : 512MB+
maxuprc	256	384	512	1500
maxfiles	256	256	256	256
nproc	512	768	1024	2048
nfllocks	2048	4096	8192	8192
ninode	512	1024	2048	2048
nfile	(4 * ninode)	(4 * ninode)	(4 * ninode)	(4 * ninode)
msgseg	8192	16384	32767 (1)	32767 (1)
msgmnb	65535	65535	65535	65535
msgmax	65535	65535	65535	65535
msgtql	256	512	1024	2048
msgmap	130	258	258	2050
msgmni	128	256	256	1024
msgssz	16	16	16	16
semnmi	128	256	512	2048
semmap	130	258	514	2050
semnms	256	512	1024	4096
semnmu	256	512	1024	1024
shmmax	67 108 864	134 217 728 (2)	268 435 456 (2)	268 435 456 (2)
shmmni	300	300	300	1 000

注:

1. msgmax パラメーターは、65 535 に設定しなければなりません。
2. msgseg パラメーターは、32 767 以下に設定しなければなりません。
3. shmmax パラメーターは、134 217 728 と、物理メモリーの 90% (バイト数) のどちらか大きい方に設定しなければなりません。たとえば、システムの物理メモリーが 196 MB の場合、shmmax を 184 968 806 (196*1024*1024*0.9) に設定します。

関連タスク:

- 45 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX)』

カーネル・パラメーターの変更 (Linux)

DB2 UDB をインストールする前に、ご使用の Linux カーネル・パラメーターを更新することができます。DB2 UDB は必要であれば、自動的に IPC 限界を引き上げます。ユーザーの特定の必要に応じては、これらの限界をさらに引き上げることができます。

前提条件:

カーネル・パラメーターを変更するには、root 権限が必要です。

手順:

次のようにして、カーネル・パラメーターを更新します。

RedHat および SuSE

2.4.x シリーズのカーネルを使用しているシステムでは、メッセージ・キュー・パラメーターのデフォルト値 (msgmni) があります。これは、同時にわずかな数だけの DB2 への接続が許可される値です。DB2 を正常に実行するためには、セマフォ配列パラメーターも変更する必要があります。

ipcs -l コマンドを発行して、共用メモリー・セグメント、セマフォ配列、およびメッセージ・キューの限界をチェックします。

ipcs -l コマンドの出力は次のようになります。

```
# ipcs -l

----- Shared Memory Limits -----
max number of segments = 4096           // SHMMNI
max seg size (kbytes) = 32768
max total shared memory (kbytes) = 8388608
min seg size (bytes) = 1

----- Semaphore Limits -----
max number of arrays = 1024             // SEMMNI
max semaphores per array = 250
max semaphores system wide = 256000
max ops per semop call = 32
semaphore max value = 32767

----- Messages: Limits -----
max queues system wide = 1024          // MSGMNI
max size of message (bytes) = 65536
default max size of queue (bytes) = 16384 // MSGMAX
```

デフォルトのシステム制御構成ファイル /etc/sysctl.conf に次の項目を追加することによって、カーネル・パラメーターを変更してください。

```
kernel.msgmni = 1024
kernel.sem = 250 256000 32 1024
```

ここで、

```
max semaphores system wide =
max number of arrays x max semaphores/array
```

sysctl を -p パラメーターを指定して実行し、デフォルトのファイル /etc/sysctl.conf から sysctl 設定にロードします。

```
sysctl -p
```

ネットワーク初期設定スクリプトでの始動中に、`sysctl.conf` ファイルから項目が読み取られます。

配布によっては、システム初期設定ファイルの 1 つ (たとえば `rc.local`) に `sysctl -p` を追加して、リブートされるたびにカーネル・パラメーターが設定されるようにしなければならないことがあります。

カーネル・パラメーターの変更 (Solaris オペレーティング環境)

DB2 UDB をインストールする前に、ご使用のシステム・カーネル構成パラメーターを更新することをお勧めします。

db2osconf コマンドを使用して、推奨されるカーネル・パラメーターを提案してください。

カーネル・パラメーターを変更した後、システムを再始動する必要があります。

前提条件:

カーネル・パラメーターを変更するには、`root` 権限が必要です。

手順:

カーネル・パラメーターを設定するには、`/etc/system` ファイルの末尾に、以下の行を追加します。

```
set parameter_name = value
```

たとえば、`msgsys:msginfo_msgmax` パラメーターの値を設定するには、`/etc/system` ファイルの末尾に、以下の行を追加します。

```
set msgsys:msginfo_msgmax = 65535
```

`/etc/system` ファイルの更新後、システムを再始動します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『`db2osconf` - カーネル・パラメーター値のためのユーティリティー・コマンド』

第 7 章 インストール・タスク

DB2 Connect EE のインストール (Windows)

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Windows)

このタスクでは、DB2 Connect Enterprise Edition を Windows オペレーティング・システムにインストールする方法について説明します。

前提条件:

DB2 セットアップ・ウィザードを起動する前に以下を行ってください。

- システムが以下の要件を満たしていることを確認します。
 - ディスクおよびメモリー要件
 - ハードウェア、分散、およびソフトウェアの要件
- Windows 2000 または Windows Server 2003 (32 ビットおよび 64 ビット) 上で LDAP を使用する予定の場合、ディレクトリー・スキーマの拡張を行わなければなりません。
- インストールを実行するときは、管理者アカウントを使用することをお勧めします。その管理者アカウントは、DB2 製品のインストール先の Windows コンピューターで、ローカル管理者グループに所属していなければならず、また以下のような拡張ユーザー権限をもっていなければなりません。
 - オペレーティング・システムの一部として機能
 - トークン・オブジェクトの作成
 - クォータの増加
 - プロセス・レベル・トークンの置き換え

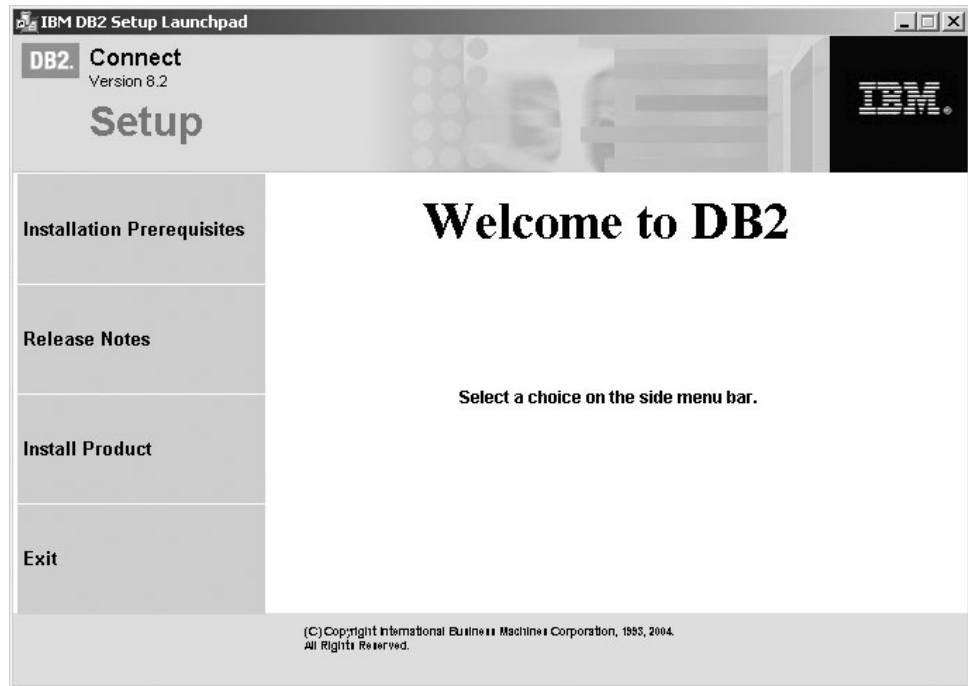
この拡張ユーザー権限がなくてもインストールを実行することはできますが、セットアップ・プログラムでアカウントの妥当性検査ができない可能性があります。

手順:

DB2 Connect Enterprise Edition をインストールするには、次のようにします。

1. 管理者権限をもったユーザーとしてシステムにログオンします。
2. すべてのプログラムをクローズし、インストール・プログラムが必要に応じてファイルを更新できるようにします。
3. CD-ROM をドライブに挿入します。自動実行機能によって DB2 セットアップ・ウィザードが自動的に起動します。DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを立ち上げます。セットアップ・プログラムを別の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動始動しない場合、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で実行することができます。

4. DB2 ランチパッドがオープンします。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。

5. インストールを開始したならば、セットアップ・プログラムの指示に従って作業を進めてゆきます。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックするか、または F1 を押します。「キャンセル (Cancel)」を押せば、いつでもインストールを終了できます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、db2.log ファイルを参照してください。db2.log ファイルは、インストールおよびアンインストール活動から生じた一般情報とエラー・メッセージを保管します。デフォルトでは、db2.log ファイルは My Documents\%DB2LOG ディレクトリーにあります。

DB2 セットアップ・ウィザードの手動起動:

DB2 セットアップ・ウィザードを手動で起動するには、次のようにします。

1. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」オプションを選択します。
2. 「開く」フィールドで、次のコマンドを入力します。

```
x:%setup /i language
```

ここで、

- *x:* は使用する CD-ROM ドライブを表します。
- *language* は使用言語を表すテリトリー・コードです (たとえば、英語の場合は EN になります)。

3. 「OK」をクリックします。

ご使用の DB2 製品が、ローカル・コンピューターまたはネットワーク内の別のコンピューター上にある DB2 資料にアクセスするようになりたい場合には、DB2

Information Center をインストールしなければなりません。DB2 Information Center には、DB2 Universal Database および DB2 関連製品に関する資料が含まれています。DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (Windows) を参照してください。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 44 ページの『ディレクトリー・スキーマの拡張 (Windows)』
- 157 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (Windows)』
- 64 ページの『最新のフィックスパックの適用 (Windows および UNIX)』
- 67 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール』
- 68 ページの『ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプの設定』

関連資料:

- 30 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition (Windows) のインストール要件』

DB2 Connect EE のインストール (UNIX)

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (AIX)

DB2 製品を AIX にインストールするには、DB2 セットアップ・ウィザードを使用することをお勧めします。DB2 インストーラー・プログラムは、すべての DB2 製品のインストールと構成を自動化するための Java ベースのインストール・ツールです。このユーティリティーを使用したくない場合は、db2_install スクリプトを使えば DB2 製品を手動でインストールできます。

前提条件:

インストールを開始する前に以下を行ってください。

- システムが以下の要件を満たしていることを確認します。
 - ディスクおよびメモリー要件
 - ハードウェア、分散、およびソフトウェアの要件
- root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- ご使用のシステムに DB2 製品の CD-ROM をマウントしなければなりません。CD-ROM のマウント (AIX)を参照してください。
- tar.Z ファイルおよび解凍されたインストール・イメージを保管するには、ファイル・システムに 2 GB のフリー・スペースが必要です (これにはソフトウェアのディスク要件は含まれていません)。
- 非同期入出力が使用可能になっていることを確認してください。DB2 バージョン 8 を正常にインストールするためには、非同期入出力を使用可能にしなければなりません。

注: バージョン 8 で AIX のインストール・パスが変更されました。バージョン 7 で使用されていた `/usr/lpp/db2_07_01` に代わり、DB2 バージョン 8 は `/usr/opt/db2_08_01` にインストールされます。

手順:

DB2 Connect Enterprise Edition を AIX にインストールするには、次のようにします。

1. 以下のようにして、CD-ROM がマウントされているディレクトリーに移動します。

```
cd /cdrom
```

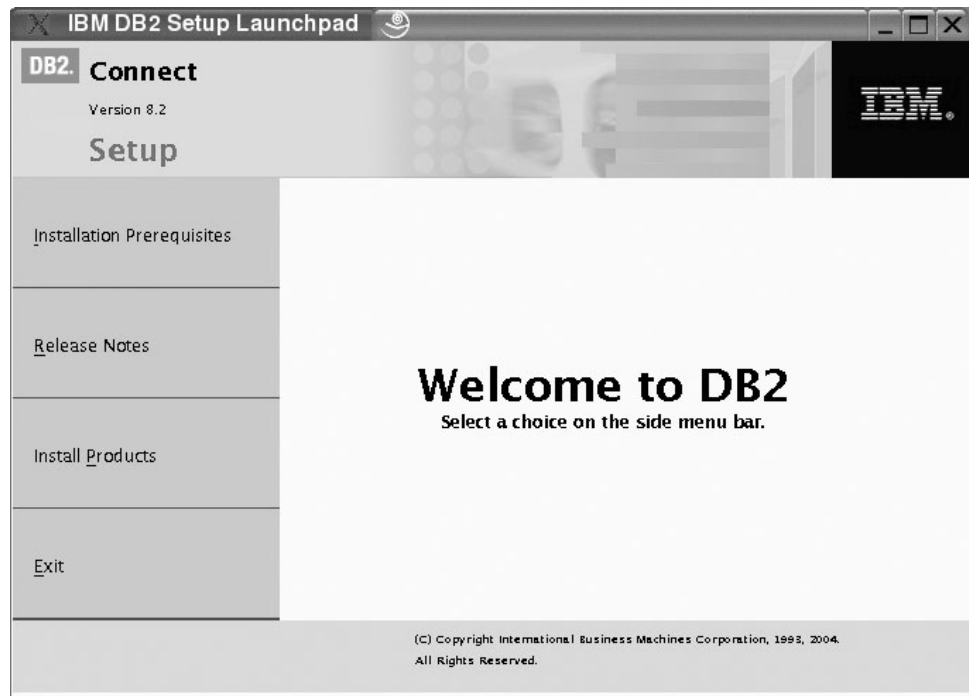
ここで、`/cdrom` は、CD-ROM のマウント・ポイントを表しています。

2. **AIX 4.3.3 の場合:** `./db2setup` コマンドを入力して「DB2 セットアップ」ウィザードを開始します。

AIX 5L の場合:

- a. 圧縮されたインストール・イメージを、少なくとも 2 GB のフリー・スペースがある一時ファイル・システムにコピーする。CD-ROM の圧縮イメージは `PRODUCT.tar.Z` という名前です。PRODUCT にはインストールしている DB2 製品が入ります。
- b. `cd /TMP` と入力して、インストール・イメージをコピーするディレクトリーに移動する。/TMP は、圧縮イメージをコピーするディレクトリーを示します。
- c. 次のコマンドを入力して、インストール・イメージを圧縮解除する: `zcat PRODUCT.tar.Z | tar -xf -`。PRODUCT にはインストールしている DB2 製品が入ります。
- d. 次のコマンドを入力して DB2 セットアップ・ウィザードを開始する :
`./PRODUCT/db2setup`

数分後に、IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが開きます。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。

インストールを開始したならば、DB2 セットアップ・ウィザードのパネルを順にたどりながら各種の選択を行います。DB2 セットアップ・ウィザードでは、インストール操作のヘルプを利用できます。インストール操作のヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックするか、または F1 を押します。「キャンセル (Cancel)」を押せば、いつでもインストールを終了できます。DB2 セットアップ・ウィザードの最後のインストール・パネルで「完了 (Finish)」をクリックしてはじめて DB2 ファイルはシステムにコピーされます。

インストールが完了すると DB2 Connect Enterprise Edition は、`/usr/opt/db2_08_01` にインストールされています。

ご使用の DB2 製品が、ローカル・コンピューターまたはネットワーク内の別のコンピューター上にある DB2 資料にアクセスするようになりたい場合には、DB2 Information Center をインストールしなければなりません。DB2 Information Center には、DB2 Universal Database および DB2 関連製品に関する資料が含まれています。DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX) を参照してください。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 133 ページの『CD-ROM のマウント (AIX)』

- 154 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)』
- 64 ページの『最新のフィックスパックの適用 (Windows および UNIX)』
- 67 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール』
- 68 ページの『ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプの設定』

関連資料:

- 34 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (AIX)』

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (HP-UX)

DB2 製品を HP-UX にインストールするには、DB2 セットアップ・ウィザードを使用することをお勧めします。DB2 インストーラー・プログラムは、すべての DB2 製品のインストールと構成を自動化するための Java ベースのインストール・ツールです。このユーティリティーを使用したくない場合は、`swinstall` または `sam` を使えば DB2 製品を手動でインストールできます。

前提条件:

インストールを開始する前に以下を行ってください。

- システムが以下の要件を満たしていることを確認します。
 - ディスクおよびメモリー要件
 - ハードウェア、分散、およびソフトウェアの要件
- root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- ご使用のシステムに DB2 製品の CD-ROM をマウントしなければなりません。CD-ROM のマウント (HP-UX)を参照してください。

手順:

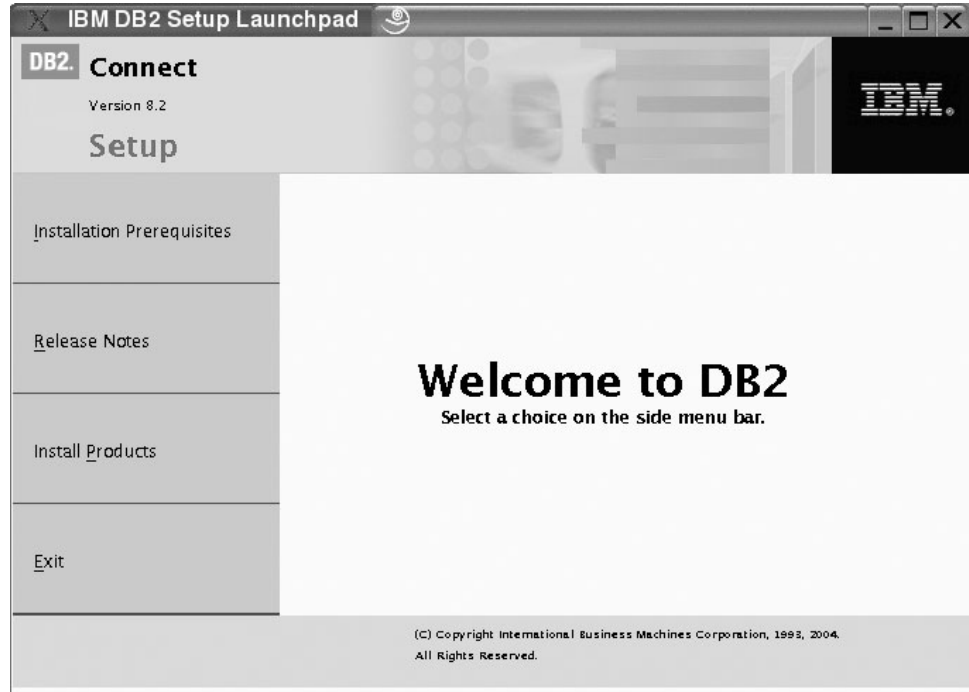
DB2 Connect Enterprise Edition を HP-UX にインストールするには、次のようにします。

1. 次のコマンドを入力することによって、CD-ROM がマウントされているディレクトリーに移動します。

```
cd /cdrom
```

ここで、`/cdrom` は、CD-ROM のマウント・ポイントを表しています。

2. **./db2setup** コマンドを入力してDB2 セットアップ・ウィザードを開始します。程なく IBM DB2 セットアップ・ランチパッドがオープンします。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。

インストールを開始したならば、DB2 セットアップ・ウィザードのパネルを順にたどりながら各種の選択を行います。DB2 セットアップ・ウィザードでは、インストール操作のヘルプを利用できます。インストール操作のヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックするか、または F1 を押します。「キャンセル (Cancel)」を押せば、いつでもインストールを終了できます。DB2 セットアップ・ウィザードの最後のインストール・パネルで「完了 (Finish)」をクリックしてはじめて DB2 ファイルはシステムにコピーされます。

インストールが完了すると DB2 Connect Enterprise Edition は、`/opt/IBM/db2/V8.1` にインストールされています。

ご使用の DB2 製品が、ローカル・コンピューターまたはネットワーク内の別のコンピューター上にある DB2 資料にアクセスするようになりたい場合には、DB2 Information Center をインストールしなければなりません。DB2 Information Center には、DB2 Universal Database および DB2 関連製品に関する資料が含まれています。DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX) を参照してください。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 134 ページの『CD-ROM のマウント (HP-UX)』

- 154 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)』
- 64 ページの『最新のフィックスパックの適用 (Windows および UNIX)』
- 67 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール』
- 68 ページの『ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプの設定』

関連資料:

- 36 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (HP-UX)』

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Linux)

DB2 製品を Linux にインストールするには、DB2 セットアップ・ウィザードを使用することをお勧めします。DB2 セットアップ・ウィザードは、すべての DB2 製品のインストールと構成の自動化のための、Java ベースのインストール・ツールです。このユーティリティを使用したくない場合は、`db2_install` スクリプトまたは `rpm` コマンドを使えば DB2 製品を手動でインストールできます。

前提条件:

インストールを開始する前に以下を行ってください。

- システムが以下の要件を満たしていることを確認します。
 - ディスクおよびメモリー要件
 - ハードウェア、分散、およびソフトウェアの要件
- root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- ご使用のシステムに DB2 製品の CD-ROM をマウントしなければなりません。CD-ROM のマウント (Linux) を参照してください。

手順:

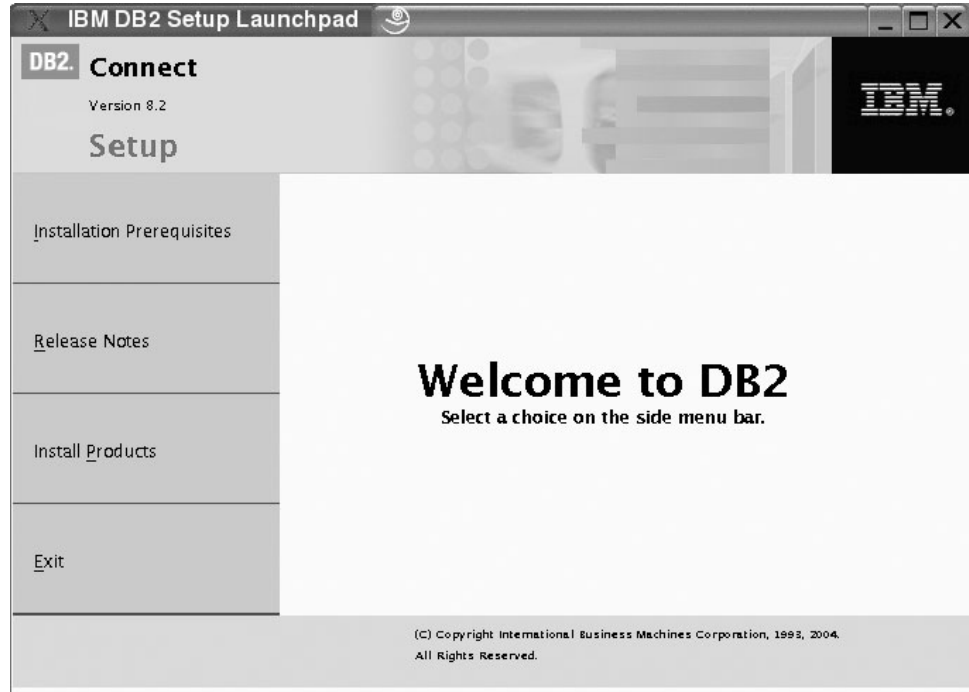
DB2 Connect Enterprise Edition を Linux にインストールするには、次のようにします。

1. 次のコマンドを入力することによって、CD-ROM がマウントされているディレクトリに移動します。

```
cd /cdrom
```

ここで、`/cdrom` は、CD-ROM のマウント・ポイントを表しています。

2. **./db2setup** コマンドを入力してDB2 セットアップ・ウィザードを開始します。程なく IBM DB2 セットアップ・ランチパッドがオープンします。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。

インストールを開始したならば、DB2 セットアップ・ウィザードのパネルを順にたどりながら各種の選択を行います。DB2 セットアップ・ウィザードでは、インストール操作のヘルプを利用できます。インストール操作のヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックするか、または F1 を押します。「キャンセル (Cancel)」を押せば、いつでもインストールを終了できます。DB2 セットアップ・ウィザードの最後のインストール・パネルで「完了 (Finish)」をクリックしてはじめて DB2 ファイルはシステムにコピーされます。

インストールが完了すると DB2 Connect Enterprise Edition は、`/opt/IBM/db2/V8.1` にインストールされています。

ご使用の DB2 製品が、ローカル・コンピューターまたはネットワーク内の別のコンピューター上にある DB2 資料にアクセスするようにしたい場合には、DB2 Information Center をインストールしなければなりません。DB2 Information Center には、DB2 Universal Database および DB2 関連製品に関する資料が含まれています。DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX) を参照してください。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 135 ページの『CD-ROM のマウント (Linux)』

- 154 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)』
- 67 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール』
- 68 ページの『ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプの設定』

関連資料:

- 37 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (Linux)』
- 「リリース情報」の『アジア言語フォントの使用の可能性 (Linux)』

zSeries 上での DB2 UDB for Linux のインストール準備

Linux を実行している S/390 コンピューターに DB2 UDB または DB2 Connect をインストールするには、S/390 コンピューターにアクセス可能なインストール・イメージを作成しなければなりません。FTP を使用して、Linux を実行している S/390 コンピューターにインストール・イメージを送ることもできるし、NFS マウントを使用して、Linux を実行している S/390 コンピューターに対して製品 CD-ROM を使用可能にすることもできます。

FTP 使用してインストール・イメージにアクセスする:

Linux を実行している S/390 コンピューターから、次のことを実行します。

1. 以下のコマンドを入力します。ftp *yourserver.com* (*yourserver.com* は、インストール・イメージがある FTP サーバーを表します。)
2. 自分のユーザー ID とパスワードを入力します。
3. 次のコマンドを入力します。

```
bin
get product.tar
```

product は、適切な製品パッケージ名を表します。つまり、DB2 Enterprise Server Edition の場合は *db2ese*、DB2 Connect Enterprise Edition の場合は *db2cee*、DB2 Run-Time Client の場合は *db2rtc* です。

4. 以下のコマンドを入力して、インストール・イメージを *untar* します。

```
tar -xvf product.tar
```

NFS 上で DB2 製品 CD-ROM を使用してインストール・イメージにアクセスする:

DB2 または DB2 Connect 製品 CD-ROM を UNIX オペレーティング・システム上で使用するには、以下のようにします。

1. 適切な CD-ROM をマウントします。
2. CD-ROM をマウントしたディレクトリーをエクスポートします。たとえば、CD-ROM を */cdrom* 下にマウントした場合には、*/cdrom* ディレクトリーをエクスポートします。
3. Linux を実行している S/390 コンピューター上で、次のコマンドを使用してこのディレクトリーを NFS マウントします。

```
mount -t nfs -o ro nfsservername:/cdrom /local_directory_name
```

nfsservername は NFS サーバー名、*cdrom* は NFS サーバー上のディレクトリ名、*local_directory_name* はローカル・ディレクトリ名を表します。

- Linux を実行している S/390 コンピューターから、CD-ROM がマウントされているディレクトリに移動します。このことは、**cd *llocal_directory_name*** コマンドを入力することによって行えます。*local_directory_name* は、製品 CD-ROM のマウント・ポイントです。

関連タスク:

- 『DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール』の『DB2 Personal Edition のインストール - 概要 (Linux)』
- 56 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Linux)』

DB2 Connect Enterprise Edition のインストール (Solaris オペレーティング環境)

DB2 製品を Solaris オペレーティング環境にインストールするときは、DB2 セットアップ・ウィザードを使用することをお勧めします。DB2 インストーラー・プログラムは、すべての DB2 製品のインストールと構成を自動化するための Java ベースのインストール・ツールです。このユーティリティーを使用したくない場合は、**pkgadd** または **admintool** を使えば DB2 製品を手動でインストールできます。

前提条件:

インストールを開始する前に以下を行ってください。

- システムが以下の要件を満たしていることを確認します。
 - ディスクおよびメモリー要件
 - ハードウェア、分散、およびソフトウェアの要件
- root 権限を持つユーザーとしてシステムにログオンします。
- ご使用のシステムに DB2 製品の CD-ROM をマウントしなければなりません。CD-ROM のマウント (Solaris オペレーティング環境)を参照してください。
- tar.Z ファイルおよび解凍されたインストール・イメージを保管するには、ファイル・システムに 2 GB のフリー・スペースが必要です (これにはソフトウェアのディスク要件は含まれていません)。

手順:

DB2 Connect Enterprise Edition を Solaris オペレーティング環境にインストールするには、次のようにします。

- 次のコマンドを入力することによって、CD-ROM がマウントされているディレクトリに移動します。

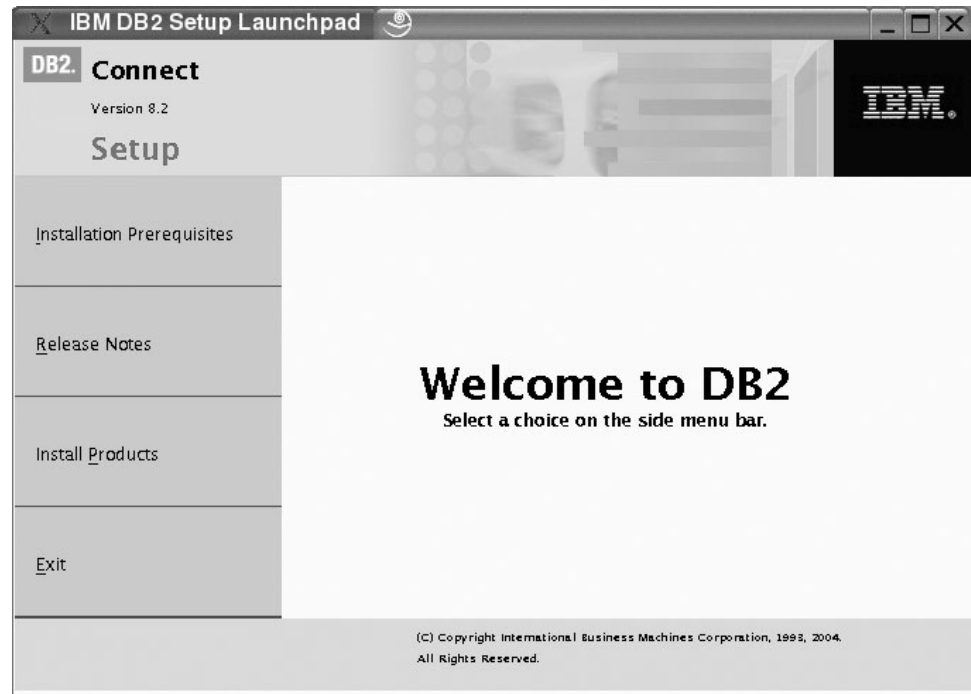
```
cd /cdrom
```

ここで、*/cdrom* は、CD-ROM のマウント・ポイントを表しています。

- product.tar.Z* を一時ファイル・システムにコピーします。ここで、*product* はインストールのためのライセンス交付を受けた製品を表しています。
- zcat *product.tar.Z* | tar -xf - ; ./product/db2setup** コマンドを実行して、DB2 セットアップ・ウィザードを開始します。たとえば、DB2 Connect Enterprise

Edition の製品名が *conee* の場合、コマンドは次のようになります: **zcat conee.tar.Z | tar -xf - ; ./conee/db2setup**

程なく IBM DB2 セットアップ・ランチパッドがオープンします。



このウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース・ノートを表示することができます。あるいは、インストールに直接進むこともできます。

インストールを開始したならば、DB2 セットアップ・ウィザードのパネルを順にたどりながら各種の選択を行います。DB2 セットアップ・ウィザードでは、インストール操作のヘルプを利用できます。インストール操作のヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックするか、または F1 を押します。「キャンセル (Cancel)」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。DB2 セットアップ・ウィザードの最後のインストール・パネルで「完了 (Finish)」をクリックしてはじめて DB2 ファイルはシステムにコピーされます。

インストールが完了すると DB2 Connect Enterprise Edition は、
/opt/IBM/db2/V8.1 にインストールされています。

ご使用の DB2 製品が、ローカル・コンピューターまたはネットワーク内の別のコンピューター上にある DB2 資料にアクセスするようにしたい場合には、DB2 Information Center をインストールしなければなりません。DB2 Information Center には、DB2 Universal Database および DB2 関連製品に関する資料が含まれています。DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX) を参照してください。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

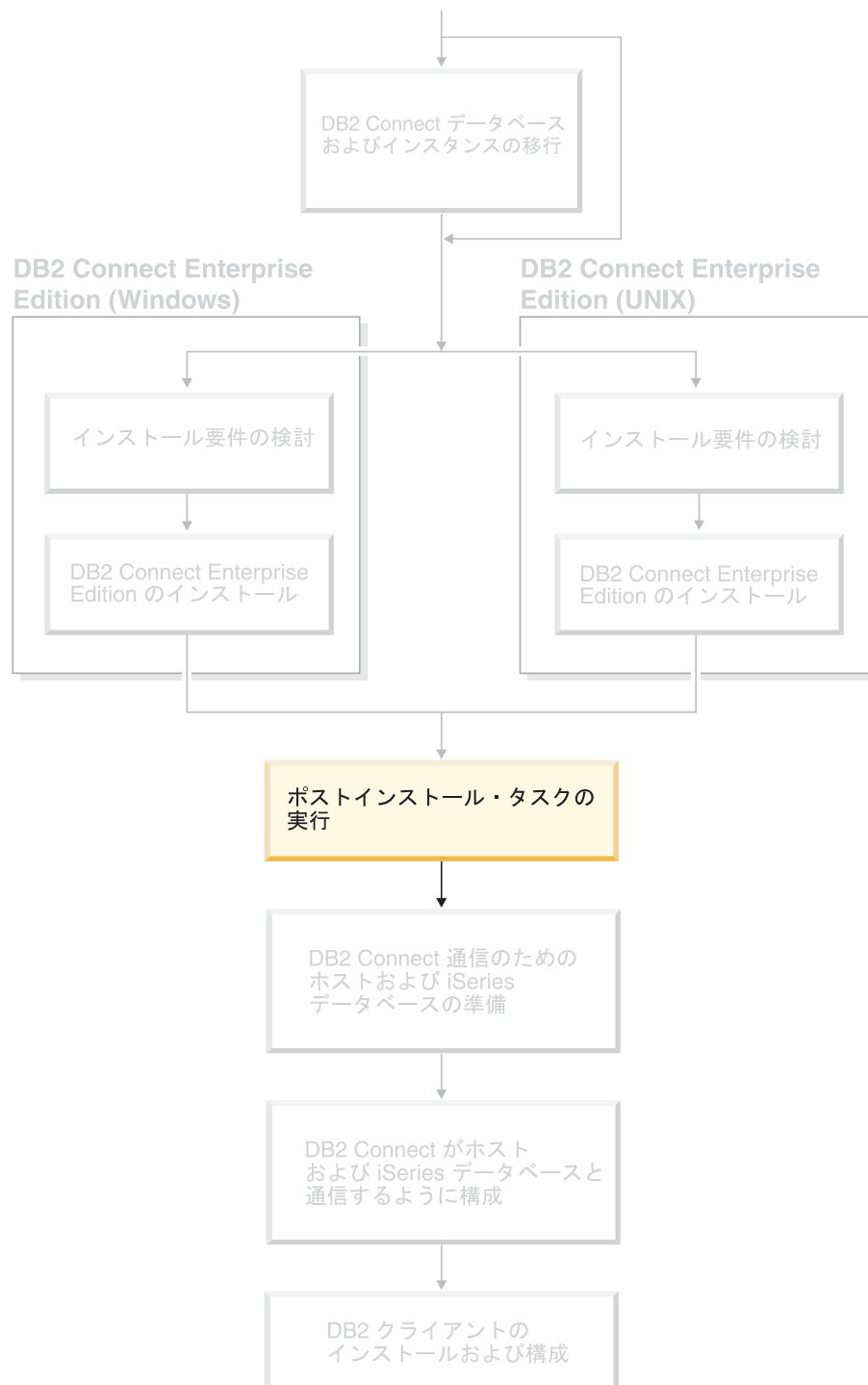
関連タスク:

- 135 ページの『CD-ROM のマウント (Solaris オペレーティング環境)』
- 154 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)』
- 64 ページの『最新のフィックスパックの適用 (Windows および UNIX)』
- 67 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール』
- 68 ページの『ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプの設定』

関連資料:

- 38 ページの『DB2 Connect Enterprise Edition のインストール要件 (Solaris オペレーティング環境)』

第 8 章 ポストインストール・タスク



最新のフィックスパックの適用 (Windows および UNIX)

DB2 フィックスパックは、IBM でのテストの際に検出された問題に対する更新とフィックス (プログラム診断依頼書 (APAR)) と、顧客から報告された問題のフィックスから成ります。どのフィックスパックにも、フィックスの内容を説明した APARLIST.TXT という表題の資料が添付されています。

フィックスパックは累積されます。その意味は、ある任意のバージョンの DB2 の最新のフィックスパックには、同じバージョンの DB2 のそれまでのフィックスパックのすべての更新が含まれているということです。DB2 の実行環境を最新のフィックスパック・レベルに保って、操作で問題が生じないようにすることをお勧めします。

区画に分割された ESE システムにフィックスパックをインストールする場合は、まずシステムがオフラインの状態ですべての参加コンピューターにフィックスパックをインストールし、それからシステムをオンラインにする必要があります。

前提条件:

各フィックスパックにはそれぞれ固有の前提条件があります。詳細は、フィックスパックに付属している FixPak Readme を参照してください。

制約事項:

DB2 Universal Database をインストールして共通基準認証済み構成をセットアップする場合には、フィックスパックはインストールしないでください。フィックスパックは共通基準準拠に関しては評価されないため、フィックスパックをインストールすると、構成が準拠しなくなります。

手順:

1. 最新の DB2 フィックスパックは、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support> にある IBM DB2 UDB and DB2 Connect オンライン・サポートからダウンロードしてください。各フィックスパックには、リリース・ノートと Readme が入っています。Readme には、フィックスパックのインストール方法の解説が述べられています。
2. フィックスパックをインストールします。
3. UNIX システム上で **db2iupdt** コマンドを実行して、インスタンスを更新してください。

関連概念:

- 179 ページの『DB2 Universal Database 製品の共通基準認証』

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database Personal Edition 概説およびインストール」の『コマンド行プロセッサ (CLP) を使用したインストールの検査』

DB2ADMNS および DB2USERS ユーザー・グループへのユーザー ID の追加

DB2 のインストールが正常に完了したならば、ユーザーを DB2ADMNS または DB2USERS グループに追加して、それらのユーザーが DB2 にアクセスできるようにする必要があります。DB2 インストーラーは 2 つの新しいグループを作成します。新しい名前を使用するか、デフォルト名を受け入れることができます。デフォルトのグループ名は DB2ADMNS と DB2USERS です。

前提条件:

- DB2 のインストールが完了している必要があります。
- DB2 のインストール時に、DB2 のオブジェクトに関するオペレーティング・システムのセキュリティーを有効にするパネルで、オペレーティング・システムのセキュリティーを有効にするチェック・ボックスを選択している必要があります。

手順:

ユーザーを適切なグループに追加するには、以下の手順に従います。

1. 「ユーザーおよびパスワード管理 (Users and Passwords Manager)」ツールを起動します。
2. 追加するユーザー名をリストから選択します。
3. 「プロパティ (Properties)」をクリックします。「プロパティ (Properties)」ウィンドウで、「グループ・メンバーシップ (Group Membership)」タブをクリックします。
4. 「その他 (Other)」ラジオ・ボタンを選択します。
5. ドロップダウン・リストから適切なグループを選択します。

インストール時に新しいセキュリティー機能を有効にしない設定を選択した場合でも、インストール後に **db2secv82.exe** コマンドを実行することによって有効にすることができます。

db2secv82.exe コマンドを使用してこのセキュリティー機能を有効にした後、この設定を元に戻すには以下の 2 つの方法があります。

1. システムに変更を加えないうちに、**db2secv82.exe** コマンドをすぐに再実行します。システムに何かの変更を加えた場合は、2 番目の方法を使用してください。
2. Everyone グループを DB2ADMNS および DB2USERS グループに追加します。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2secv82 - Set permissions for DB2 objects コマンド』

DB2 Connect ライセンスの活動化

ライセンス交付を受けた DB2 Connect Enterprise Edition および DB2 Connect Unlimited Edition 製品のインストール中に、インストール・プログラムは DB2 Connect Enterprise Edition および DB2 Connect Unlimited Edition のライセンスを登録します。

ただし、ご使用の DB2 Connect 製品のライセンスを手動で活動化する必要がある場合には、DB2 ライセンス・センターまたは **db2licm** コマンドのいずれかを使用できます。

db2licm コマンドを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール

ライセンス・センターを使用する代わりに、**db2licm** コマンドを使って、DB2 Connect の製品 CD-ROM からライセンス・キーを追加することができます。

手順:

db2licm コマンドを使用して DB2 Connect の製品 CD-ROM からライセンス・キーを追加するには、以下のようにします。

- Windows では、以下のコマンドを入力します。

```
db2licm -a x:%db2%license%license_filename
```

x: は DB2 Connect の製品 CD の入っている CD-ROM ドライブです。

- UNIX では、以下のコマンドを入力します。

```
db2licm -a db2/license/license_filename
```

license_filename は以下を表します。

db2conee.lic

DB2 Connect Enterprise Edition

db2conpe.lic

DB2 Connect Personal Edition

db2conue.lic

DB2 Connect Unlimited Edition

db2conas.lic

DB2 Connect Application Server Edition

関連タスク:

- 67 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール』
- 68 ページの『db2licm コマンドを使用したライセンス・タイプの設定』
- 68 ページの『ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプの設定』

ライセンス・センターを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール

ライセンス・センターを使用して、DB2 Connect 製品 CD-ROM からライセンス・キーをインストールすることができます。

手順:

ライセンス・センターを使用して、DB2 Connect 製品 CD-ROM からライセンス・キーをインストールするには、以下の操作を行います。

1. DB2 コントロール・センターを開始してから、「**ツール (Tools)**」メニュー・リストで「**ライセンス・センター (License Center)**」を選択します。
2. インストールするライセンスの対象のシステムを選択します。「**インストール済み製品 (Installed products)**」フィールドには、インストールした製品の名前が表示されます。
3. 「**ライセンス (License)**」メニューで「**追加 (Add)**」を選択します。
4. 「**ライセンスの追加 (Add License)**」ウィンドウで、「**ファイルから (From a file)**」または「**手動 (Manually)**」のいずれかの追加を選択できます。

ファイルから (From a file)

「**ファイルから (From a file)**」ラジオ・ボタンを選択して、DB2 Connect 製品 CD-ROM からライセンス・ファイルを選択します。

- Windows では、以下のコマンドを入力します。

```
x:¥db2¥license¥license_filename
```

x: は DB2 Connect 製品 CD の入っている CD-ROM ドライブです。

- UNIX では、以下のコマンドを入力します。

```
/db2/license/license_filename
```

license_filename は以下を表します。

db2conee.lic

DB2 Connect Enterprise Edition

db2conpe.lic

DB2 Connect Personal Edition

db2conue.lic

DB2 Connect Unlimited Edition

db2conas.lic

DB2 Connect Application Server Edition

手動 (Manually)

「**手動 (Manually)**」ラジオ・ボタンを選択して、「**製品名 (Product name)**」、「**製品バージョン (Product version)**」および「**製品パスワード (Product password)**」を入力します。

5. 「**適用 (Apply)**」をクリックしてライセンス・キーを追加します。

関連タスク:

- 66 ページの『db2licm コマンドを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール』
- 68 ページの『db2licm コマンドを使用したライセンス・タイプの設定』
- 68 ページの『ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプの設定』

db2licm コマンドを使用したライセンス・タイプの設定

ライセンス・センターを使用する代わりに **db2licm** コマンドを使って、ライセンス・キーを設定することができます。

手順:

db2licm コマンドを使用してライセンス・タイプを設定するには、次のようにします。

DB2 Connect Enterprise Edition の場合:

- 並行ユーザーのライセンスを購入した場合、次のコマンドを入力します。

```
db2licm -p db2cneee concurrent
db2licm -u N
```

N は、購入した並行ユーザー・ライセンスの数です。

- 登録済みユーザー・ライセンスを購入した場合、次のようなコマンドを入力します。

```
db2licm -p db2cneee registered
```

関連タスク:

- 66 ページの『db2licm コマンドを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール』
- 67 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのインストール』
- 68 ページの『ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプの設定』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2licm - ライセンス管理ツール・コマンド』

ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプの設定

ライセンス・センターを使用したライセンス・タイプを設定できます。

手順:

ライセンス・タイプを設定するには、次のようにします。

1. ライセンス・センターの「**ライセンス (License)**」メニューで「**変更 (Change)**」を選択します。
2. 「**ライセンスの変更 (Change License)**」ウィンドウで、購入したライセンスのタイプを選択します。
 - 並行ユーザー・ライセンスを購入していた場合、「**同時 DB2 Connect ユーザー (Concurrent DB2 Connect users)**」を選択してから、購入したユーザー・ライセンスの数を入力します。

注: DB2 Connect Enterprise Edition のライセンスは、1 人のユーザーにのみ
供与されます。それ以外の DB2 Connect ユーザー・ライセンスは別途購
入する必要があります。

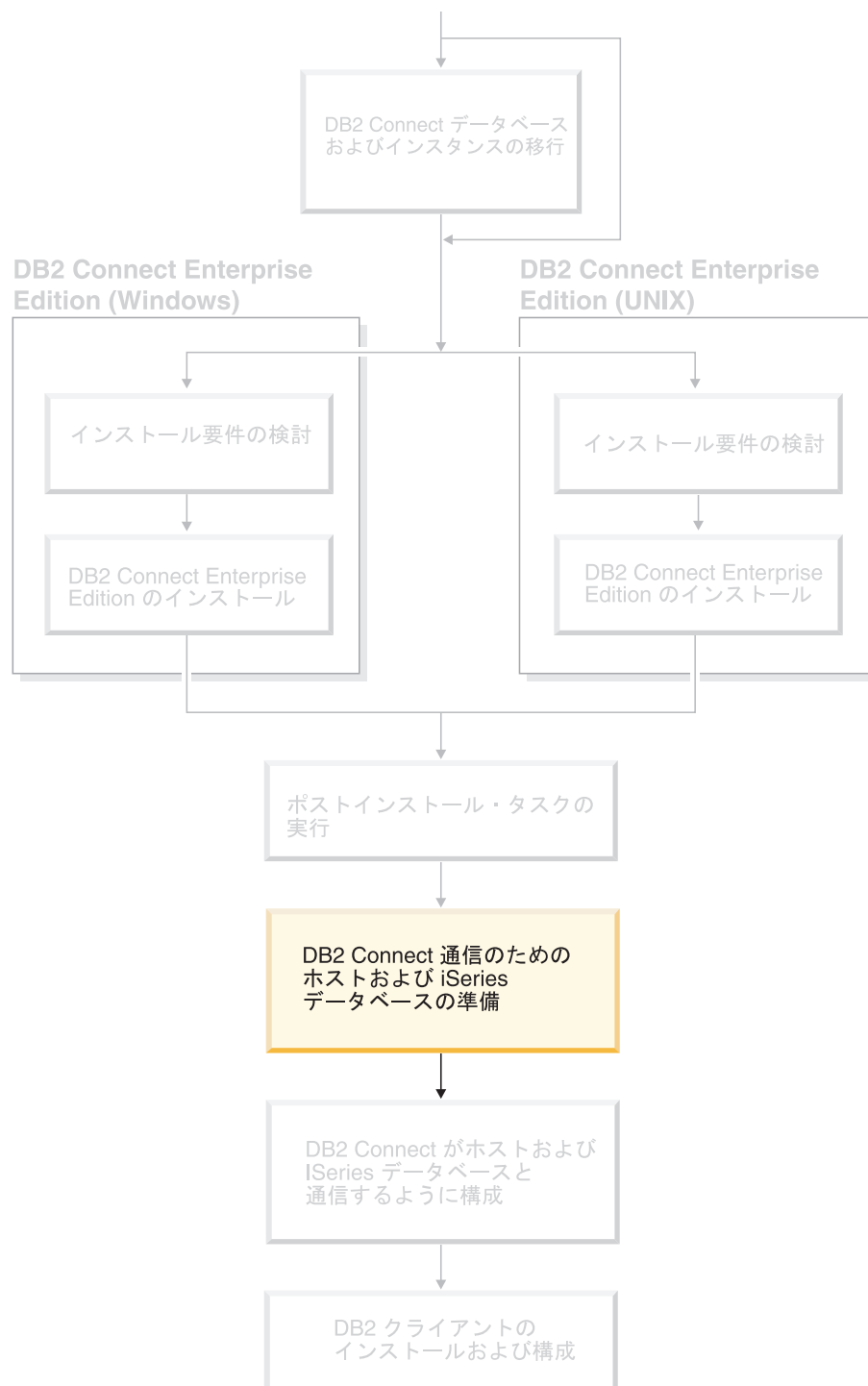
登録済みユーザー・ライセンスを購入した場合、「登録済み DB2 Connect
ユーザー (Registered DB2 Connect users)」を選択してから、「OK」をク
リックして「ライセンスの変更 (Change License)」ウィンドウをクローズし、
ライセンス・センターに戻ります。「ユーザー (Users)」タブをクリックし、
購入したライセンスの対象のすべてのユーザー ID を追加します。

3. 「制約ポリシー (Enforcement policy)」を選択します。「ソフト停止 (Soft
stop)」がデフォルトです。

関連タスク:

- 66 ページの『db2licm コマンドを使用した DB2 Connect ライセンス・キーのイ
ンストール』
- 67 ページの『ライセンス・センターを使用した DB2 Connect ライセンス・キー
のインストール』
- 68 ページの『db2licm コマンドを使用したライセンス・タイプの設定』

第 4 部 DB2 Connect 通信のためのホストおよび iSeries データベースの準備



このセクションでは、DB2 Connect ワークステーションからの接続を受け入れるようにホストおよび iSeries データベース・サーバーを構成する場合に必要なステップ

について説明します。これらのステップは、必要なシステム特権と特殊な専門的知識を持つ、ネットワークまたはシステム管理者、あるいは DB2 管理者などのユーザーが実行する必要があります。

ホストおよび iSeries データベース・サーバーの構成については、以下の資料を参照してください。

- 「*DB2 Universal Database (OS/390 版および z/OS 版) インストレーション・ガイド・バージョン 7 (GC88-8766-00)*」には、DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 に関する最も包括的かつ最新の情報が記載されています。
- 「*Distributed Relational Database Cross Platform Connectivity and Applications*」には、役立つ構成後の情報が載せられています。
- 「*AS/400 Distributed Database Programming V4*」

このセクションで使用するサンプル値は、本書の他の部分で使用する値と一致しています。以下の部分で提供される指示を実行する際、ネットワーク名、論理装置 (LU) 名、およびモード名などのエレメントは、自分で指定する値に置き換える必要があります。

第 9 章 DB2 Connect 通信のための DB2 for OS/390 and z/OS データベースの準備

DB2 Connect からの接続のための DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の準備

VTAM 管理者およびホスト・システム管理者は、VTAM と OS/390 または z/OS を構成し、DB2 Connect ワークステーションからのインバウンド接続要求を受け取るように DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 を準備する必要があります。

このトピックは以下について述べています。

- DB2 Connect と DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 との間の TCP/IP (伝送制御プロトコル/インターネット・プロトコル) ネットワーク接続を確立するための指示。
- DB2 Connect SNA 接続で使用する DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 ホストに必要な VTAM 定義の例。これらを、現行の定義と比較してください。
- DB2 ホストの構成ステップ。これらのステップの詳細の多くは、DB2 UDB for OS/390 バージョン 6.1 が紹介されたときに変更されています。これらのステップは、TCP/IP を介して DB2 Universal Database for z/OS および OS/390 に接続するユーザーに適用されます。しかし、SNA ユーザーに適用されるステップもあります。TCP/IP に適用されるステップを使用することをお勧めします。

DB2 for OS/390 または DB2 for z/OS がマルチサイト更新トランザクション (2 フェーズ・コミット) に参与する予定の場合は、『マルチサイト更新の使用可能化』の項を参照してください。

手順:

DB2 Connect からの接続要求を受け入れるように DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 を準備するには、以下のようにプロトコルを構成する必要があります。

- DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS 用の TCP/IP の構成
- DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の構成
- VTAM の構成

関連タスク:

- 74 ページの『DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS 用の TCP/IP の構成』
- 77 ページの『DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の構成』
- 78 ページの『VTAM の構成』
- 「DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」の『コントロール・センターを使ったマルチサイト更新の使用可能化』

DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS 用の TCP/IP の構成

このトピックでは、DB2 Connect ワークステーションとバージョン 6.1 以降の DB2 UDB for OS/390 との間の TCP/IP 通信を構成する方法について説明します。この説明では、以下を前提としています。

- TCP/IP によって単一のホスト・データベースに接続している。それぞれの場合に必要なポート番号 とサービス番号 が異なっても、複数のホスト接続を全く同じ方法で処理します。
- ターゲット・データベースが DB2 UDB for OS/390 バージョン 6.1 以降にある。
- 必要なすべての前提条件ソフトウェアがインストールされている。
- 必要なだけの DB2 クライアントがセットアップされている。

TCP/IP をサポートする場合の OS/390 ソフトウェアの前提条件:

OS/390 V2R3+ は、TCP/IP サポートに必要な最低限のオペレーティング・システム・レベルです。お勧めのオペレーティング・システムは OS/390 V2R5+ で、このレベルであれば最高のパフォーマンスを得られます。どのバージョンの z/OS も TCP/IP をサポートします。

以下の DB2 for OS/390 の通知用の APAR は、TCP/IP for OS/390 を筆頭として各種の OS/390 コンポーネントごとにインストールする PTF に関する情報に応じて定期的に更新されます。DB2 for OS/390 で TCP/IP 接続を使用する場合、以下の DB2 for OS/390 APAR 情報に記述されている PTF および APAR 修正を再検討し適用することは大変重要です。

- II11164
- II11263
- II10962

情報の収集:

TCP/IP 接続によって DB2 Connect を使用できるようになるには、その前にホスト・データベース・サーバーと DB2 Connect サーバーの両方についての情報を収集する必要があります。TCP/IP によって接続しているそれぞれのホスト・サーバーについては、以下の情報が必要です。

- DB2 Connect ワークステーションでの TCP/IP services ファイルおよび hosts ファイルの位置

UNIX の場合

/etc/

Windows NT、Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003 の場合

通常は、`%SystemRoot%\system32\drivers\etc\`。 `%SystemRoot%` は、Windows インストール・パス・ディレクトリーを示します。

Windows 98 および Windows ME の場合

通常、`x:\windows\`。ここで、`x:` は Windows のインストール・パス・ディレクトリーを表しています。

ドメイン・ネーム・サーバー にホスト情報を追加して、複数のシステムでこのファイルを保持しないようにすることができます。

- ターゲット DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 ホストでの等価ファイルの位置。
- DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 に対して定義される TCP/IP ポート番号。

注: 関連するサービス名 情報は、DB2 Connect ワークステーションと DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 との間で交換されません。ポート番号 446 は、DB2 Connect ワークステーションからの通信でのデフォルトとして登録されています。

- ホストおよび DB2 Connect ワークステーションの両方に使用できる TCP/IP アドレスおよびホスト名。
- DB2 for OS/390 データベース・サーバーのロケーション名。
- ホストまたは iSeries サーバーでデータベースに対して CONNECT 要求を出すときに使用されるユーザー ID およびパスワード。

この情報を入手するためのヘルプは、ローカル・ネットワーク管理者および DB2 for OS/390 and z/OS 管理者にお問い合わせください。表 2 の例にあるワークシートの 1 つのコピーを使用して、DB2 Connect とホスト・データベース・サーバーの間にそれぞれの TCP/IP 接続を計画します。

表 2. DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 への TCP/IP 接続を計画するワークシートの例

参照番号	説明	サンプル値	使用値
ユーザー情報			
TCP-1	ユーザー名	A.D.B.User	
TCP-2	連絡先	(123)-456-7890	
TCP-5	ユーザー ID	ADBUSER	
TCP-6	データベース・タイプ	db2390	
TCP-7	接続タイプ (TCPIP でなければならない)	TCPIP	TCPIP
ホストでのネットワーク・エレメント			
TCP-8	ホスト名	MVSHOST	
TCP-9	ホスト IP アドレス	9.21.152.100	
TCP-10	サービス名	db2inst1c	
TCP-11	ポート番号	446	446
TCP-12	ロケーション名	NEW_YORK3	
TCP-13	ユーザー ID		
TCP-14	パスワード		
DB2 Connect ワークステーションでのネットワーク・エレメント			
TCP-18	ホスト名	mcook02	
TCP-19	IP アドレス	9.21.27.179	
TCP-20	サービス名	db2inst1c	
TCP-21	ポート番号	446	446
(DB2 Connect ワークステーションでの) DB2 ディレクトリー項目			
TCP-30	ノード名	MVSIPNOD	
TCP-31	データベース名	nyc3	

表 2. DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 への TCP/IP 接続を計画するワークシートの例 (続き)

参照番号	説明	サンプル値	使用値
TCP-32	データベース別名	mvsipdb1	
TCP-33	DCS データベース名	nyc3	

注:

- ホストの IP アドレス **TCP-9** を獲得するには、ホストで以下のように入力します。
TSO NETSTAT HOME
- ポート番号 **TCP-11** を獲得するには、DB2 マスター・アドレス・スペースまたはシステム・ログで DSNL004I を検索します。

TCP/IP 接続の構成:

このセクションで説明されているステップを行って、構成を完了し接続を確立します。

ワークシートの完成:

以下のように、それぞれの TCP/IP ホストごとに、ワークシートの例のコピーを完成します。

- DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 ホスト (項目 8 および 9) のホスト名および IP アドレスに使用される値を入力する。
- DB2 Connect ワークステーション (項目 18 および 19) のホスト名および IP アドレス に使用される値を入力する。
- 接続 (項目 10 と 11、または 20 と 21) に使用するポート番号またはサービス名を決定する。
- 接続先の DB2 for OS/390 and z/OS データベース・サーバーのロケーション名。
- ホスト・データベースに接続するときユーザー ID およびパスワードに使用される値を決定する。

DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 ホストの更新:

zSeries サーバーで以下を行います。

- ホスト・アドレスまたはホスト名を調べる。
- ポート番号またはサービス名を調べる。
- 必要であれば、正しいポート番号とサービス名を使って services ファイルを更新する。
- 必要であれば、DB2 Connect ワークステーションのホスト名と IP アドレスを使って、hosts ファイル (または DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 システムが使用するドメイン・ネーム・サーバー) を更新する。
- 接続をテストする前に、新しい定義がアクティブであることを確認する。必要に応じて、ホスト・ネットワーク管理者に相談するか、またはコントロール・スタッフを変更してください。
- 有効なユーザー ID、パスワード、および LOCATION NAME を持つ DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 管理者を調べる。

7. そのオプションがホスト・システム上で TCP/IP によってサポートされている場合、正しいポート番号を使って DB2 Connect サーバーを PING する。たとえば、次のようにします。

```
ping remote_host_name -p port_number
```

関連タスク:

- 78 ページの『VTAM の構成』

DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS の構成

DB2 Connect を使用するには、その前に DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 管理者が DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 を構成し、DB2 Connect ワークステーションからの接続を許可する必要があります。この項では、DB2 Connect クライアントが DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 に接続できるようにするために必要な最小 更新を示します。さらに詳細な例に関しては、「*DB2 for OS/390 and z/OS Installation Guide*」を参照してください。

推奨される APAR:

DB2 for OS/390 and z/OS バージョン 7: APAR PQ50016 および PQ50017 のフィックスを適用してください。

SYSIBM.LUNAMES の更新:

この項には、DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 用にこれらのテーブルを更新するコマンドの例が示されています。DB2 管理者と協力して、ご使用の DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 システムに必要な更新を判別します。DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 コミュニケーション・データベース・テーブルの詳細については、「*DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 SQL リファレンス*」を参照してください。

着信 DB2 Connect LU からデータベース接続要求を受け入れられるようにするには、空白行を挿入するだけです。次のような SQL を使用します。

```
INSERT INTO SYSIBM.LUNAMES (LUNAME) VALUES ('      ')
```

その代わりに、LU 名によってアクセスを制限したい場合、以下のような SQL コマンドを使ってこのテーブルを更新することができます。

```
INSERT INTO SYSIBM.LUNAMES (LUNAME,  
                            SECURITY_OUT,  
                            ENCRYPTPSWDS,  
                            USERNAMES)  
VALUES('NYX1GW01','P','N','O');
```

結果は次のとおりです。

表 3. テーブルに加えた更新による結果セット

列	例	注釈
=====	=====	=====
LUNAME	NYX1GW01	DB2 Connect LU の名前
SECURITY_OUT	P	

表 3. テーブルに加えた更新による結果セット (続き)

列	例	注釈
ENCRYPTPSWDS	N	
USERNAMES	0	

関連タスク:

- 74 ページの『DB2 Universal Database for OS/390 and z/OS 用の TCP/IP の構成』

VTAM の構成

VTAM を構成するため、VTAM 管理者はシステムで使用する名前とオプションを判別する必要があります。DB2 Connect ワークステーションをホストへ接続できるようにするには、以下の定義を提供する必要があります。

- DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 用の VTAM APPL 定義。DB2 サブシステムの APPL 名、つまり LU 名は、これらの例では NYM2DB2 です。
- DB2 Connect 用の VTAM PU および LU 定義。DB2 Connect ワークステーションの PU および LU 定義は、これらの例ではそれぞれ NYX1 および NYX1GW01 です。
- DB2 の VTAM ログ・モード定義。接続に使用されるログ・モード項目はこれらの例では IBMRDB です。

VTAM サンプル定義を、以下のセクションで説明します。

ネットワーク・エレメント名のサンプル (VTAM):

次の例では、ホスト・データベース・サーバーの構成に使用する VTAM 定義のサンプルを示します。

```

DB2 Connect Server:
- Network ID           : SPIFNET
- Local Node Name     : NYX1      (PU name)
- Local Node ID      : 05D27509

- LU Name             : SPIFNET.NYX1GW01
                      : (the same LU is used
                      :   for DB2 Connect,
                      :   for DB2 Universal Database,
                      :   and for the SPM)
- LU Alias            : NYX1GW01

HOST:
- Network ID           : SPIFNET
- Node Name           : NYX

- LU Name             : SPIFNET.NYM2DB2
- LU Alias            : NYM2DB2
- LAN Destination Address : 400009451902 (NCP TIC address)

MODE DEFINITION:
- Mode Name           : IBMRDB

DB2 for OS/390:
- Location            : NEW_YORK3

SECURITY:
- Security Type       : Program
- Authentication Type : DCS

```

OS/390 用または z/OS 用 VTAM APPL 定義のサンプル:

次の例では、VTAM アプリケーション・メジャー・ノード定義のサンプルを示します。ほとんどの場合、異なる LU 名を持つそのような定義がすでに存在しています。そのような定義が存在しない場合、このアプリケーション・メジャー・ノードを定義し、定義された LU 名を使用するために DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 をカスタマイズする必要があります。この名前は、DB2 Connect に必要なパートナー LU 名です。

```

-----1-----2-----3-----4-----5-----6-----7--
DB2APPLS VBUILD TYPE=APPL

NYM2DB2  APPL  APPC=YES,                X
           AUTH=(ACQ),                  X
           AUTOSSES=1,                  X
           DLOGMOD=IBMRDB,              X
           DMINWNL=512,                  X
           DMINWNR=512,                  X
           DSESSLIM=2048,                X
           EAS=6000,                     X
           MODETAB=RDBMODES,            X
           PARSESS=YES,                  X
           PRTCT=SFLU,                   X
           MODETAB=RDBMODES,            X
           SECACPT=ALREADYV,            X
           SRBEXIT=YES,                  X
           VERIFY=NONE,                  X
           VPACING=8

```

注: 16 列目から連結を始める必要があり、72 列目に連結マークが付けられます。

DB2 Connect 用の VTAM PU および LU 定義のサンプル:

セキュリティー・ポリシー上可能であれば、DYNPU と DYNLU を VTAM で使用できるようにして、VTAM を介した PU および LU アクセスを可能にしてください。詳細については、VTAM 管理者と連絡をとってください。

次の例では、VTAM 交換回線メジャー・ノード定義のサンプルを示します。以下の例を参考に、特定の LU または PU を使用可能にします。

DB2 Connect ワークステーション上ですでに SNA を使用している場合、PU 定義がすでに存在しています。しかし、独立型 LU 定義は存在していない可能性があります。DB2 Connect に必要な独立型 LU 定義には、LOCADDR=0 と指定する必要があります。

```
-----1-----2-----3-----4-----5-----6-----7--
          SWITCHED MAJOR NODE DEFINITION FOR PU NYX1 and
          INDEPENDENT LU NYX1GW01
LOC300   VBUILD TYPE=LOCAL
NYX1     ADDR=01, IDBLK=071, IDNUM=27509, ANS=CONT, DISCNT=NO,      X
          IRETRY=YES, ISTATUS=ACTIVE, MAXDATA=4302, MAXOUT=7,      X
          MAXPATH=1, PUTYPE=2, SECNET=NO, MODETAB=RDBMODES,      X
          SSCPFM=USSSCS, PACING=0, VPACING=2
NYX1GW01 LOCADDR=000, MODETAB=RDBMODES, DLOGMODE=IBMRDB
OTHERLU  LOCADDR=002
```

DB2 用の VTAM ログ・モード定義のサンプル:

次の例では、VTAM ログオン・モード・テーブル定義 IBMRDB および SNASVCMG のサンプルのリストが示されています。この例では 4K の *RUSIZE* が指定されていますが、ご使用の環境には適していない可能性があります。たとえば、イーサネットを使用している場合、最大フレーム・サイズは 1536 バイトになります。VTAM 管理者にこれらの値を検査してもらい、DB2 Connect に指定すべきモード・テーブル項目名と *RUSIZE* を教えてもらう必要があります。APPC を使用する際は、SNASVCMG ログオン・モードを定義する必要があります。


```

-----1-----2-----3-----4-----5-----6-----7-----
RDBMODES MODTAB

IBMRDB  MODEENT LOGMODE=IBMRDB,  DRDA DEFAULT MODE          *
        TYPE=0,                 NEGOTIABLE BIND            *
        PSNDPAC=X'01',          PRIMARY SEND PACING COUNT  *
        SSNDPAC=X'01',          SECONDARY SEND PACING COUNT *
        SRCVPAC=X'00',          SECONDARY RECEIVE PACING COUNT *
        RUSIZES=X'8989',        RUSIZES IN-4K   OUT-4K     *
        FMPROF=X'13',           LU6.2 FM PROFILE          *
        TSPROF=X'07',           LU6.2 TS PROFILE          *
        PRIPROT=X'B0',          LU6.2 PRIMARY PROTOCOLS   *
        SECPROT=X'B0',          LU6.2 SECONDARY PROTOCOLS *
        COMPROT=X'D0B1',        LU6.2 COMMON PROTOCOLS   *
        PSERVIC=X'0602000000000000122F00' LU6.2 LU TYPE

SNASVCMG MODEENT LOGMODE=SNASVCMG, DRDA DEFAULT MODE          *
        PSNDPAC=X'00',          PRIMARY SEND PACING COUNT  *
        SSNDPAC=X'02',          SECONDARY SEND PACING COUNT *
        SRCVPAC=X'00',          SECONDARY RECEIVE PACING COUNT *
        RUSIZES=X'8585',        RUSIZES IN-1K   OUT-1K     *
        FMPROF=X'13',           LU6.2 FM PROFILE          *
        TSPROF=X'07',           LU6.2 TS PROFILE          *
        PRIPROT=X'B0',          LU6.2 PRIMARY PROTOCOLS   *
        SECPROT=X'B0',          LU6.2 SECONDARY PROTOCOLS *
        COMPROT=X'D0B1',        LU6.2 COMMON PROTOCOLS   *
        PSERVIC=X'06020000000000000000300' LU6.2 LU TYPE

```

関連タスク:

- 83 ページの『DB2 Connect からの接続のための DB2 Universal Database for iSeries の準備』

第 10 章 DB2 Connect 通信のための DB2 UDB for iSeries データベースの準備

DB2 Connect からの接続のための DB2 Universal Database for iSeries の準備

DB2 Connect を使ってリモート・システムは、DB2 UDB for iSeries システム上のデータにアクセスすることができます。

手順:

その接続をセットアップするには、次の項目を理解する必要があります。

1. ローカル・ネットワーク名。DSPNETA と入力して、この情報を得ることができます。
2. ローカル・アダプター・アドレス。WRKLIND (*trlan) と入力して、この情報を得ることができます。
3. モード名。WRKMODD と入力して、モード名のリストを得ることができます。iSeries システム上でモード IBMRDB が定義されている場合には、それを使用してください。
4. ローカル・コントロール・ポイント名。DSPNETA と入力して、この情報を得ることができます。
5. リモート・トランザクション・プログラム名。デフォルトは X'07'6DB (X'07F6C4C2') です。DB2 UDB for iSeries は常にデフォルトを使用します。16 進数を入力するのが不便であれば、別名は QCNTEDDM です。
6. リレーショナル・データベース名。DSPRDBDIRE と入力して、この情報を得ることができます。これによりリストが表示されます。リモート・ロケーション列に *LOCAL が含まれている行は、クライアントに定義する必要のある RDBNAME を識別します。*LOCAL 項目がない場合は、サーバー上で DSPNETA コマンドで得られるシステム名を使用するか、新たに追加できます。

例を以下に示します。

リレーショナル・データベースのディレクトリ項目の表示

Position to

オプションを入力して、Enter キーを押してください。
5=Display details 6=Print details

Option	Relational Database	Remote Location Text
-	_____	
-	DLHX	RCHAS2FA
-	JORMT2FA	JORMT2FA
-	JORMT4FD	JORMT4FD
-	JOSNAR7B	RCHASR7B
-	RCHASR7B	*LOCAL
-	RCHASR7C	RCHASR7C
-	R7BDH3SNA	RCH2PDH3
-	RCHASDH3	RCHASDH3

iSeries サーバーからこれらのパラメーターを取得したならば、次のワークシートに値を入力してください。

表 4. iSeries からの構成パラメーター

項目	パラメーター	例	使用値
A-1	ローカル・ネットワーク名	SPIFNET	
A-2	ローカル・アダプター・アドレス	400009451902	
A-3	モード名	IBMRDB	
A-4	ローカル・コントロール・ポイント名	SYD2101A	
A-5	リモート・トランザクション・プログラム	X'07F6C4C2' (デフォルト)	
A-6	リレーショナル・データベース名	NEW_YORK3	

詳細は、「分散データベース体系(DRDA) 接続の手引き」を参照してください。

関連タスク:

- 85 ページの『DB2 Connect からの接続のための DB2 for VSE & VM の準備』

第 11 章 DB2 Connect 通信のための DB2 for VM & VSE データベースの準備

DB2 Connect からの接続のための DB2 for VSE & VM の準備

DB2 Server for VSE & VM をアプリケーション・サーバーとしてセットアップする方法の詳細については、「*DRDA Connectivity Guide*」を参照してください。

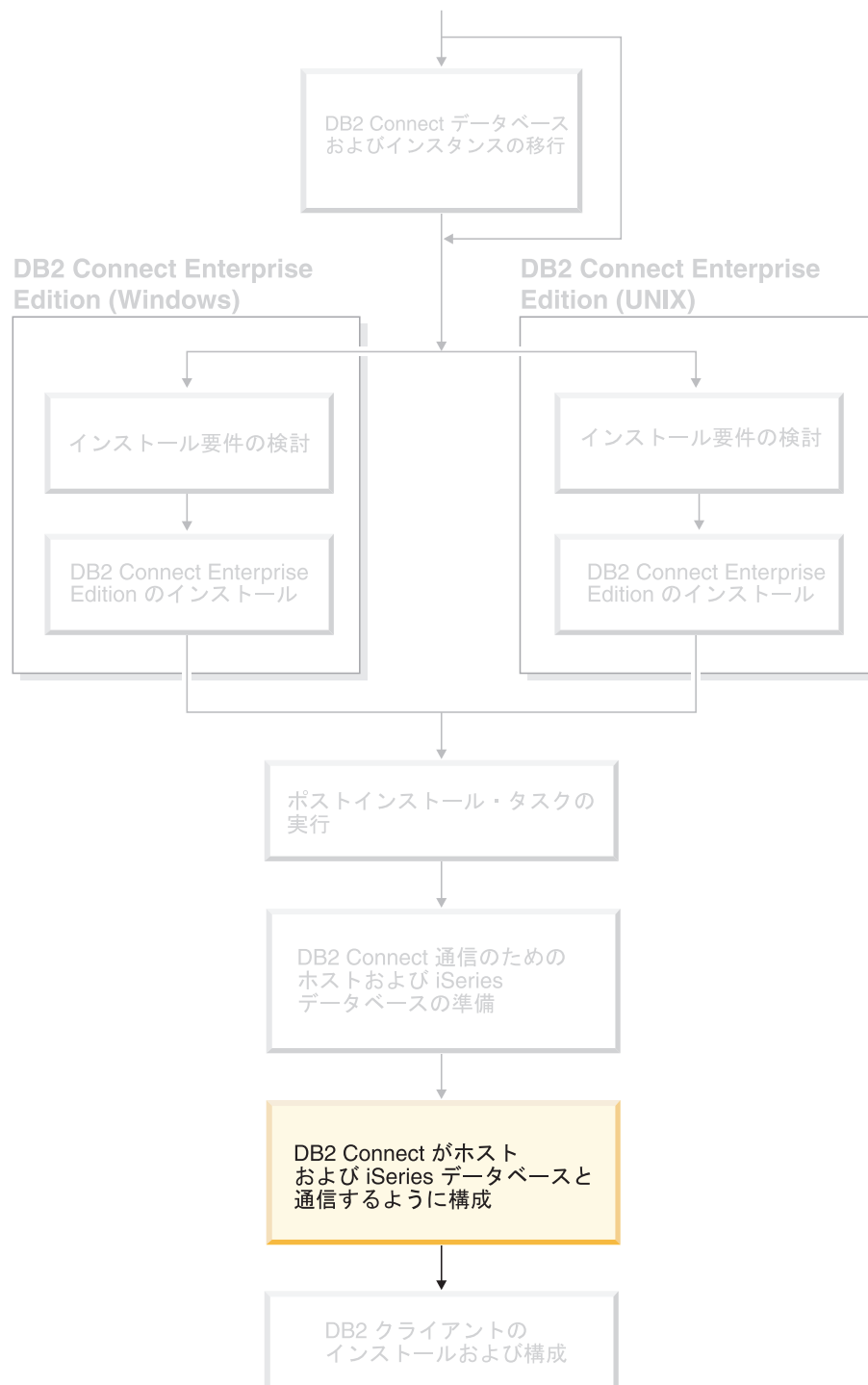
関連概念:

- 「コネクティビティ 補足」の『DB2 for VM』
- 「コネクティビティ 補足」の『DB2 for VSE』

関連タスク:

- 「コネクティビティ 補足」の『DRDA 通信用のアプリケーション・リクエスターまたはアプリケーション・サーバーの準備 (VM)』

第 5 部 ホストおよび iSeries データベースへのアクセスの構成



DB2 Connect がインストールされ、データベース・サーバーが通信を受け入れるように構成されたならば、2つのシステム間の接続を確立し、微調整する必要があります。

ます。このセクションでは、構成アシスタント (CA) を使用して、データベース・サーバーを見つけ、接続し、バインドする方法について説明します。

このセクションの対象読者

- ネットワーク・システム管理者
- DB2 Connect システムをインストールし構成するテクニカル・スタッフ

第 12 章 構成アシスタントの使用

CA を使用した、ホストまたは iSeries データベース・サーバーへの接続の構成

このタスクでは、構成アシスタント (CA) を使用して、DB2 Connect Personal Edition (PE) または DB2 Connect Enterprise Edition をリモート・データベースのホストまたは iSeries データベース・サーバーに接続する方法について説明します。構成アシスタントとは、データベース接続およびその他のデータベース設定の構成に使用できる DB2 GUI ツールです。

旧リリースの DB2 では構成アシスタント (CA) は、クライアント構成アシスタント (CCA) という名称でした。

前提条件:

- 構成アシスタントは、DB2 Connect ワークステーションにインストールしなければなりません。DB2 バージョン 8 では構成アシスタントは、DB2 Administration Client および DB2 Application Development Client の一部として利用することができます。
- インバウンド・クライアント要求を受け入れるようにリモート・サーバーを構成する必要があります。デフォルトでは、サーバー・インストール・プログラムは、インバウンド・クライアント接続用のほとんどのプロトコルをサーバー上で検出および構成します。

手順:

CA を使ってデータベースへの接続を構成するには、以下の方法のうちのいずれかを選択します。

- ディスカバリーを使用したデータベースへの接続
- プロファイルを使用したデータベースへの接続
- CA を使用したデータベースへの手動接続

関連タスク:

- 89 ページの『ディスカバリーを使用したデータベース接続の構成』
- 91 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 92 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』

構成タスク

ディスカバリーを使用したデータベース接続の構成

構成アシスタントのディスカバリー機能を使うと、ネットワークでデータベースを検索できます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

制約事項:

以下の場合、ディスカバリー機能はリモート・システムを検出できない可能性があります。

- Administration Server がリモート・システムで稼働していない。
- ディスカバリー機能がタイムアウトになっている。デフォルトでは、ディスカバリー機能は 10 秒間ネットワークを検索します。これは、リモート・システムを検出するために十分でない場合があります。DB2DISCOVERYTIME レジストリー変数を指定して、長い時間を指定することができます。
- ディスカバリー機能の実行されるネットワークが指定されていて、特定のリモート・システムにディスカバリー要求が到達しない。

制約事項:

CA のディスカバリー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて有効になっている必要があります。

手順:

ディスカバリーを使用してシステムにデータベースを追加するには、次の手順を実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA のメニュー・バーで「選択済み (Selected)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)」を選択します。「データベースの追加 (Add Database)」ウィザードがオープンします。
4. 「ネットワークの検索 (Search the network)」ラジオ・ボタンを使用して、「次へ (Next)」をクリックします。
5. 「既知のシステム (Known Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。クライアントに認識されているすべてのシステムのリストが表示されます。「その他のシステム (Other Systems)」の横のフォルダーをダブルクリックします。ネットワーク上のすべてのシステムのリストが表示されます。
6. インスタンスとデータベースのリストを展開して、追加したいデータベースを選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
7. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力し、このデータベースについて記述するコメントを「コメント (Comment)」フィールドに入力します。
8. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。

9. 「完了 (**Finish**)」をクリックします。これで、追加したデータベースを使用できるようになります。「クローズ (**Close**)」をクリックして、CA を終了します。

関連タスク:

- 92 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 91 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 94 ページの『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

プロファイルを使用したデータベース接続の構成

サーバー・プロファイルには、システム上のサーバー・インスタンス、およびそれぞれのサーバー・インスタンスのデータベースについての情報が含まれています。クライアント・プロファイルには、別のクライアント・システムでカタログされたデータベース情報が記述されています。

サーバー・プロファイルを使用して 1 つのデータベースに接続するには、下記のようにします。同時に複数のデータベースへの接続を構成する場合は、構成アシスタント (CA) のインポート機能を使用する必要があります。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

手順:

プロファイルを使用してデータベース接続を構成するには、次の手順を行います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA のメニュー・バーで「選択済み (**Selected**)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (**Add Database Using Wizard wizard**)」を選択します。
4. 「プロファイルを使用する (**Use a profile**)」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ (**Next**)」をクリックします。
5. 「...」をクリックして、プロファイルを選択します。
6. 「ロード (**Load**)」をクリックして、プロファイル内のデータベースを選択します。
7. 「次へ (**Next**)」をクリックします。
8. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (**Database alias**)」フィールドに入力し、このデータベースについて記述するコメントを「コメント (**Comment**)」フィールドに入力します。「次へ (**Next**)」をクリックします。
9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録する必要があります。「ODBC 用にこのデータベースを登録 (**Register this database for ODBC**)」チェック・ボックスを選択します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。

10. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、このデータベースを使用できません。

関連タスク:

- 121 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』
- 123 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成

接続したいデータベースについての情報がある場合、手動ですべての構成情報を入力することができます。この方法は、コマンド行プロセッサを使用してコマンドを入力するのと類似していますが、パラメーターがグラフィカルに提示されます。

前提条件:

- 有効な DB2 ユーザー ID であることを確認してください。
- DB2 サーバーまたは DB2 Connect サーバー製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、SYSADM または SYSCTRL 権限を付与されたユーザー ID であることを確認してください。

手順:

CA を使用して手動でシステムにデータベースを追加するには、次の手順を実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA メニュー・バーの「選択済み (Selected)」で、「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add Database Using Wizard wizard)」を選択します。
4. 「データベースへの接続を手動で構成する (Manually configure a connection to a database)」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ (Next)」をクリックします。
5. Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用している場合には、DB2 ディレクトリーを保持したい場所に対応するラジオ・ボタンを選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
6. 「プロトコル (Protocol)」リストから、使用したいプロトコルに対応するラジオ・ボタンを選択します。

ご使用のシステムに DB2 Connect がインストールされており、TCP/IP または APPC を選択する場合には、「データベースはホストまたは OS/400 システムに物理的に常駐 (The database physically resides on a host or OS/400 system)」を選択できます。このチェック・ボックスを選択すると、ホストまたは OS/400 データベースに確立したい接続のタイプを選択できます。

- DB2 Connect ゲートウェイ経由の接続を確立するには、「ゲートウェイ経由でサーバーに接続 (Connect to the server via the gateway)」ラジオ・ボタンを選択します。
- 直接接続を確立するには、「サーバーに直接接続 (Connect directly to the server)」ラジオ・ボタンを選択します。

「次へ (Next)」をクリックします。

7. 必要な通信プロトコル・パラメーターを入力し、「次へ (Next)」をクリックします。
8. 追加したいリモート・データベースのデータベース別名を「データベース名 (Database name)」フィールドに入力し、ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力します。

ホストまたは OS/400 データベースを追加している場合、OS/390 または z/OS データベースのロケーション名、OS/400 データベースの RDB 名、または VSE か VM データベースの DBNAME を「データベース名 (Database name)」フィールドに入力します。さらにオプションとして、このデータベースについて記述するコメントを「コメント (Comment)」フィールドに入力できます。

「次へ (Next)」をクリックします。

9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていないならばなりません。
10. 「ノード・オプションの指定 (Specify the node options)」ウィンドウで、オペレーティング・システムを選択して、接続したいデータベース・システムのリモート・インスタンス名を入力します。
11. 「システム・オプションの指定 (Specify the system options)」ウィンドウで、システム名、ホスト名、およびオペレーティング・システムが正しいかどうかを確認します。オプションで、コメントを入力することができます。「次へ (Next)」をクリックします。
12. 「セキュリティ・オプションの指定 (Specify the security options)」ウィンドウで、認証に使用されるセキュリティ・オプションを指定します。
13. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。メニューから「終了 (Exit)」を選択して、CA を閉じます。

関連タスク:

- 89 ページの『ディスカバリーを使用したデータベース接続の構成』
- 91 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 94 ページの『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

構成アシスタントによるデータベース接続のテスト

クライアント–サーバー間の接続を構成した後、データベース接続をテストする必要があります。

手順:

データベース接続をテストするには、

1. 「**構成アシスタント (Configuration Assistant)**」を開始します。
2. 詳細ビューでデータベースを強調表示してから、「**接続のテスト (Test Connection)**」を「**選択済み (Selected)**」メニューから選択します。「**接続のテスト (Test Connection)**」ウィンドウが表示されます。
3. テストする接続のタイプを選択します (デフォルトは **CLI**)。同時に複数のタイプをテストできます。リモート・データベースの有効なユーザー ID およびパスワードを入力し、「**接続のテスト (Test Connection)**」をクリックします。接続が正常に確立された場合、接続が確立されたことを確認するメッセージが「**結果 (Results)**」ページに表示されます。

接続テストに失敗した場合には、ヘルプ・メッセージを受け取ります。誤って指定した設定を変更するには、詳細ビューでデータベースを選択してから、「**データベースの変更 (Change Database)**」を「**選択済み (Selected)**」メニューから選択します。

関連タスク:

- 89 ページの『ディスカバリーを使用したデータベース接続の構成』
- 92 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 91 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』

第 13 章 DB2 Connect Sysplex のサポート

DB2 Connect Sysplex のサポート

Sysplex とは、ハードウェアとソフトウェアを使って共同で作業する zSeries® サーバーの集合のことです。Sysplex は、共同で作業するプロセッサ数を増やして、処理可能な作業量を増やすことによって、共同作業を調整します。処理能力の強化に加えて Sysplex では、各種レベルのハードウェアやソフトウェアを混合したり、システムを動的に追加したりするための柔軟性も実現されています。

Sysplex を使うと、最初のリモート・データベース・サーバーで障害が起きても、そのサーバーからの着信接続を、指定されたバックアップ・サーバーに DB2 Connect からシームレスに転送することができます。DB2 Connect の Sysplex サポートはデフォルトで使用可能になっていますが、Sysplex サポートを使用可能にするには、各 DCS データベース・カタログ項目を構成する必要があります。

注: DB2 Connect のコンセントレーターがアクティブでない場合にサーバーで障害が生じると、アクティブな接続はホスト間で転送されません。つまり、サーバーで障害が生じると、そのサーバーへの既存の接続はすべて失われることになります。コンセントレーターがアクティブになっていれば、ダウンした特定の Sysplex メンバーへの不完了トランザクションとの接続は失われません。他の接続は維持されて、次のトランザクションが残りのメンバーに送信されます。

関連概念:

- 96 ページの『Sysplex の構成の要件』
- 95 ページの『OS/390 および zSeries SYSPLEX を活用する際の考慮事項』
- 97 ページの『DB2 Sysplex の活用』

OS/390 および zSeries SYSPLEX を活用する際の考慮事項

DB2 Connect Enterprise Edition サーバーは、複数の Sysplex への接続のルーティング時のロード・バランシングおよびフォールト・トレランスの機能を提供します。データ共用環境内で稼働する DB2® for OS/390® and z/OS™ に接続すると、DB2 Connect は、Workload Manager (WLM) から提示されたシステム負荷情報に基づいて、データ共用グループを構成する様々な DB2 サブシステムにワークロードを分散します。このサポートには、DB2 (OS/390 版) バージョン 6 以降が必要です。

DB2 Connect™ は、Sysplex メンバーを優先順位付けしたリストを WLM から受信します。各 Sysplex は、各接続アドレスごとに重みを付けた優先順位情報を戻します。次にこのリストは DB2 Connect サーバーで使われて、着信の接続要求が処理されますが、その処理では、最高の優先順位を割り振られた Sysplex メンバーにその要求が配布されます。優先順位情報の重みを付けられた Sysplex リストが、ロード・バランシング用に各接続中に獲得されます。DB2 Connect の接続コンセントレーターが使用可能になっていれば、そのリストは、各トランザクションの送付先の決定の際にも使用されます。

注: DB2 Connect の Sysplex の機能を活用するのに、OS/390 および z/OS DDF の構成を変更する必要はありません。

DB2 Connect Enterprise Edition サーバーには、接続障害が起きた場合は代替りの Sysplex への接続を試みるというフォールト・トレランス機能が備わっています。認識される接続がすべて失敗した場合にのみ、アプリケーションにエラーが戻されます。

この機能を使用可能にするために、新規のプロファイル (またはレジストリー) 変数である DB2SYSPLEX_SERVER が作成されました。DB2SYSPLEX_SERVER が存在しない場合またはゼロでない値に設定されている場合には、Sysplex は使用可能です。DB2SYSPLEX_SERVER をゼロに設定すると、Sysplex を活用できなくなります。DB2SYSPLEX_SERVER をゼロに設定すると、DCS データベース・カタログ項目の指定方法に関係なく、サーバーの Sysplex が使用不可になります。

DB2 レジストリー変数 DB2CONNECT_IN_APP_PROCESS を使用して、DB2 Connect Enterprise Edition サーバーと同じマシンで実行されているクライアントが Sysplex サポートを活用することを許可できます。AIX® を使用している場合には、Sysplex サポートを活用するために EXTSHM 変数も構成することをお勧めします。

コンセントレーターを追加すると、DB2 Connect は、トランザクション境界でワークロードの均等化を図ることができます。そのためには、DB2 Connect コンセントレーターを使用可能にする必要があります。ホストの DB2 バージョンに応じて、ロード・บาลancingの様々な細分度を図ることができます。DB2 (OS/390 版) バージョン 6.1 またはそれ以上でロード・บาลancingを実行すると、DB2 Connect はトランザクションごとに WLM から更新済み状況を受け取ります。

しかし、OS/390 バージョン 6.1 と Sysplex サポートで、長時間接続を利用することはできません。

関連概念:

- 95 ページの『DB2 Connect Sysplex のサポート』
- 96 ページの『Sysplex の構成の要件』
- 97 ページの『DB2 Sysplex の活用』

Sysplex の構成の要件

- DB2 Connect Enterprise Edition サーバーでは Sysplex はデフォルトで使用可能になっていますが、DB2SYSPLEX_SERVER プロファイル変数の値をゼロに設定すれば、オフにすることができます。
- データベースの DCS ディレクトリー項目で、Sysplex (大文字小文字の区別なし) が 6 番目の定位置パラメーターに含まれていないと、データベースによっては Sysplex を活用することはできません。

関連概念:

- 95 ページの『DB2 Connect Sysplex のサポート』
- 95 ページの『OS/390 および zSeries SYSPLEX を活用する際の考慮事項』
- 97 ページの『DB2 Sysplex の活用』

DB2 Sysplex の活用

典型的なシナリオとして、DB2 Connect Enterprise Edition サーバー・マシン A は、2 つの DB2[®] for OS/390[®] and z/OS[™] サーバー (たとえば、B および C) から成る Sysplex と通信するとします。

Sysplex マシン B	Sysplex マシン C
HOST_NAME=MVSHOST	HOST_NAME=MVSHOST1

このシナリオで、アプリケーションによって、次のようなコマンドが使われたとします。

```
db2 connect to aliasb user xxxxxxxx using xxxxxxxx
```

データベース MVSHOST への接続が確立されます。DB2 Connect サーバーと DCS ディレクトリー項目のどちらでも Sysplex を使用できるので、DB2 for OS/390 and z/OS は各 Sysplex 参加者 (MVSHOST および MVSHOST1) のネットワーク・アドレスを DB2 Connect に対して識別します。この情報を戻すのに DRDA4 プロトコルおよびメッセージ・フローが使用されます。最初の接続が確立されると、戻されるアドレス・リストは DB2 Connect サーバーのキャッシュに入れられます。初期 CONNECT が TCP/IP ノードに対して発行されると、IP アドレスが戻されます。

ロード・バランシングとフォールト・トレランスに使用される優先順位情報:

DB2 for OS/390 and z/OS によって提供されるアドレス・リストには、各ネットワーク・アドレスの接続数を含め、優先順位情報が含まれています。リストは、DB2 Connect によって新しい接続が確立される度に更新されます。この追加情報はロード・バランシング、およびフォールト・トレランスのために使用されます。

DB2 Connect で使用するキャッシュ・アドレス・リスト:

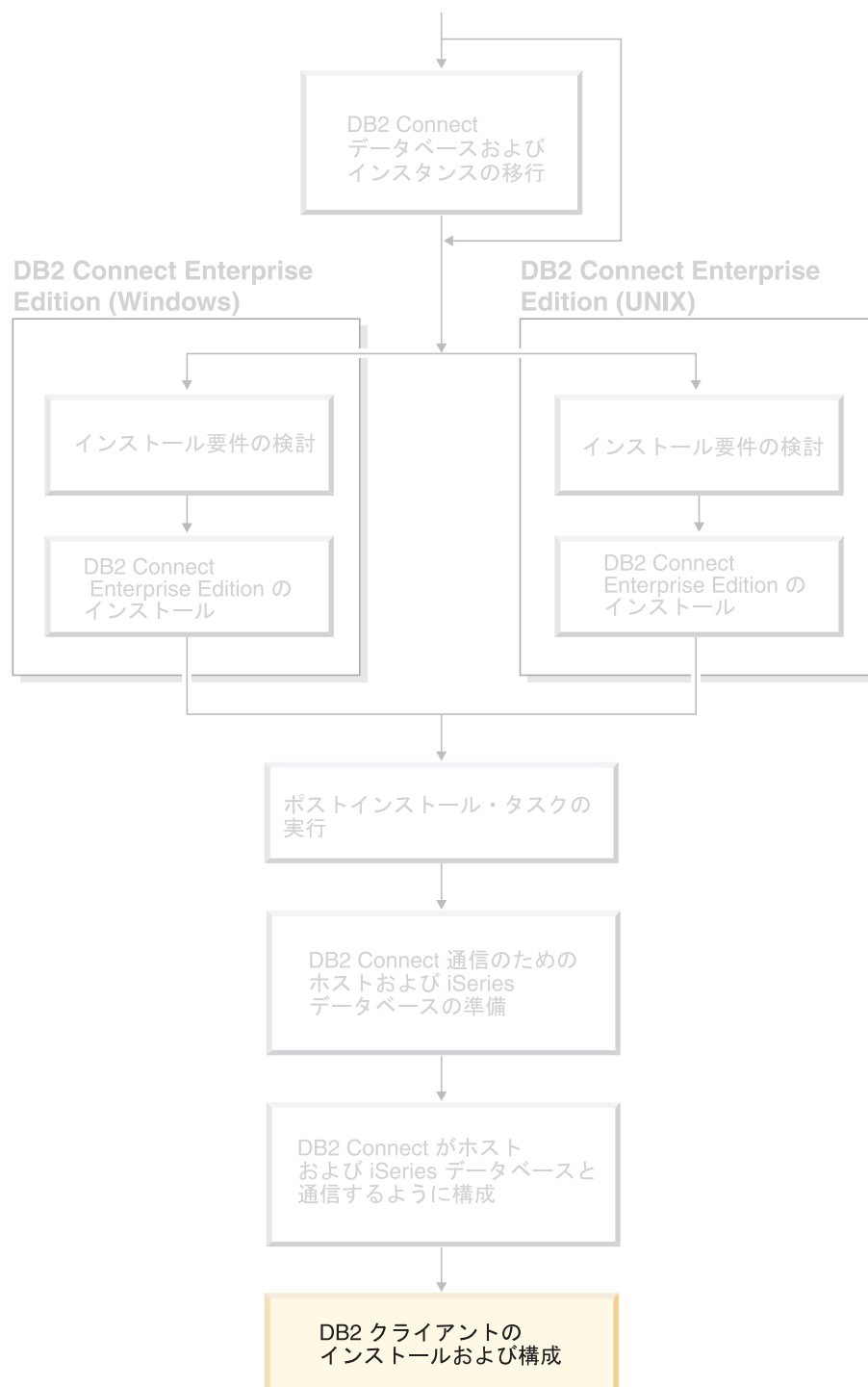
ALIASB へのデータベース接続が失敗すると、SQL30081N エラー・メッセージが出されて、接続はドロップされます。ALIASB への接続要求がさらに受け取られると、DB2 Connect は次のことをします。

1. DB2 for OS/390 and z/OS から戻された優先順位情報に基づいて、キャッシュに入れられたアドレス・リスト中の最高優先順位のマシンを試みます。このストラテジーは DB2 Connect によって必ず使用されます。これによって、ロード・バランシングが達成されます。
2. この接続の試みが失敗すると、DB2 for OS/390 and z/OS によって戻されたリストで、優先順位の高いものから順に他のアドレスが試されます。このように、DB2 Connect は Sysplex 情報を活用してフォールト・トレランスを図ります。
3. 他のすべての接続の試みが失敗すると、DB2 Connect はカタログされたノード・ディレクトリーに入っているアドレスを使用して、ALIASB への接続を再度試みます。

関連概念:

- 95 ページの『DB2 Connect Sysplex のサポート』
- 96 ページの『Sysplex の構成の要件』
- 95 ページの『OS/390 および zSeries SYSPLEX を活用する際の考慮事項』

第 6 部 クライアントのインストールおよび構成



DB2 Connect を介してホストまたは iSeries ベースのデータベースと通信するように、クライアント・アプリケーションを適切に構成する必要があります。このセ

クションでは、DB2 Client Software をインストールし、DB2 Connect を使用する
ように構成する方法について説明します。

このセクションの対象読者

- ネットワーク・システム管理者
- PC で DB2 データベース・クライアントを使用するユーザー

第 14 章 インストールの概要

DB2 クライアント

DB2[®] クライアントには以下の 4 つのタイプがあります。

- **Run-Time Client Lite。** DB2 Run-Time Client Lite は、DB2 Run-Time Client の小型のフットプリント・バージョンで、Windows[®] 上でのみ使用可能です。Windows Installer Merge Modules もこの製品に対して使用可能です。これを使用して、このクライアントの機能をユーザーの製品に組み込むことができます。
- **Run-Time Client。** このタイプの DB2 クライアントを使用して、GUI を使用しない基本的なアクセスを提供します。
- **Administration client。** このタイプの DB2 クライアントを使用して、DB2 サーバーをリモート側で管理します。また DB2 Administration Client には、DB2 Run-Time Client で使用可能な機能すべてが含まれています。
- **Application Development client。** このタイプの DB2 クライアントを使用して、ストアド・プロシージャ、ユーザー定義関数、およびクライアント・アプリケーションを含む、DB2 データベース・アプリケーションを開発します。また DB2 Application Development Client には、DB2 Run-Time Client で使用可能な機能すべてが含まれています。

DB2 クライアント上にデータベースを作成することはできません。ユーザーがアクセスできるのは、DB2 サーバー上にあるデータベースだけです。

クライアント・バックレベル・サポート:

- DB2 UDB バージョン 8 クライアントは、DB2 UDB バージョン 8 サーバーをサポートします。
- DB2 UDB バージョン 8 クライアントは、DB2 UDB バージョン・サーバーが DRDA[®]-AS を実行している場合にのみ、DB2 UDB バージョン 7 サーバーに接続できます。
- DB2 UDB バージョン 7 およびバージョン 6 クライアントは、DB2 UDB バージョン 8 サーバーに接続できますが、機能は限定されます。
- DB2 UDB バージョン 8 クライアントは、DB2 Connect[™] バージョン 7 サーバーに接続できません。

関連概念:

- 103 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 102 ページの『DB2 Administration Client』
- 102 ページの『DB2 Application Development Client』
- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによるインストールの基礎』
- 103 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 111 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』

- 112 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『バージョン 8 と以前のリリースとの非互換性』
- 「DB2 Universal Database クライアント機能 概説およびインストール」の『DB2 クライアントのマージ・モジュール』

DB2 クライアントのタイプ

DB2 Administration Client

DB2[®] Administration Client を使用すると、さまざまなプラットフォームのワークステーションから DB2 データベースへのアクセスと管理を行うことができます。DB2 Administration Client には DB2 Run-Time Client のすべての機能があり、すべての DB2 管理ツールおよびシン・クライアントのサポートが組み込まれています。

サポートされるプラットフォーム:

DB2 Administration Client を使用できるプラットフォームは、AIX[®]、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、および Windows[®] の各オペレーティング・システムです。

関連概念:

- 101 ページの『DB2 クライアント』
- 103 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 102 ページの『DB2 Application Development Client』
- 103 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 111 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』
- 112 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

DB2 Application Development Client

DB2[®] Application Development Client は、文字ベース、マルチメディア、およびオブジェクト指向のアプリケーションの開発用のグラフィックおよび非グラフィック・ツールとコンポーネントの集合です。特殊フィーチャーとして、サポートしているすべてのプログラム言語用のデベロップメント・センターとサンプル・アプリケーションを含んでいます。Application Development Client には、DB2 Administration Client 製品の一部として提供されるツールとコンポーネントが組み込まれています。

サポートされるプラットフォーム:

DB2 Application Development Client を使用できるプラットフォームは、AIX[®]、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、および Windows[®] の各オペレーティング・システムです。

関連概念:

- 101 ページの『DB2 クライアント』
- 103 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 102 ページの『DB2 Administration Client』
- 103 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 111 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』
- 112 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

DB2 Run-Time Client

DB2[®] Run-Time Client は、アプリケーションが DB2 Universal Database[™] サーバーおよび DB2 Connect[™] サーバーにアクセスするのに必要な機能を提供します。機能には、通信プロトコル・サポートと、JDBC、SQLJ、ODBC、CLI、OLE DB、および .NET などのアプリケーション・インターフェースのサポートが含まれます。

制限:

- 構成アシスタントは DB2 UDB Run-Time Client にパッケージされていません。使用可能な GUI は CLI/ODBC 管理 GUI だけです。
- DB2 Run-Time Client を使用する場合は、CLI アプリケーション用の DB2 クライアントを使用する前に、有効なバインド・ファイルが置かれているシステムから CLI パッケージをバインドする必要があります。

サポートされるプラットフォーム:

DB2 Run-Time Client を使用できるプラットフォームは、AIX[®]、HP-UX、Linux、Solaris オペレーティング環境、および Windows[®] の各オペレーティング・システムです。

関連概念:

- 101 ページの『DB2 クライアント』
- 102 ページの『DB2 Administration Client』
- 102 ページの『DB2 Application Development Client』
- 103 ページの『DB2 Run-Time Client Lite』

関連タスク:

- 111 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』
- 112 ページの『DB2 クライアントのインストール (UNIX)』

DB2 Run-Time Client Lite

DB2[®] Run-Time Client Lite は、アプリケーションが DB2 Universal Database[™] サーバーにアクセスできるようにする基本機能を提供します。また DB2 Run-Time

Client Lite には、DB2 Run-Time Client と同様に、JDBC、SQLJ、ODBC、CLI、OLE DB および .NET に必要なサポートも含まれます。

これはインストール・イメージ・サイズを削減しているため、DB2 Run-Time Client Lite は大容量配置またはユーザーのアプリケーションとのバンドルに理想的です。

インストール・プログラムは、インストールを実行する際の言語、および英語 (必須) をインストールします。DB2 Run-Time Client Lite は、すべての言語に対するサポートを提供する 1 つの言語と、言語特有のいくつかのイメージから成っています。すべてのイメージには、英語サポートが含まれます。インストールする言語 (複数可) に該当するイメージを使用しなければなりません。

制限:

- DB2 Run-Time Client Lite は、Windows® オペレーティング・システム上でのみ使用可能で、TCP/IP および名前付きパイプ通信プロトコルのみをサポートします。
- 構成アシスタントは DB2 UDB Run-Time Client Lite にパッケージされていません。使用可能な GUI は CLI/ODBC 管理 GUI だけです。
- CLI アプリケーション用の DB2 クライアントを使用する前に、有効なバインド・ファイルが置かれているシステムから CLI パッケージをバインドする必要があります。

関連概念:

- 103 ページの『DB2 Run-Time Client』
- 102 ページの『DB2 Administration Client』
- 102 ページの『DB2 Application Development Client』

関連タスク:

- 111 ページの『DB2 クライアントのインストール (Windows)』

関連資料:

- 「DB2 Universal Database クライアント機能 概説およびインストール」の『DB2 クライアントのマージ・モジュール』

第 15 章 インストール要件

DB2 クライアントのインストール要件 (Windows)

以下に、Windows 上の DB2 クライアントのための、オペレーティング・システム要件、ソフトウェア要件、および通信要件を示します。

オペレーティング・システム要件

以下のうちの 1 つです。

- Windows 98
- Windows ME
- Windows NT バージョン 4.0 (Service Pack 6a) 以降
- Windows NT Server 4.0, Terminal Server Edition (Terminal Server 用 Service Pack 6 以降)。これは DB2 Run-Time Client だけをサポートします。
- Windows 2000
- Windows XP (32-bit 版と 64-bit 版)
- Windows Server 2003 (32-bit 版と 64-bit 版)

ソフトウェア要件

最新のオペレーティング・システム情報については、

<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。
- LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) を使用したい場合、Microsoft LDAP クライアントまたは IBM SecureWay LDAP クライアント V3.2.1 以降 のいずれかが必要になります。インストールの前に、db2schex ユーティリティを使用して、ディレクトリー・スキーマを拡張する必要があります。このユーティリティは、インストール・メディア上にあります。

Microsoft LDAP クライアントは、Windows ME、Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003 の各オペレーティング・システムに組み込まれています。

- データベースのバックアップと回復に Tivoli Storage Manager 機能を使用する場合は、Tivoli Storage Manager Client のバージョン 4.2.0 以降が必要です。
 - 64-bit Windows NT システムでは、TSM クライアント API バージョン 5.1 が必須です。
- ご使用のオペレーティング・システムに IBM Antivirus プログラムがインストールされている場合には、これをオフにするかアンインストールしなければ DB2 インストールを完了することはできません。

- Application Development Client をインストールする場合、SQL ストアド・プロシージャをビルドするために C コンパイラーが必要です。

通信要件

- 名前付きパイプ、または TCP/IP
- Windows 基本オペレーティング・システムは、名前付きパイプおよび TCP/IP 接続を備えています。

注: DB2 UDB バージョン 8 では、リモート・データベースを管理する目的では TCP/IP のみがサポートされています。

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 クライアントのインストール要件 (AIX)

以下に、AIX 上の DB2 クライアントのための、ハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信要件を示します。

ハードウェア要件

RISC System/6000

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

以下のうちの 1 つです。

バージョン 4.3.3 (32 ビット)

- 保守レベル 11

バージョン 5.1.0 (32 ビットまたは 64 ビット)

- 保守レベル 5 および推奨保守パッケージ AIX 5100-04 および APAR IY46667

バージョン 5.2.0 (32 ビットまたは 64 ビット)

保守レベル 2、および

並行 I/O (CIO) および直接 I/O (DIO) マウント・ボリュームの場合:
APAR IY49129 および IY49346

JFS ファイル・システムの場合:

APAR IY48339

JFS2 ファイル・システムの場合:

APAR IY49304

Java の場合:

推奨保守パッケージ AIX 5200-01 および APAR IY46668

1000 を超える db2agent を実行し、32 ビット AIX カーネルを使用する場合:

APAR IY49885、および db2start の前または AIX ブート時に "vmo -o pta_balance_threshold=0" を指定する

次の AIX ファイル・セットは、英語以外の言語で DB2 UDB をインストールまたは実行するのに必要です。

- X11.fnt.ucs.ttf (AIX Windows Unicode TrueType フォント)
- X11.fnt.ucs.com (AIX Windows 共通フォント)
- x1C.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x
- アジア諸国の言語の場合、次のファイル・セットも必要です。
 - X11.fnt.ucs.ttf_CN (zh_CN または Zh_CN 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_KR (ko_KR 用)
 - X11.fnt.ucs.ttf_TW (zh_TW または Zh_TW 用)
- AIX バージョン 4.3.3 では、次のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix43.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x
- AIX バージョン 5.x では、次のファイル・セットが必要です。
 - x1C.aix50.rte 5.0.2.x または 6.0.0.x

AIX ファイル・セットは、

<http://techsupport.services.ibm.com/server/fixes> からダウンロードできます。

ソフトウェア要件

- Kerberos サポートの場合、IBM Network Authentication Service クライアント v1.3 またはそれ以降を、AIX V5.2 またはそれ以降上で実行していることが必要です。
- LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) サポートを使用するには、IBM SecureWay Directory Client V3.2.1 またはそれ以降が必要です。
- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。

通信要件

- TCP/IP が必要です。インストール時に選択していれば、AIX 基本オペレーティング・システムは TCP/IP 接続性を実現します。

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 クライアントのインストール要件 (HP-UX)

以下に、HP-UX 上の DB2 クライアントのための、ハードウェア要件、オペレーティング・システム要件、ソフトウェア要件、および通信要件を示します。

制約事項:

カーネル構成パラメーターを更新する場合には、システム再始動が必要です。カーネル構成パラメーターは /etc/system に設定されます。これらのパラメーターは、DB2 クライアントをインストールする前に設定しなければなりません。

ハードウェア要件

- HP 9000 シリーズ 700 または 800 システム
- HP Intel Itanium 2 プロセッサ

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

- 以下をインストール済みの PA-RISC 2.x (PA-8x00) プロセッサを持つシステム用の HP-UX 11i (11.11)
 - 2003 年 6 月 GOLDBASE11i バンドル
 - 2003 年 6 月 GOLDAPPS11i バンドル
 - パッチ PHSS_26560、PHKL_28489、PHCO_27434、および PHCO_29960
 - Java SDK 1.3.1 および 1.4 用パッチ。必要なパッチについては、<http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html> を参照してください。

DB2 クライアントは、パッチ PHKL_30065 を適用した Itanium ベースのシステム用の HP-UX バージョン 11i v2 (B.11.23) 上で実行できます。

ソフトウェア要件

- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。
- Application Development Client をインストールする場合、SQL ストアード・プロシージャをビルドするために C コンパイラが必要です。

通信要件

- TCP/IP は HP-UX 基本オペレーティング・システムで提供されます。

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 クライアントのインストール要件 (Linux)

以下に、Linux 上の DB2 クライアントのための、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信要件を示します。

カーネル構成パラメーターの更新が必要となることがあります。カーネル構成パラメーターは `/etc/sysctl.conf` に設定されます。 `sysctl` コマンドを使用したこれらのパラメーターの設定および活動化については、ご使用のオペレーティング・システムの資料を参照してください。

オペレーティング・システム要件

サポート・レベルの Linux に関する最新の技術情報を調べるには、ブラウザーで <http://www.ibm.com/db2/linux/validate> を参照してください。

DB2 Connect Enterprise Edition は現在、Linux zSeries 64 ビット上でサポートされます。

DB2 for Linux zSeries 31 ビットは Linux zSeries 64 ビット・オペレーティング・システム上ではサポートされません。Linux zSeries 64 ビット OS 上では「64 ビット DB2 for Linux zSeries 64 ビット OS」イメージを、Linux zSeries 31 ビット・オペレーティング・システム上では「31 ビット DB2 for Linux zSeries 31 ビット OS」イメージを使用しなければなりません。

ソフトウェア要件

DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。

Kerberos 認証を使用する場合には、以下のファイルセットを使用する、Red Hat Enterprise Linux Advanced Server 2.1 (32 ビット Intel のみ) が必要です。

- krb5-libs
- krb5-workstation

通信要件

- TCP/IP。インストール時に選択していれば、Linux 基本オペレーティング・システムは TCP/IP 接続性を実現します。

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

DB2 クライアントのインストール要件 (Solaris オペレーティング環境)

以下に、Solaris オペレーティング環境上の DB2 クライアントのための、ハードウェア要件、オペレーティング・システム要件、ソフトウェア要件、および通信要件を示します。

制約事項:

カーネル構成パラメーターを更新する場合には、システム再始動が必要です。カーネル構成パラメーターは `/etc/system` に設定されますが、DB2 クライアントを使用するために修正が必要な場合は、`/etc/system` に加えた変更を有効にするためにリブートが必要です。これらのパラメーターは、DB2 クライアントをインストールする前に設定しなければなりません。

ハードウェア要件

Solaris SPARC ベース・コンピューター

オペレーティング・システム要件

最新のオペレーティング・システム情報については、<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/sysreqs.html> を参照してください。

- Solaris のバージョン 7 以降
- Solaris Operating 環境のバージョン 7 には、以下のパッチが必要です。
 - Solaris 7 (32-bit) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106327-10

- Solaris 7 (64-bit) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 107226-17 + 107153-01 + 106300-11 + 106327-10
- Solaris 8 (32-bit) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108434-03 および 108528-12
- Solaris 8 (64-bit) 「推奨 & セキュリティー・パッチ」 + 108921-12 + 108940-24 + 108435-03 + 108434-03 および 108528-12
- Solaris 9 (32-bit)
- Solaris 9 (64-bit)

「推奨 & セキュリティー・パッチ」は、<http://sunsolve.sun.com> Web サイトから入手できます。SunSolve Online Web サイトで、左側のパネルで「Patches」メニュー項目をクリックします。

さらに J2SE Solaris オペレーティング環境 Patch Cluster も必要です。

次のソフトウェアは Solaris オペレーティング環境に DB2 クライアントをインストールするために必要です。

- SUNWlibC

ソフトウェア要件

- Kerberos サポートの場合、SEAM v1.0.1 を使用した Solaris オペレーティング環境 8 またはそれ以上が必要です。SEAM v1.0.1 は、Solaris オペレーティング環境 8 Admin Pack に組み込まれています。
- DB2 コントロール・センターのような Java ベースのツールを使用したり、ストアード・プロシージャとユーザー定義関数を含む Java アプリケーションを作成して実行したりするには、適切な SDK が必要です。
- Application Development Client をインストールする場合、SQL ストアード・プロシージャをビルドするために C コンパイラーが必要です。

通信要件

- TCP/IP が必要です。Solaris オペレーティング環境は TCP/IP 接続を備えています。

関連資料:

- 43 ページの『DB2 UDB 用の Java SDK レベル』

第 16 章 インストール

DB2 クライアントのインストール (Windows)

このタスクは Windows オペレーティング・システムでの DB2 クライアントのインストール方法を示します。

前提条件:

DB2 クライアントをインストールする前に、下記のことを確認してください。

- ご使用のシステムが、必要なメモリー、ディスク・スペース、およびインストール要件をすべて満たしている。
- インストールを実行できるユーザー・アカウントがある。

Windows 98、Windows ME

任意の有効な Windows 98 または Windows ME ユーザー・アカウント

Windows Terminal Server、Windows NT、Windows 2000、Windows XP、および Windows Server 2003

Users グループなど、Guests グループよりも大きい権限を持つグループに属するユーザー・アカウント。

Users グループのユーザーとして、Windows 2000 サーバーと Windows Server 2003 へのインストールを行うには、Users が HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software レジストリー・ブランチに書き込みアクセスができるようにレジストリー許可を変更しなければなりません。デフォルトの Windows 2000 および Windows Server 2003 環境では、Users グループのメンバーは HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software レジストリー・ブランチに対して読み取りアクセス権しか持っていない。

制約事項:

DB2 UDB バージョン 8 では、リモート・データベースを管理する目的では TCP/IP のみがサポートされています。

手順:

DB2 クライアントをインストールするには、以下のタスクを実行します。

1. インストールを実行するために使用するユーザー・アカウントで、システムにログオンします。
2. 他のすべてのプログラムをシャットダウンし、DB2 セットアップ・ウィザードが必要に応じてファイルを更新できるようにします。
3. 適切な CD-ROM をドライブに挿入します。自動実行機能によって DB2 セットアップ・ウィザードが起動します。DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを開始します。

手動で DB2 セットアップ・ウィザードを呼び出し、言語コードを指定することにより、デフォルトのシステム言語以外の言語で DB2 セットアップ・ウィザード

ドを実行することもできます。たとえば、**setup -i fr** は、DB2 セットアップ・ウィザードをフランス語で実行します。この例は、DB2 UDB Run-Time Client Lite には適用されません。

- Administration または Application Development クライアントをインストールする場合には、DB2 ランチパッドをオープンして、「製品のインストール (Install Products)」を選択します。
- DB2 セットアップ・ウィザードのプロンプトに従って進んでください。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。

DB2 クライアントをインストールした後は、リモート DB2 サーバーにアクセスするようにクライアントを構成してください。

ご使用の DB2 製品が、ローカル・コンピューターまたはネットワーク内の別のコンピューター上にある DB2 資料にアクセスするようになりたい場合には、DB2 Information Center をインストールしなければなりません。DB2 Information Center には、DB2 Universal Database および DB2 関連製品に関する資料が含まれています。DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (Windows) を参照してください。

関連概念:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによるインストールの基礎』
- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 157 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (Windows)』
- 「インストールおよび構成 補足」の『サーバー・データベースへのリモート・アクセスの構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (Windows)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『単一パーティション・データベース環境での DB2 サーバーのインストール (Windows)』

関連資料:

- 145 ページの『別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合の言語 ID』
- 「コマンド・リファレンス」の『setup - Install DB2 コマンド』
- 「DB2 Universal Database クライアント機能 概説およびインストール」の『DB2 Run-Time Client Lite のコマンド行オプション』

DB2 クライアントのインストール (UNIX)

この作業は UNIX での DB2 クライアントのインストールのステップです。

前提条件:

UNIX での DB2 クライアントのインストールを始める前に以下を行ってください。

- ご使用のシステムが、DB2 製品をインストールするのに必要なメモリー、ハードウェア、およびソフトウェア要件を満たしていることを確認してください。
- Solaris オペレーティング環境、または HP-UX 上に DB2 クライアントをインストールする場合、カーネル構成パラメーターを更新してシステムを再始動することが必要です。

制約事項:

DB2 UDB バージョン 8 では、リモート・データベースを管理する目的では TCP/IP のみがサポートされています。

手順:

カーネル構成パラメーターを更新してからシステムを開始 (Solaris オペレーティング環境および HP-UX では必須、Linux では推奨) した後に、DB2 クライアントをインストールできます。

UNIX 上に DB2 クライアントをインストールするには、以下のようになります。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 適切な CD-ROM を挿入およびマウントします。
3. **cd *Icdrom*** コマンドを入力して CD-ROM がマウントされているディレクトリーに移動します。ここで、*Icdrom* は CD-ROM のマウント・ポイントです。
4. **./db2setup** コマンドを入力します。「DB2 セットアップ」ウィザードが開始します。
5. DB2 ランチパッドがオープンしたら、「製品のインストール (Install Products)」を選択してください。
6. インストールしたいクライアントを選択します。
7. DB2 セットアップ・ウィザードのプロンプトに従って進んでください。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。

インストールが完了すると、DB2 クライアントは *DB2DIR* ディレクトリーにインストールされます。*DB2DIR* は以下のとおりです。

AIX /usr/opt/db2_08_01

Linux およびその他の UNIX オペレーティング・システム

/opt/IBM/db2/V8.1

DB2 クライアントをインストールした後は、リモート DB2 サーバーにアクセスするようにクライアントを構成してください。

ご使用の DB2 製品が、ローカル・コンピューターまたはネットワーク内の別のコンピューター上にある DB2 資料にアクセスするようには、DB2 Information Center をインストールしなければなりません。DB2 Information Center には、DB2 Universal Database および DB2 関連製品に関する資料が含まれています。DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX) を参照してください。

関連概念:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによるインストールの基礎』
- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 154 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)』
- 48 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (Solaris オペレーティング環境)』
- 45 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (HP-UX)』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『構成アシスタント (CA) を使用した、クライアントからサーバーへの接続の構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『サーバー・データベースへのリモート・アクセスの構成』
- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 の応答ファイル・インストールの概要 (UNIX)』
- 47 ページの『カーネル・パラメーターの変更 (Linux)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2setup - DB2 のインストール・コマンド』

第 17 章 DB2 Connect を使用するための DB2 クライアントの構成

DB2 Connect Personal Edition のインストールでは、DB2 Run-Time Client のインストールを選択することもできます。これらのトピックでは、DB2 Run-Time Client から DB2 UDB サーバーへの接続を構成する方法が説明されています。DB2 Run-Time Client は、Windows および UNIX 上のデータベースのほか、DB2 Connect を使用しているホストまたは iSeries データベースにも接続できます。DB2 Connect Personal Edition を使用しているホストまたは iSeries データベースは、DB2 Run-Time Client と同じワークステーションにインストールされている場合は直接接続できます。それ以外の場合は、DB2 Connect Enterprise Edition サーバー経由で接続できます。

このタスクでは、構成アシスタント (CA) を使用して、DB2 クライアントからリモート・データベース・ホストまたは iSeries データベース・サーバーに接続する方法について説明します。構成アシスタントとは、データベース接続およびその他のデータベース設定の構成に使用できる DB2 GUI ツールです。

旧リリースの DB2 では構成アシスタント (CA) は、クライアント構成アシスタント (CCA) という名称でした。

前提条件:

- 構成アシスタントは、DB2 Connect ワークステーションにインストールしなければなりません。DB2 バージョン 8 では構成アシスタントは、DB2 Administration Client および DB2 Application Development Client の一部として利用することができます。
- インバウンド・クライアント要求を受け入れるようにリモート・サーバーを構成する必要があります。デフォルトでは、サーバー・インストール・プログラムは、インバウンド・クライアント接続用のほとんどのプロトコルをサーバー上で検出および構成します。

手順:

CA を使ってデータベースへの接続を構成するには、以下の方法のうちのいずれかを選択します。

- ディスカバリーを使用したデータベースへの接続
- プロファイルを使用したデータベースへの接続
- CA を使用したデータベースへの手動接続

構成タスク

ディスカバリーを使用したデータベース接続の構成

構成アシスタントのディスカバリー機能を使うと、ネットワークでデータベースを検索できます。

前提条件:

ディスカバリーを使用してデータベースへの接続を構成する前に、以下の操作が必要です。

- DB2 ユーザー ID が有効であることを確認する。
- DB2 Server または DB2 Connect server 製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、ユーザー ID に、インスタンスに対する SYSADM または SYSCTRL 権限が付与されていることを確認する。

制約事項:

CA のディスカバリー機能が DB2 システムについての情報を戻すためには、DB2 Administration Server (DAS) が実行されていて有効になっている必要があります。

手順:

ディスカバリーを使用してシステムにデータベースを追加するには、次の手順を実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. 構成アシスタントを開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA のメニュー・バーで、「**選択済み (Selected)**」の下の「**ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add a database using wizard)**」を選択します。
4. 「**ネットワークの検索 (Search the network)**」ラジオ・ボタンを使用して、「**次へ (Next)**」をクリックします。
5. 「**既知のシステム (Known Systems)**」の横のフォルダーをダブルクリックします。クライアントに認識されているすべてのシステムのリストが表示されます。
6. システムの横の **[+]** 符号をクリックして、インスタンスおよびそのデータベースのリストを表示します。追加したいデータベースを選択し、「**次へ (Next)**」ボタンをクリックします。
7. ローカル・データベース別名を「**データベース別名 (Database alias)**」フィールドに入力し、このデータベースについて記述するコメントを「**コメント (Comment)**」フィールドに入力します。
8. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
9. 「**完了 (Finish)**」をクリックします。これで、追加したデータベースを使用できます。「**クローズ (Close)**」をクリックして、CA を終了します。

関連タスク:

- 92 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 91 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 94 ページの『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

プロファイルを使用したデータベース接続の構成

サーバー・プロファイルには、システム上のサーバー・インスタンス、およびそれぞれのサーバー・インスタンスのデータベースについての情報が含まれています。クライアント・プロファイルには、別のクライアント・システムでカタログされたデータベース情報が記述されています。プロファイルを使用してデータベースに接続するには、以下のタスクのステップに従います。

前提条件:

CA でプロファイルを使用してデータベースに接続するには、事前に以下のタスクを実行します。

- DB2 ユーザー ID が有効であることを確認する。
- DB2 Server または DB2 Connect server 製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、ユーザー ID に、インスタンスに対する SYSADM または SYSCTRL 権限が付与されていることを確認する。

手順:

プロファイルを使用してデータベースに接続するには、以下のタスクを実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. 構成アシスタントを開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA のメニュー・バーで、「選択済み (Selected)」の下の「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add a database using wizard)」を選択します。
4. 「プロファイルを使用する (Use a profile)」ラジオ・ボタンを選択し、「次へ (Next)」をクリックします。
5. ボタンをクリックして、プロファイルを選択します。プロファイルから表示されたオブジェクト・ツリーからリモート・データベースを選択し、選択されたデータベースがゲートウェイ接続の場合には、データベースへの接続経路を選択します。「次へ (Next)」ボタンをクリックします。
6. ローカル・データベース別名を「データベース別名 (Database alias)」フィールドに入力し、このデータベースについて記述するコメントを「コメント (Comment)」フィールドに入力します。「次へ (Next)」をクリックします。
7. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
8. 「完了 (Finish)」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。「終了 (Exit)」メニュー・アクションをクリックすると、CA を終了できます。

関連タスク:

- 121 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』
- 123 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の構成

接続したいデータベースについての情報がある場合、手動ですべての構成情報を入力することができます。この方法は、コマンド行プロセッサを介してコマンドを入力するのと類似していますが、パラメーターがグラフィカルに提示されます。

前提条件:

CA を使用してデータベースへの接続を構成する前に、以下の操作が必要です。

- DB2 ユーザー ID が有効であることを確認する。
- DB2 Server または DB2 Connect server 製品がインストールされているシステムにデータベースを追加する場合は、ユーザー ID に、インスタンスに対する SYSADM または SYSCTRL 権限が付与されていることを確認する。

手順:

CA を使用して手動でシステムにデータベースを追加するには、次の手順を実行します。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. CA のメニュー・バーで、「選択済み (Selected)」の下の「ウィザードを使用してデータベースを追加 (Add a database using wizard)」を選択します。
4. 「データベースへの接続を手動で構成する (Manually configure a connection to a database)」ラジオ・ボタンを選択して、「次へ (Next)」をクリックします。
5. Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用している場合には、DB2 ディレクトリーを保持したい場所に対応するラジオ・ボタンを選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
6. 「プロトコル (Protocol)」リストから、使用したいプロトコルに対応するラジオ・ボタンを選択します。

ご使用のマシンに DB2 Connect がインストールされている場合で、TCP/IP または APPC を選択する場合、「データベースはホストまたは OS/400 システムに物理的に常駐 (The database physically resides on a host or OS/400 system)」を選択します。このチェック・ボックスを選択すると、ホストまたは OS/400 データベースに確立したい接続のタイプを選択するオプションが表示されます。

- DB2 Connect ゲートウェイ経由の接続を確立するには、「ゲートウェイ経由でサーバーに接続 (Connect to the server via the gateway)」ラジオ・ボタンを選択します。
- 直接接続を確立するには、「サーバーに直接接続 (Connect directly to the server)」ラジオ・ボタンを選択します。

「次へ (Next)」をクリックします。

7. 必要な通信プロトコル・パラメーターを入力し、「次へ (Next)」をクリックします。

8. 追加したいリモート・データベースのデータベース別名を「**データベース名 (Database name)**」フィールドに入力し、ローカル・データベース別名を「**データベース別名 (Database alias)**」フィールドに入力します。

ホストまたは OS/400 データベースを追加している場合、OS/390 または z/OS データベースのロケーション名、OS/400 データベースの RDB 名、または VSE か VM データベースの DBNAME を「**データベース名 (Database name)**」フィールドに入力します。任意で、このデータベースに関するコメントを「**コメント (Comment)**」フィールドを追加します。

「**次へ (Next)**」をクリックします。

9. ODBC を使用する計画がある場合には、このデータベースを ODBC データ・ソースとして登録します。この操作を実行するには、ODBC がインストールされていなければなりません。
10. 「**完了 (Finish)**」をクリックします。これで、このデータベースを使用できます。メニューから「**終了 (Exit)**」を選択して、CA を閉じます。

関連タスク:

- 89 ページの『ディスクバリーを使用したデータベース接続の構成』
- 91 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 94 ページの『構成アシスタントによるデータベース接続のテスト』

データベース接続のテスト

データベースの構成が終了した後は、データベース接続をテストします。

手順:

データベース接続をテストするには、以下の手順に従ってください。

1. **CA** を開始します。
2. 詳細表示でデータベースを強調表示させ、「**接続のテスト (Test Connection)**」メニュー・アクションを実行します。「接続のテスト (Test Connection)」ウィンドウが表示されます。
3. テストする接続のタイプを選択します (デフォルトは **CLI** です)。リモート・データベースの有効なユーザー ID およびパスワードを入力し、「**接続のテスト (Test Connection)**」をクリックします。接続が正常に確立された場合、接続が確立されたことを確認するメッセージが「**結果 (Results)**」ページに表示されません。

接続テストに失敗した場合には、ヘルプ・メッセージを受け取ります。誤って指定した設定を変更するには、詳細表示で目的のデータベースを選択し、「**データベースの変更 (Change Database)**」メニュー・アクションを選択します。

関連タスク:

- 89 ページの『ディスクバリーを使用したデータベース接続の構成』
- 92 ページの『構成アシスタント (CA) を使用したデータベース接続の手動による構成』
- 91 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』

第 18 章 クライアントおよびサーバー・プロファイルの使用

クライアント・プロファイル

クライアント・プロファイルは DB2® クライアントとサーバーの間のデータベース接続を構成するのに使用します。クライアント・プロファイルは、構成アシスタント (CA) のエクスポート機能を使用するか、 **db2cfexp** コマンドを使用して、クライアントで生成されます。クライアント・プロファイルに含まれている情報は、エクスポート処理中に判別されます。

選択した設定によって、以下のような情報が組み込まれます。

- データベース接続情報 (CLI または ODBC 設定を含む)
- クライアント設定 (データベース・マネージャーの構成パラメーターおよび DB2 レジストリー変数を含む)
- CLI または ODBC 共通パラメーター
- ローカル NetBIOS 通信サブシステムの構成データ

判別されたクライアント・プロファイル内の情報は、CA のインポート機能を使用するか **db2cfimp** コマンドを使ってプロファイルをインポートすることにより、他のクライアントを構成するのに使用できます。クライアントは、既存のプロファイル中にある構成情報の全体またはサブセットをインポートできます。

関連タスク:

- 124 ページの『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 121 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』
- 123 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfimp - 接続構成インポート・ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfexp - 接続構成エクスポート・ツール・コマンド』

構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート

クライアント・プロファイルは、DB2 クライアントとサーバーの間の接続を作成するときに使用します。クライアント・プロファイルに含まれている情報は、エクスポート処理中に判別されます。クライアント・プロファイル内の情報は判別されると、インポート処理を使用して、他のクライアントの構成に使用できます。

手順:

構成アシスタント (CA) のエクスポート機能を使用してクライアント・プロファイルを作成するには、次の手順を行います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. 「構成 (**Configure**)」メニューから、「プロファイルのエクスポート (**Export Profile**)」を選択します。
4. 以下のオプションから 1 つを選択してください。

すべて (**All**)

システムでカタログされたすべてのデータベース、およびこのクライアントのすべての構成情報を含むプロファイルを作成したい場合に選択します。クライアント・プロファイルの名前を入力して、「保管 (**Save**)」をクリックします。

データベース接続 (**Database Connections**)

システムでカタログされたすべてのデータベースを含み、このクライアントのすべての構成情報を含まないプロファイルを作成したい場合に選択します。クライアント・プロファイルの名前を入力して、「保管 (**Save**)」をクリックします。

カスタマイズ (**Customize**)

システムでカタログされたデータベースのサブセット、またはこのクライアントの構成情報のサブセットを選択したい場合に選択します。プロファイルのエクスポートのカスタマイズ (**Customize Export Profile**) ウィンドウで、次のようにします。

- a. クライアント・プロファイルの名前を入力します。
- b. 「データベース接続 (**Database connections**)」チェック・ボックスを選択して、エクスポートするクライアント・プロファイルにデータベース接続を含めます。
- c. 「使用可能なデータベース別名 (**Available database aliases**)」ボックスからエクスポートするデータベースを選択して、「>」をクリックします。すると、それらのデータベースが「選択されたデータベース別名 (**Selected database aliases**)」ボックスに追加されます。使用可能なすべてのデータベースを「選択されたデータベース別名 (**Selected database aliases**)」ボックスに追加するには、「>>」をクリックします。
- d. ターゲット・クライアント用に設定したいオプションに対応するチェック・ボックスを選択します。
- e. 「エクスポート (**Export**)」をクリックします。これで作業は完了です。
- f. 「結果 (**Results**)」タブに表示される結果を確認します。

このタスクを完了した後は、作成したクライアント・プロファイルを使用して、インポート機能によって他のクライアントを構成できます。

関連概念:

- 121 ページの『クライアント・プロファイル』

関連タスク:

- 91 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 124 ページの『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 123 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成』

構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルのインポートおよび構成

クライアント・プロファイルは、DB2 クライアントとサーバーの間の接続を作成するときに使用します。クライアント・プロファイルに含まれている情報は、エクスポート処理中に判別されます。クライアント・プロファイル内の情報は判別されると、インポート処理を使用することにより、他のクライアントの構成に使用できません。

「データベースの追加 (Add Database)」ウィザードではなく、構成アシスタントのプロファイルのインポート機能を使用すると、複数のデータベースの接続情報をインポートできます。「データベースの追加 (Add Database)」ウィザードでは、一度に 1 つのデータベースしか追加できません。

手順:

構成アシスタント (CA) を使用してクライアント・プロファイルを構成するには、次の手順を行います。

1. 有効な DB2 ユーザー ID を使用してシステムにログオンします。
2. CA を開始します。CA は、「スタート」メニューから (Windows の場合)、または **db2ca** コマンドを使用することによって (Windows および UNIX システムの場合) 開始できます。
3. 「構成 (Configure)」メニューから、「プロファイルのインポート (Import Profile)」を選択します。
4. 以下のインポート・オプションから 1 つを選択してください。クライアント・プロファイル中の情報すべてまたはサブセットのインポートを選択できます。

すべて (All)

クライアント・プロファイル内のすべてをインポートするには、このオプションを選択します。インポートしたいクライアント・プロファイルを開きます。インポートの結果を示す DB2 メッセージが表示されません。

カスタマイズ (Customize)

クライアント・プロファイルで定義される特定のデータベースまたは設定をインポートするには、このオプションを選択します。**プロファイルのインポートのカスタマイズ (Customize Import Profile)** ウィンドウで、次のようにします。

- a. インポートしたいクライアント・プロファイルを選択して、「ロード (Load)」をクリックします。

- b. 「使用可能なデータベース別名 (Available database aliases)」ボックスからインポートするデータベースを選択して、「>」をクリックします。すると、それらのデータベースが「選択されたデータベース別名 (Selected database aliases)」ボックスに追加されます。使用可能なすべてのデータベースを「選択されたデータベース別名 (Selected database aliases)」ボックスに追加するには、「>>」をクリックします。
- c. カスタマイズしたいオプションに対応するチェック・ボックスを選択します。
- d. 「インポート (Import)」をクリックします。これで作業は完了です。
- e. 「結果 (Results)」タブに表示される結果を確認します。

関連概念:

- 121 ページの『クライアント・プロファイル』

関連タスク:

- 91 ページの『プロファイルを使用したデータベース接続の構成』
- 124 ページの『プロファイルのエクスポートとインポート』
- 121 ページの『構成アシスタントを使用したクライアント・プロファイルの作成およびエクスポート』

プロファイルのエクスポートとインポート

手順:

応答ファイル生成プログラムによって作成された応答ファイルを使って DB2 製品をインストールする際に、構成プロファイルを使わなかった場合には、**db2cfexp** コマンドを入力することによって、構成プロファイルを作成することができます。後で、**db2cfimp** コマンドを使用することにより、構成プロファイルをインポートできます。

また、CA を使用することによって、構成プロファイルをエクスポートしたりインポートしたりすることもできます。

関連概念:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイル・ジェネレーターについて (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfimp - 接続構成インポート・ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2cfexp - 接続構成エクスポート・ツール・コマンド』
- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

第 7 部 DB2 Connect の使用

第 19 章 各自のアプリケーションの実行

DB2 Application Development Client をインストールすると、DB2[®] アプリケーションを作成および実行することができます。また、DB2 Run-Time Client および DB2 Administration Client 上で DB2 アプリケーションを実行することもできます。

以下のような各種アプリケーションから DB2 データベースにアクセスすることができます。

- 組み込み SQL、API、ストアド・プロシージャ、ユーザー定義の機能、または DB2 CLI の呼び出しを含む DB2 Application Development Client を使用して開発されたアプリケーション。
- Lotus[®] Approach などの ODBC アプリケーション。
- JDBC アプリケーションおよびアプレット。
- HTML および SQL を含む Net.Data[®] マクロ。

Windows[®] オペレーティング・システムでは、以下からも DB2 データベースにアクセスすることができます。

- Microsoft[®] Visual Basic および Microsoft Visual C++ で実装された ActiveX データ・オブジェクト (ADO)。
- Microsoft Visual Basic で実装されたリモート・データ・オブジェクト (RDO)。
- OLE 自動化ルーチン (UDF およびストアド・プロシージャ)。
- OLE データベース (OLE DB) 表関数。

DB2 クライアントのアプリケーションは、物理的な位置を知らなくてもリモート・データベースにアクセスできます。DB2 クライアントは、データベースのロケーションを判別し、データベース・サーバーへの要求の伝送を管理し、結果を戻します。

データベース・クライアント・アプリケーションを実行する方法は次のとおりです。

1. サーバーが構成され、実行されていることを確認します。
2. DB2 UDB サーバーで、アプリケーション・プログラムが接続されているデータベース・サーバーでデータベース・マネージャーが開始されていることを確認します。開始されていない場合、アプリケーションを開始する前に、サーバーに **db2start** コマンドを出します。
3. アプリケーションが使用するデータベースに接続できることを確認します。
4. データベースにユーティリティとアプリケーションをバインドします。
5. アプリケーション・プログラムを実行します。

関連概念:

- 「アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング」の『DB2 がサポートしているプログラミング・インターフェース』

関連タスク:

- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『CLI 環境のセットアップ』
- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『UNIX ODBC 環境のセットアップ』
- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『Windows CLI 環境のセットアップ』

関連資料:

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Application Development Client』

第 20 章 DB2 Connect のバインディング・データベース・ユーティリティー

データベース・ユーティリティー (インポート、エクスポート、REORG、コマンド行プロセッサ) および DB2 CLI バインド・ファイルをデータベースで使用するためには、各データベースに対してあらかじめバインドしておく必要があります。ネットワーク環境で、別々のオペレーティング・システムで稼働している複数のクライアントや、別々のバージョンまたはサービス・レベルにある複数のクライアントを使用する場合、オペレーティング・システムと DB2 バージョンの各組み合わせごとにユーティリティーを 1 回ずつバインドしなければなりません。

ユーティリティーのバインドにより、パッケージ が作成されます。これは単一のソース・ファイルから特定の SQL ステートメントを処理するのに必要な情報がすべて入っているオブジェクトです。

バインド・ファイルは、インストール・ディレクトリー (Windows では通常、sqllib です) の bnd ディレクトリーの下に、別の .lst ファイルと一緒にグループ化されています。各ファイルは、サーバーに固有のものであります。

手順:

ホストまたは iSeries データベースへのバインド

ユーティリティーおよびアプリケーションをホストまたは iSeries データベース・サーバーにバインドするには、ホストまたは iSeries サーバーに接続してから、次のような例をテンプレートとして使用します。

```
connect to dbalias user userid using password
bind path/bnd/@ddcsmvs.lst blocking all sqlerror continue
messages mvs.msg grant public
connect reset
```

path は DB2PATH レジストリー値に対応します。

DB2 Universal Database へのバインド

データベースへのデータベース・ユーティリティーのバインド方法は、ワークステーションのオペレーティング・システムによって異なります。

- 構成アシスタントを使って以下を行います。
 1. 構成アシスタント (CA) を開始します。
 2. ユーティリティーをバインドする先のデータベースを選びます。
 3. 右クリックして、「バインド (Bind)」を選択します。
 4. バインドするユーティリティーまたはファイルを選択します。
 5. 必要な BIND オプションを追加します。
 6. データベースに接続するためのユーザー ID とパスワードを入力します。そのユーザー ID には、データベースに対して新パッケージをバインドするための権限がなければなりません。「バインド (Bind)」をクリックします。
- コマンド行プロセッサを使って以下を行います。

1. x:¥sqllib¥bnd と入力して、 bnd ディレクトリーに移動します。ただし x: は、DB2 をインストールしているドライブです。
2. データベースに接続するには、コマンド・センターまたはコマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力します。

```
connect to database_alias
```

ただし、database_alias は、接続先のデータベースの別名です。

3. コマンド・センターまたはコマンド行プロセッサに次のようなコマンドを入力します。

```
"bind @db2ubind.lst messages bind.msg grant public"  
"bind @db2cli.lst messages clibind.msg grant public"
```

この例では、 bind.msg および clibind.msg は出力メッセージ・ファイルであり、 EXECUTE および BINDADD 特権が public に付与されます。

4. 次のようなコマンドを入力して、データベースへの接続をリセットします。

```
connect reset
```

注:

1. db2ubind.lst ファイルには、データベース・ユーティリティー用のパッケージを作成するのに必要なバインド (.bnd) ファイルのリストが入っています。 db2cli.lst ファイルには、DB2 CLI および DB2 ODBC ドライバー用のパッケージを作成するのに必要なバインド (.bnd) ファイルのリストが入っています。
2. バインドは、完了するまでに数分かかることがあります。
3. BINDADD 権限をもっている場合は、DB2 CLI または ODBC ドライバーを最初に使用するとき、DB2 CLI パッケージが自動的にバインドされます。使用しているアプリケーションで、データベースをバインドする必要が生じた場合、構成アシスタントのバインド機能を使うか、またはコマンド行プロセッサを使って、バインド・アクションを実行することができます。

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『BIND コマンド』
- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第1巻」の『DB2 CLI のバインド・ファイルおよびパッケージ名』

第 8 部 参照

第 21 章 DB2 製品 CD-ROM のマウント

CD-ROM のマウント (AIX)

前提条件:

この作業には、root 権限が必要です。

手順:

システム・マネージメント・インターフェース・ツール (SMIT) を使用して AIX 上に CD-ROM をマウントするには、以下のステップを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. CD-ROM をドライブに挿入します。
3. `mkdir -p /cdrom` コマンドを入力することによって CD-ROM マウント・ポイントを作成します。ここで、`cdrom` は、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーを表しています。
4. **smit storage** コマンドを入力することによって、SMIT を使用している CD-ROM ファイル・システムを割り当てます。
5. SMIT を開始した後、「ファイル・システム (File Systems)」→「ファイル・システムの追加/変更/表示/削除 (Add/Change/Show/Delete File Systems)」→「CDROM ファイル・システム (CDROM File Systems)」→「CDROM ファイル・システムの追加 (Add CDROM File System)」を選択します。
6. 「ファイル・システムの追加 (Add a File System)」ウィンドウの場合:
 - 「**DEVICE 名 (DEVICE Name)**」フィールド内に CD-ROM ファイル・システム用の装置名を入力します。CD-ROM ファイル・システムの装置名はユニーク名でなければなりません。重複した装置名がある場合、前に定義されている CD-ROM ファイル・システムを削除するか、ディレクトリーに別の名前を使う必要があります。本書の例では、装置名として `/dev/cd0` を使用します。
 - 「**MOUNT POINT**」ウィンドウ内に CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーを入力します。本書の例では、マウント・ポイント・ディレクトリーは、`/cdrom` です。
 - 「**システムの再始動時に自動的にマウント (Mount AUTOMATICALLY at system restart)**」フィールドで、「はい (yes)」を選択して、ファイル・システムを自動的にマウントできるようにします。
 - 「**OK**」をクリックしてウィンドウをクローズし、「**取り消し (Cancel)**」を 3 回クリックして SMIT を終了します。
7. 次に、**smit mountfs** コマンドを入力して、CD-ROM ファイル・システムをマウントします。
8. 「ファイル・システムのマウント (Mount a File System)」ウィンドウの場合:

- 「**FILE SYSTEM 名 (FILE SYSTEM name)**」 フィールド内に CD-ROM ファイル・システム用の装置名を入力します。本書の例では、装置名は /dev/cd0 です。
- CD-ROM マウント・ポイントを「**マウントするディレクトリー (Directory over which to mount)**」フィールドに入力します。本書の例では、マウント・ポイントは /cdrom です。
- cdrfs を「**ファイル・システムのタイプ (Type of Filesystem)**」フィールドに入力します。マウントできるその他の種類のファイル・システムを表示するには、「**リスト (List)**」をクリックします。
- 「**読み取り専用システムとしてマウント (Mount as READ-ONLY system)**」フィールドで、「はい (yes)」を選択します。
- 残りのデフォルトを受け入れ、「OK」をクリックしてウィンドウをクローズします。

CD-ROM ファイル・システムがマウントされます。CD-ROM の内容を表示するには、ディスクをドライブに挿入し、**cd /cdrom** コマンドを入力してください。ここで、**cdrom** は、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーです。

CD-ROM のマウント (HP-UX)

以下のステップにより、DB2 for HP-UX 製品 CD-ROM が正常にマウントできるようになります。

前提条件:

この作業には、root 権限が必要です。

手順:

DB2 UDB for HP-UX 製品 CD-ROM をマウントするには、

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. 必要であれば、CD-ROM ドライブのマウント・ポイントとして、新規ディレクトリーを定義します。 **mkdir /cdrom** コマンドを使用して、/cdrom をマウント・ポイントとして定義します。
3. 必要であれば、**ioscan -fnC disk** コマンドを使用して、ドライブ装置ファイルを識別します。このコマンドは、認識される CD-ROM ドライブおよびそれらに関連した装置ファイルのすべてをリストします。ファイル名は /dev/dsk/c1t2d0 のようなものになります。
4. CD ドライブをマウント・ポイント・ディレクトリーにマウントします。

```
mount -F cdrfs -o rr /dev/dsk/c1t2d0 /cdrom
```
5. **ls /cdrom** コマンドを使用して、ファイルのリスト表示を入手し、マウントを確認します。
6. ログアウトします。

CD-ROM ファイル・システムがマウントされます。CD-ROM の内容を表示するには、CD をドライブに挿入し、**cd /cdrom** コマンドを入力してください。ここで、**cdrom** は、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーです。

関連資料:

- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 製品ライセンス・ファイル』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 サーバーのインストール要件 (HP-UX)』

CD-ROM のマウント (Linux)

前提条件:

この作業には、root 権限が必要です。

手順:

Linux に CD-ROM をマウントするには、以下に示すステップを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. CD-ROM をドライブに挿入し、次のコマンドを入力します。

```
mount -t iso9660 -o ro /dev/cdrom /cdrom
```

ここで、`/cdrom` は、CD-ROM のマウント・ポイントを表しています。

3. ログアウトします。

CD-ROM ファイル・システムがマウントされます。CD-ROM の内容を表示するには、ディスクをドライブに挿入し、**cd /cdrom** コマンドを入力してください。ここで、**cdrom** は、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーです。

関連概念:

- 「インストールおよび構成 補足」の『複数の DB2 レベルのインストール』

関連資料:

- 「インストールおよび構成 補足」の『DB2 製品ライセンス・ファイル』

CD-ROM のマウント (Solaris オペレーティング環境)

前提条件:

NFS を使用してリモート・システムから CD-ROM ドライブをマウントする場合は、リモート・コンピューター上の CD-ROM ファイル・システムをルート・アクセスによってエクスポートする必要があります。ローカル・コンピューターにそのファイル・システムをマウントする場合も、やはりルート・アクセスを使用しなければなりません。

手順:

Solaris オペレーティング環境に CD-ROM をマウントするには、以下に示すステップを実行します。

1. root 権限を持つユーザーとしてログインします。
2. CD-ROM をドライブに挿入します。

3. ボリューム・マネージャー (vold) が実行されているシステムの場合、CD-ROM は、CD にラベルがある場合には `/cdrom/cd_label` として、ラベルがない場合には `/cdrom/unnamed_cdrom` として、自動的にマウントされます。

ボリューム・マネージャーをシステムで実行しない場合は、次のようなステップを実行して CD-ROM をマウントしてください。

- a. 以下のコマンドを入力して、装置名を判別します。

```
ls -al /dev/sr* |awk '{print "/" $11}'
```

このコマンドは、CD-ROM 装置名を戻します。この例では、コマンドはストリング `/dev/dsk/c0t6d0s2` を戻します。

- b. 以下のコマンドを入力して、CD-ROM をマウントします。

```
mkdir -p /cdrom/unnamed_cdrom  
mount -F hsfs -o ro /dev/dsk/c0t6d0s2 /cdrom/unnamed_cdrom
```

`/dev/dsk/c0t6d0s2` は、前のステップで戻された装置名を表し、`/cdrom/unnamed_cdrom` は、CD-ROM マウント・ディレクトリーを表します。

注: NFS を使用してリモート・システムから CD-ROM ドライブをマウントする場合は、リモート・システム上の CD-ROM ファイル・システムをルート・アクセスによってエクスポートする必要があります。ローカル・マシンに CD-ROM ファイル・システムをマウントする場合も、やはりルート・アクセスを使用しなければなりません。

4. ログアウトします。

CD-ROM ファイル・システムがマウントされます。CD-ROM の内容を表示するには、ディスクをドライブに挿入し、**cd /cdrom** コマンドを入力してください。ここで、**cdrom** は、CD-ROM マウント・ポイント・ディレクトリーです。

第 22 章 DB2 Connect のアンインストール

DB2 UDB のアンインストール (Windows)

このタスクは、DB2 UDB バージョン 8 をご使用の Windows オペレーティング・システムから完全に除去するためのステップを提供します。既存の DB2 インスタンスおよびデータベースがもはや必要でなくなった場合にのみ、このタスクを実行してください。

手順:

DB2 UDB バージョン 8 を Windows から除去するには、以下のステップを実行します。

1. データベースをすべてドロップします。データベースのドロップは、コントロール・センターまたは **drop database** コマンドを使用して行えます。
2. すべての DB2 プロセスおよびサービスを停止します。これは Windows 保守パネルを介して、または **db2stop** コマンドを発行することによって行えます。DB2 を除去する前に DB2 サービスおよびプロセスを停止しないと、メモリーに DB2 DLL が保持されているプロセスおよびサービスのリストを含む警告を受け取ります。
3. Windows コントロール パネルを介して利用できる「プログラムの追加と削除」ウィンドウを使用して、DB2 製品を除去します。ご使用の Windows オペレーティング・システムからソフトウェア製品の除去についての詳細は、ご使用のオペレーティング・システムのヘルプを参照してください。
4. 無音で DB2 を除去するには、コマンド行に以下のコマンドを入力してください。

```
msiexec /x <product_code> /qn
```

<product code> は、除去する製品のコードです。以下は、DB2 製品コードのリストです。

- ESE {D8F53726-C7AD-11D4-9155-00203586D551}
- WSE {7A28F948-4945-4BD1-ACC2-ADC081C24830}
- PE {C0AA883A-72AE-495F-9601-49F2EB154E93}
- WM {84AF5B86-19F9-4396-8D99-11CD91E81724}
- DLM {1D16CA65-F7D9-47E5-BB26-C623A44832A3}
- RCON {273F8AB8-C84B-4EE6-85E7-D7C5270A6D08}
- CONEE {9C8DFB63-66DE-4299-AC6B-37D799A728A2}
- CONPE {F1912044-6E08-431E-9B6D-90ED10C0B739}
- ADMCL {ABD23811-AA8F-416B-9EF6-E54D62F21A49}
- ADCL {68A40485-7F7F-4A91-9AB6-D67836E15CF2}
- RTCL {63F6DCD6-0D5C-4A07-B27C-3AE3E809D6E0}
- GSE {F6846BF9-F4B5-4BB2-946D-3926795D5749}

- LSDC {DD30AEB3-4323-40D7-AB39-735A0523DEF3}
- WMC {5FEA5040-22E2-4760-A88C-73DE82BE4B6E}
- DOC {73D99978-A255-4150-B4FD-194ECF4B3D7C}
- QP {7A8BE511-8DF3-4F22-B61A-AF0B8755E354}
- CUBE {C8FEDF8F-84E8-442F-A084-0A0F6A772B52}
- EXP {58169F10-CA30-4F40-8C6D-C6DA8CE47E16}

関連タスク:

- 138 ページの『DB2 UDB のアンインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『DROP DATABASE コマンド』

DB2 UDB のアンインストール (UNIX)

このタスクは、DB2 バージョン 8 をご使用の UNIX オペレーティング・システムから除去するためのステップを提供します。このタスクは、DB2 の新規バージョンをインストールする場合には不要です。UNIX 上の DB2 の各バージョンは異なるインストール・パスを持つので、同じコンピューター上で共存できます。

手順:

DB2 UDB を UNIX から除去するには、以下のステップを実行します。

1. オプション：データベースをすべてドロップします。データベースのドロップは、コントロール・センターまたは **drop database** コマンドを使用して行えます。
2. DB2 Administration Server の停止 (Stop the DB2 Administration Server) を行います。
3. Administration Server の除去 (Remove the Administration Server) を行います。
4. DB2 インスタンスの停止 (Stop DB2 instances) を行います。
5. DB2 インスタンスの除去 (Remove DB2 instances) を行います。
6. DB2 製品の除去 (Remove DB2 products) を行います。

関連概念:

- 「管理ガイド: インプリメンテーション」の『DB2 Administration Server』

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 Administration Server (DAS) の停止』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 Administration Server (DAS) の削除』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 インスタンスの停止』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 インスタンスの削除』
- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『db2_deinstall コマンドを使用した DB2 製品の削除 (UNIX)』

- 137 ページの『DB2 UDB のアンインストール (Windows)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『DROP DATABASE コマンド』

第 9 部 付録

付録 A. 言語サポート

DB2 インターフェース言語の変更 (Windows)

DB2 のインターフェース言語は、メッセージ、ヘルプ、およびグラフィック・ツール・インターフェースで表示される言語です。DB2 のインストール時に、1 つ以上の言語サポートをインストールするオプションが示されます。インストール後、DB2 のインターフェース言語を、他のインストール済みインターフェース言語の 1 つに変更したい場合には、このタスクで概説されたステップを使用してください。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

前提条件:

使用する DB2 インターフェース言語を、ご使用のシステムにインストールする必要があります。DB2 のインストール時に DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、DB2 インターフェース言語を選択しインストールします。DB2 のインターフェース言語を、まだインストールされていない、サポートされるインターフェース言語に変更する場合には、デフォルトではまず最初に DB2 インターフェース言語をオペレーティング・システムの言語に設定します。それがサポートされない場合には、英語に設定します。

手順:

Windows 上で DB2 のインターフェース言語を変更するには、ご使用の Windows オペレーティング・システムのデフォルトの言語設定を変更する必要があります。

次のようにして、Windows 上で DB2 インターフェース言語を変更します。

1. ご使用の Windows オペレーティング・システムのコントロール パネルで、「地域と言語のオプション」を選択します。
2. 「地域オプション」ダイアログ・ウィンドウで、システムのデフォルトの言語設定を、DB2 でインターフェースさせる言語に変更します。

ご使用のオペレーティング・システムのヘルプを参照して、デフォルトのシステム言語の変更についての追加情報を参照してください。

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリリー・コードおよびコード・ページ』
- 144 ページの『サポートされる DB2 インターフェース言語』

DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX)

DB2 のインターフェース言語は、メッセージ、ヘルプ、およびグラフィック・ツール・インターフェースで表示される言語です。DB2 のインストール時に、1 つ以上の言語サポートをインストールするオプションが示されます。インストール後、DB2 のインターフェース言語を、他のインストール済みインターフェース言語の 1 つに変更したい場合には、このタスクで概説されたステップを使用してください。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

前提条件:

使用する DB2 インターフェース言語のサポートを、ご使用のシステムにインストールする必要があります。DB2 インターフェース言語サポートは、DB2 のインストール時に DB2 セットアップ・ウィザードを使用して選択し、インストールします。DB2 のインターフェース言語を、まだインストールされていない、サポートされるインターフェース言語に変更する場合には、デフォルトではまず最初に DB2 インターフェース言語をオペレーティング・システムの言語に設定します。それがサポートされない場合には、英語に設定します。

手順:

UNIX システムで DB2 インターフェース言語を変更するには、LANG 環境変数を希望のロケールに設定します。

たとえば、DB2 for AIX でフランス語を使用して DB2 にインターフェースするには、フランス語言語サポートをインストールして、LANG 環境変数をフランス語ロケール (たとえば fr_FR) に設定する必要があります。

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリー・コードおよびコード・ページ』
- 144 ページの『サポートされる DB2 インターフェース言語』

サポートされる DB2 インターフェース言語

DB2 インターフェースの DB2 言語サポートは、サーバー・グループの言語とクライアント・グループの言語に分類されます。サーバー・グループの言語は、ほとんどのメッセージ、ヘルプ、および DB2 グラフィカル・インターフェース・エレメントの翻訳に使用されます。クライアント・グループ言語は、メッセージのほとんどと特定のヘルプ・ドキュメンテーションを含む、DB2 Run-Time Client コンポーネントを翻訳します。

サーバー・グループの言語には、ブラジル・ポルトガル語、チェコ語、デンマーク語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、日本語、韓国語、ノル

ウェー語、ポーランド語、ロシア語、中国語 (簡体字)、スペイン語、スウェーデン語、および中国語 (繁体字) が含まれます。

クライアント・グループの言語には、アラビア語、ブルガリア語、クロアチア語、オランダ語、ギリシャ語、ヘブライ語、ハンガリー語、ポルトガル語、ルーマニア語、スロバキア語、スロベニア語、およびトルコ語が含まれます。

DB2 によってサポートされる言語と、DB2 インターフェースによってサポートされる言語とを混同しないでください。DB2 によってサポートされる言語とは、データの言語のことで、DB2 インターフェースによってサポートされる言語のスーパーセットです。

関連タスク:

- 「DB2 Universal Database サーバー機能 概説およびインストール」の『DB2 移行前の診断エラー・レベルの変更』
- 143 ページの『DB2 インターフェース言語の変更 (Windows)』
- 144 ページの『DB2 インターフェース言語の変更 (UNIX)』

関連資料:

- 「管理ガイド: プランニング」の『各国語バージョン』
- 「管理ガイド: プランニング」の『サポートされているテリトリリー・コードおよびコード・ページ』
- 「管理ガイド: プランニング」の『コード・ページ 923 および 924 の変換表』
- 「管理ガイド: プランニング」の『ユーロを使用可能なコード・ページ遷移表ファイル』

別の言語で DB2 セットアップ・ウィザードを実行する場合の言語 ID

DB2 セットアップ・ウィザードを、ご使用のコンピューターのデフォルトの言語以外の言語で実行する場合には、言語 ID を指定して、手動で DB2 セットアップ・ウィザードを開始することができます。指定する言語は、インストールを実行するプラットフォームで選択可能なものでなければなりません。

表 5. 言語 ID

言語	言語 ID
アラビア語	ar
ブラジル・ポルトガル語	br
ブルガリア語	bg
中国語 (簡体字)	cn
中国語 (繁体字)	tw
クロアチア語	hr
チェコ語	cz
デンマーク語	dk
オランダ語	nl
英語	en
フィンランド語	fi

表 5. 言語 ID (続き)

言語	言語 ID
フランス語	fr
ドイツ語	de
ギリシャ語	el
ヘブライ語	iw
ハンガリー語	hu
イタリア語	it
日本語	jp
韓国語	kr
ノルウェー語	no
ポーランド語	pl
ポルトガル語	pt
ルーマニア語	ro
ロシア語	ru
スロバキア語	sk
スロベニア語	sl
スペイン語	es
スウェーデン語	se
トルコ語	tr

文字データの変換

文字データがマシン間で転送されるときは、受信する側のマシンが使用できる形に変換されなければなりません。

たとえば、データが DB2 Connect サーバーとホストまたは iSeries™ データベース・サーバーとの間で転送される場合、データは通常、サーバー・コード・ページからホスト CCSID へ (およびその逆に) 変換されます。2 つのマシンが異なるコード・ページまたは CCSID を使用している場合、コード・ポイントは 1 つのコード・ページまたは CCSID から別のものへとマップします。この変換は、常に受信側で実行されます。

データベースへ送られる文字データは、SQL ステートメントと入力データから成ります。データベースから送られる文字データは、出力データから成ります。ビット・データとして解釈される出力データは変換されません。たとえば、FOR BIT DATA 文節で宣言された列のデータがそうです。その他の場合は、すべての入力および出力の文字データは、2 つのマシンが異なるコード・ページまたは CCSID を持つときは変換されます。

たとえば、DB2 Connect を使用して DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 データにアクセスすると、次のことが起こります。

1. DB2® Connect は、OS/390® または z/OS に SQL ステートメントと入力データを送信します。

2. DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 は、それらを EBCDIC CCSID に変換して処理します。
3. DB2 Universal Database for z/OS and OS/390 は、結果を DB2 Connect サーバーに戻します。
4. DB2 Connect™ は、結果を ASCII または ISO コード・ページに変換してそれをユーザーに戻します。

以下の表は、コード・ページ (DB2 Connect サーバー側) と CCSID (ホストまたは iSeries 側) との間でサポートされている変換を示します。

表 6. サーバー・コード・ページからホストまたは iSeries の CCSID への変換

ホスト CCSID	コード・ページ	テリトリー
037、 273、 277、 278、 280、 284、 285、 297、 500、 871、 1140 から 1149	437、 819、 850、 858、 860、 863、 1004、 1051、 1252、 1275	アルバニア、オーストラリア、オーストリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、アイスランド、アイルランド、イタリア、ラテンアメリカ、オランダ、ニュージーランド、ノルウェー、ポルトガル、南アフリカ、スペイン、スウェーデン、スイス、英国、米国
423、 875	737、 813、 869、 1253、 1280	ギリシャ
870	852、 912、 920 ⁴ 、 1250、 1282	クロアチア、チェコ共和国、ハンガリー、ポーランド、ルーマニア、セルビア/モンテネグロ (ローマ字)、スロバキア、スロベニア
1025	855、 866、 915、 1251、 1283	ブルガリア、FYR マケドニア、ロシア、セルビア/モンテネグロ (キリル文字)
1026	857、 920、 1254、 1281	トルコ
424	862、 916、 1255	イスラエル ³
420	864、 1046、 1089、 1256	アラブ諸国 ³
838	874	タイ
930、 939、 5026、 5035	932、 942、 943、 954、 5039	日本
937	938、 948、 950、 964	台湾
933、 1364	949、 970、 1363	韓国
935、 1388	1381、 1383、 1386	中華人民共和国
1112、 1122	921、 922	エストニア、ラトビア、リトアニア
1025	915、 1131、 1251、 1283	ベラルーシ
1123	1124、 1125、 1251	ウクライナ

注:

1. コード・ページ 1004 はコード・ページ 1252 としてサポートされます。

2. 一般に、データは、コード・ページから CCSID へ変換することができ、再度元へ戻してもなんら変化はありません。以下は、その規則に対する例外です。
 - 2 バイト文字セット (DBCS) コード・ページにおいて、ユーザー定義の文字を含むいくつかのデータは失われる可能性があります。
 - 混合バイトのコード・ページ内で定義された単一バイト・コード・ページと新規のいくつかの単一バイト・コード・ページの場合、存在していない文字はどちらもソースで、ターゲットは置換文字へマップされてから、データが元のコード・ページへ再変換される時に失われる可能性があります。
3. 双方向言語の場合は、特殊な "BiDi CCSIDS" が IBM® によっていくつか定義されており、DB2 Connect でサポートされています。

データベース・サーバーの双方向属性がクライアントの属性と異なっている場合は、これらの特殊な CCSIDS を使ってこの相違を解決できます。

これらの属性をホストまたは iSeries 接続用に設定する方法の詳細は、DB2 Connect のリリース情報を参照してください。

4. このコード・ページは VM システムではサポートされていません。

関連概念:

- 「管理ガイド: パフォーマンス」の『文字変換のガイドライン』

付録 B. DB2 Universal Database 技術情報

DB2 資料およびヘルプ

DB2 技術情報は、以下のツールおよび方法によって使用可能です。

- DB2 Information Center
 - トピック
 - DB2 ツールのヘルプ
 - サンプル・プログラム
 - チュートリアル
- ダウンロード可能な PDF ファイル、CD 上の PDF ファイル、および印刷されたブック
 - ガイド
 - 解説書
- コマンド行ヘルプ
 - コマンド・ヘルプ
 - メッセージ・ヘルプ
 - SQL ステートメント・ヘルプ
- インストール済みソース・コード
 - サンプル・プログラム

技術ノート、白書、および Redbooks といった追加の DB2 Universal Database 技術情報に、ibm.com からオンラインでアクセスできます。

www.ibm.com/software/data/pubs/ にある DB2 情報管理ソフトウェア・ライブラリー・サイトにアクセスしてください。

DB2 資料の更新

IBM は DB2 Information Center に対する資料 FixPak および他の資料更新を、定期的に使用可能にします。 <http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/> にある DB2 Information Center にアクセスすると、常に最新の情報が表示されます。 DB2 Information Center をローカルにインストールした場合には、表示前に手動で更新をインストールする必要があります。資料の更新によって、新規情報が使用可能になったときに、*DB2 Information Center CD* からインストールした情報を更新できます。

Information Center は、PDF やハードコピー・ブックよりも頻繁に更新されます。最新の DB2 技術情報を入手するには、資料の更新が使用可能になった時点でそれらをインストールするか、または www.ibm.com サイトにある DB2 Information Center を参照してください。

関連概念:

- 「コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」の『CLI サンプル・プログラム』

- 「アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」の『Java サンプル・プログラム』
- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 170 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 161 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 172 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 172 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 173 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 163 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 インフォメーション・センター

DB2[®] インフォメーション・センターを使用すると、DB2 Universal Database[™]、DB2 Connect[™]、DB2 Information Integrator および DB2 Query Patroller[™]などのDB2 ファミリー製品を最大限に活用するのに必要なすべての情報にアクセスできます。また、DB2 インフォメーション・センターは、DB2 の主な機能とコンポーネントに関する情報を提供します (レプリケーション、データウェアハウジング、および DB2 の種々の Extender など)。

Mozilla 1.0 以上または Microsoft[®] Internet Explorer 5.5 以上で表示する場合、DB2 インフォメーション・センターには以下の機能があります。以下のいくつかの機能では、JavaScript[™] のサポートを使用可能にする必要があります:

柔軟なインストール・オプション

以下の中から、ご使用の環境に最も適したオプションを使って DB2 資料を表示できます。

- 最新の資料を常に自動的に利用できるようにするには、IBM[®] の Web サイト (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) にある DB2 インフォメーション・センターからすべての資料に直接アクセスします。
- 更新処理を最小化し、イントラネット内のネットワーク・トラフィックだけに制限するには、イントラネット上の 1 つのサーバーに DB2 資料をインストールします。
- 柔軟性を改善し、ネットワーク接続への依存を軽減するには、個々のコンピューターに DB2 資料をインストールします。

検索 「検索」テキスト・フィールドに検索語を入力することにより、DB2 インフォメーション・センターのすべてのトピックを検索できます。複数の語句を引用符で囲めば、完全一致を検索できます。また、ワイルドカード演算子 (*、?) とブール演算子 (AND、NOT、OR) を使用して検索を絞り込むことができます。

タスク指向の目次

単一の目次の中から、DB2 資料のトピックを見付けることができます。目

次は、主に実行するタスクの種類に従って編成されていますが、そのほかに製品概要、特定のゴール (目的) の情報、参照情報、索引、および用語集も含まれます。

- 製品概要では、DB2 ファミリーで使用可能な製品間の関係、そうした各製品で提供される機能、および各製品の最新リリース情報について説明されています。
- インストール、管理および開発などのゴール・カテゴリには、タスクを迅速に完了し、そのための背景情報をよく理解できるようにするトピックが含まれています。
- 「参照」トピックでは、その対象に関する詳細な情報 (ステートメントとコマンドの構文、メッセージ・ヘルプ、構成パラメーターなど) が説明されています。

現在のトピックを目次に表示する

現在のトピックが目次のどの部分に該当するかを表示するには、目次フレーム内の「リフレッシュ/現在のトピックの表示 (Refresh/Show Current Topic)」ボタンをクリックするか、コンテンツ・フレーム内の「目次に表示 (Show in Table of Contents)」ボタンをクリックします。幾つかのファイルで関連トピックへの複数のリンクをたどった場合、または検索結果からトピックにアクセスした場合には、この機能が役立ちます。

索引 索引から、すべての資料にアクセスすることができます。索引では、用語が 50 音順に編成されています。

用語集 用語集を見れば、DB2 資料で使われているさまざまな用語の定義を調べることができます。用語集では、用語が 50 音順に編成されています。

組み込まれているローカライズ情報

DB2 インフォメーション・センターは、ブラウザで設定された言語でトピックを表示します。設定された言語のトピックが利用できない場合、DB2 インフォメーション・センターにはそのトピックの英語版が表示されます。

iSeries™ 技術情報については、IBM eServer™ iSeries Information Center (www.ibm.com/eserver/series/infocenter/) を参照してください。

関連概念:

- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 161 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 162 ページの『希望する言語で DB2 Information Center のトピックを表示する』
- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 154 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)』
- 157 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (Windows)』

DB2 Information Center のインストール・シナリオ

作業環境はさまざまに異なるために、DB2 情報へのアクセス方法については、さまざまな異なる要件が生じることが考えられます。DB2 Information Center は IBM Web サイトから、ユーザーの組織のネットワーク上のサーバーから、またはご使用のコンピューター上にインストールされたバージョンからアクセスできます。3つのケースのいずれの場合も、資料は DB2 Information Center に含まれています。これはブラウザで表示されるように設計された、トピック・ベース情報のウェブです。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイトから DB2 Information Center にアクセスします。しかし、イントラネット・サーバーからまたはご使用のコンピューターから DB2 Information Center にアクセスしたい場合には、お手持ちの製品メディア・パックにある DB2 Information Center CD を使用して、DB2 Information Center をインストールしなければなりません。DB2 資料にアクセスするためのオプションのサマリー、および 3 つのインストール・シナリオを参照して、DB2 Information Center へのアクセス方法のうちどれがユーザーおよびユーザーの作業環境にとって最善か、またどのようなインストール問題を考慮する必要があるかを判断する参考にしてください。

DB2 資料にアクセスするためのオプションのサマリー:

以下の表は、ユーザーの作業環境では、DB2 Information Center にある DB2 製品資料にアクセスするためにどのオプションが最善かについての推奨を示しています。

インターネット・アクセス	イントラネット・アクセス	推奨
する	する	IBM Web サイト上の DB2 Information Center にアクセスするか、またはイントラネット・サーバー上にインストールされた DB2 Information Center にアクセスする。
する	しない	IBM Web サイト上の DB2 Information Center にアクセスする。
しない	する	イントラネット・サーバー上にインストールされた DB2 Information Center にアクセスする。
しない	しない	ローカル・コンピューター上の DB2 Information Center にアクセスする。

シナリオ : ご使用のコンピューター上の DB2 Information Center にアクセスする:

陳さんは、インターネット・アクセスを提供するローカル ISP のない小さな町にある工場を所有しています。彼は製品の在庫、注文、自分の銀行口座情報、およびビジネスの経費を管理するために、DB2 Universal Database を購入しました。DB2 製品を使用した経験がないので、陳さんは DB2 製品資料でその使用法を学習する必要があります。

標準インストール・オプションを使用して自分のコンピューターに DB2 Universal Database をインストールした後、陳さんは DB2 資料にアクセスしようとします。しかしブラウザは、開こうとしたページがないことを知らせるエラー・メッセージ

ジを表示します。陳さんは、購入した DB2 製品のインストール解説書を調べ、DB2 資料にアクセスしたいのであれば、自分のコンピューター上に DB2 Information Center をインストールしなければならないことを知ります。DB2 Information Center CD がメディア・パックにあることが分かり、それをインストールします。

現在彼は、自分のオペレーティング・システムのアプリケーション・ランチャーから DB2 Information Center にアクセスでき、購入した DB2 製品の使用法を学習できて、ビジネスをより一層成功させることができるようになりました。

シナリオ：IBM Web サイト上の DB2 Information Center にアクセスする：

コリンは、十分な訓練を受けた情報技術コンサルタントです。彼の専門はデータベース・テクノロジーおよび SQL で、これらに関するセミナーを DB2 Universal Database を使用して北アメリカ全体の企業に対して開催しています。コリンのセミナーでは、教材として DB2 資料を使用しています。たとえば、SQL に関する教育コースでは、データベース照会の基本構文および拡張構文を教えるために、SQL 上の DB2 資料を使用しています。

コリンの教える企業のほとんどは、インターネット・アクセスができます。こうした状況から彼は、DB2 Universal Database の最新バージョンをインストールした際、IBM Web サイト上の DB2 Information Center にアクセスするように、自分のモバイル・コンピューターを構成することにしました。そのように構成したので、コリンはセミナー実施中に、最新の DB2 資料にオンラインでアクセスできます。

しかし、旅行中に時折、コリンはインターネット・アクセスができないことがあります。このことは彼にとって問題でした。とりわけ、セミナーの準備をする際に DB2 資料にアクセスする必要性が生じたときに、問題となりました。このような状況を避けるために、コリンは DB2 Information Center のコピーを、自分のモバイル・コンピューター上にインストールしました。

コリンは、DB2 資料のコピーを常時自由に使えるという柔軟性を喜んでいます。**db2set** コマンドを使用すれば、自分のコンピューター上のレジストリー変数を簡単に構成して、自分の状況に応じて、IBM Web サイト上または自分のモバイル・コンピューター上のどちらかの DB2 Information Center にアクセスするようになります。

シナリオ：イントラネット・サーバー上の DB2 Information Center にアクセスする：

エバは、生命保険会社で熟練したデータベース管理者として働いています。彼女の管理責任には、会社の UNIX データベース・サーバー上に、DB2 Universal Database の最新バージョンをインストールして構成する作業が含まれています。彼女の会社は最近、従業員に対して、セキュリティの理由で、仕事にインターネット・アクセスを提供しないと通知しました。彼女の会社にはネットワーク環境があるので、エバは DB2 Information Center のコピーをイントラネット・サーバー上にインストールして、会社内の、会社のデータウェアハウスを定期的に使用する従業員すべて（営業担当者、営業マネージャー、およびビジネス・アナリスト）が DB2 資料にアクセスできるようにすることを決定しました。

必ず各コンピューターがイントラネット・サーバーのホスト名およびポート番号を使用して DB2 Information Center にアクセスするように構成するため、エバは彼女

のデータベース・チームに、応答ファイルを使用して DB2 Universal Database の最新バージョンを、すべての従業員のコンピューター上にインストールするよう指示します。

しかし、エバのチームの経験の浅いデータベース管理者であるミゲルは誤解して、イントラネット・サーバー上の DB2 Information Center にアクセスするように DB2 Universal Database を構成するのではなく、従業員のコンピューターのいくつかに DB2 Information Center のコピーをインストールしました。この状況を正すため、エバはミゲルに、 **db2set** コマンドを使用して、それらのコンピューター上のそれぞれの DB2 Information Center レジストリー変数 (ホスト名は DB2_DOCHOST、ポート番号は DB2_DOCPORT) を変更するように指示します。これで、ネットワーク上の該当するコンピューターのすべてが DB2 Information Center にアクセスできるようになり、従業員たちは DB2 に関する疑問の答えを DB2 資料で見つけることができるようになりました。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 161 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 154 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)』
- 157 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (Windows)』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセスのロケーションの設定: Common GUI help』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2set - DB2 プロファイル・レジストリー・コマンド』

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)

DB2 製品資料は 3 つの方法でアクセスできます。すなわち、IBM Web サイトから、イントラネット・サーバーから、またはご使用のコンピューター上にインストールされたバージョンからです。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイトから DB2 資料にアクセスします。イントラネット・サーバーまたはご使用のコンピューターから DB2 資料にアクセスしたい場合には、資料を *DB2 Information Center CD* からインストールしなければなりません。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インストールの設定を定義し、UNIX オペレーティング・システムを使用するコンピューター上に DB2 Information Center をインストールすることができます。

前提条件:

このセクションは、UNIX コンピューター上に DB2 Information Center をインストールするためのハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の各要件をリストします。

• ハードウェア要件

次のいずれかのプロセッサが必要です。

- PowerPC (AIX)
- HP 9000 (HP-UX)
- Intel 32-bit (Linux)
- Solaris UltraSPARC コンピューター (Solaris オペレーティング環境)

• オペレーティング・システム要件

次のいずれかのオペレーティング・システムが必要です。

- IBM AIX 5.1 (PowerPC 上)
- HP-UX 11i (HP 9000 上)
- Red Hat Linux 8.0 (Intel 32-bit 上)
- SuSE Linux 8.1 (Intel 32-bit 上)
- Sun Solaris バージョン 8 (Solaris オペレーティング環境 UltraSPARC コンピューター上)

注: DB2 Information Center は、DB2 クライアントがサポートされるすべての UNIX オペレーティング・システム上で正式にサポートされるとは限りません。したがって、DB2 Information Center は IBM Web サイトからアクセスするか、またはインターネット・サーバー上に DB2 Information Center をインストールしてアクセスすることをお勧めします。

• ソフトウェア要件

- 次のブラウザがサポートされます。

- Mozilla バージョン 1.0 またはそれ以上

- DB2 セットアップ・ウィザードは、グラフィック・インストーラーです。ご使用のコンピューターで DB2 セットアップ・ウィザードを実行するには、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを表示できる X Window システム・ソフトウェアのインプリメンテーションが必要です。DB2 セットアップ・ウィザードを実行する前に、ディスプレイを正しくエクスポートしたことを確認してください。たとえば、コマンド・プロンプトで以下のコマンドを入力します。

```
export DISPLAY=9.26.163.144:0.
```

• 通信要件

- TCP/IP

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Information Center をインストールするには、以下のようにします。

1. システムにログオンします。
2. ご使用のシステム上に DB2 Information Center 製品 CD を挿入してマウントします。

- 以下のコマンドを入力することによって、CD がマウントされているディレクトリに移動します。

```
cd /cd
```

ここで、`/cd` は、CD のマウント・ポイントを表しています。

- `/db2setup`** コマンドを入力してDB2 セットアップ・ウィザードを開始します。
- IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが開きます。DB2 Information Center のインストールに直接進むには、「製品のインストール」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプを利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ」をクリックします。「キャンセル (Cancel)」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。
- 「インストールする製品の選択 (Select the product you would like to install)」ページで、「次へ (Next)」をクリックします。
- 「DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ (Welcome to the DB2 Setup wizard)」ページで「次へ (Next)」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードがプログラム・セットアップ・プロセスをガイドします。
- インストールを進めるには、ご使用条件を受け入れなければなりません。「ご使用条件 (License Agreement)」ページで、「使用条件の条項に同意します (I accept the terms in the license agreement)」を選択し、「次へ (Next)」をクリックします。
- 「インストール・アクションの選択 (Select the installation action)」ページ上の「このコンピューター上に DB2 Information Center をインストールする (Install DB2 Information Center on this computer)」を選択します。後で応答ファイルを使用して、このコンピューターまたは他のコンピューターに DB2 Information Center をインストールする場合には、「設定を応答ファイルに保管する (Save your settings in a response file)」を選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
- 「インストールする言語の選択 (Select the languages to install)」ページで、DB2 Information Center がインストールされる言語を選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
- 「DB2 Information Center ポートの指定 (Specify the DB2 Information Center port)」ページで、着信のために DB2 Information Center を構成します。「次へ (Next)」をクリックして、インストールを続行します。
- 「ファイルのコピーの開始 (Start copying files)」ページで、行ったインストール選択を検討します。設定を変更する場合は「戻る (Back)」をクリックします。「インストール (Install)」をクリックして、DB2 Information Center ファイルをご使用のコンピューターにコピーします。

応答ファイルを使用して DB2 Information Center をインストールすることもできます。

インストール・ログ `db2setup.his`、`db2setup.log`、および `db2setup.err` は、デフォルトでは `/tmp` ディレクトリにあります。ログ・ファイルのロケーションは指定できます。

db2setup.log ファイルには、エラーも含めて、すべての DB2 製品インストール情報がキャプチャーされます。 db2setup.his ファイルは、ご使用のコンピューター上のすべての DB2 製品インストールを記録します。 DB2 は db2setup.log ファイルを db2setup.his ファイルに付加します。 db2setup.err ファイルには、例外およびトラップ情報など、Javaによって戻されるエラー出力がキャプチャーされます。

インストールが完了すると、DB2 Information Center は、ご使用の UNIX オペレーティング・システムに応じて、以下のディレクトリーの 1 つにインストールされます。

- AIX: /usr/opt/db2_08_01
- HP-UX: /opt/IBM/db2/V8.1
- Linux: /opt/IBM/db2/V8.1
- Solaris オペレーティング環境 : /opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 のインストール (UNIX)』
- 161 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 162 ページの『希望する言語で DB2 Information Center のトピックを表示する』
- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 157 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (Windows)』

DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (Windows)

DB2 製品資料は 3 つの方法でアクセスできます。すなわち、IBM Web サイトから、イントラネット・サーバーから、またはご使用のコンピューター上にインストールされたバージョンからです。デフォルトでは、DB2 製品は IBM Web サイトから DB2 資料にアクセスします。イントラネット・サーバーまたはご使用のコンピューターから DB2 資料にアクセスしたい場合には、DB2 資料を *DB2 Information Center CD* からインストールしなければなりません。DB2 セットアップ・ウィザードを使用して、インストールの設定を定義し、Windows オペレーティング・システムを使用するコンピューター上に DB2 Information Center をインストールすることができます。

前提条件:

このセクションは、Windows 上に DB2 Information Center をインストールするためのハードウェア、オペレーティング・システム、ソフトウェア、および通信の各要件をリストします。

- **ハードウェア要件**

次のいずれかのプロセッサが必要です。

- 32-bit コンピューター : Pentium または Pentium 互換 CPU

• **オペレーティング・システム要件**

次のいずれかのオペレーティング・システムが必要です。

- Windows 2000

- Windows XP

注: DB2 Information Center は、DB2 クライアントがサポートされるすべての Windows オペレーティング・システム上で正式にサポートされるとは限りません。したがって、DB2 Information Center は IBM Web サイトからアクセスするか、またはインターネット・サーバー上に DB2 Information Center をインストールしてアクセスすることをお勧めします。

• **ソフトウェア要件**

- 以下のブラウザがサポートされます。

- Mozilla 1.0 またはそれ以上

- Internet Explorer バージョン 5.5 または 6.0 (バージョン 6.0 for Windows XP)

• **通信要件**

- TCP/IP

手順:

DB2 セットアップ・ウィザードを使用して DB2 Information Center をインストールするには、以下のようにします。

1. DB2 Information Center のインストール用に定義したアカウントを使用して、システムにログオンします。
2. CD をドライブに挿入します。自動実行機能を使用可能にしている場合には、それが IBM DB2 セットアップ・ランチパッドを自動的に開始します。
3. DB2 セットアップ・ウィザードは、システム言語を判別してから、その言語用のセットアップ・プログラムを起動します。セットアップ・プログラムを英語以外の言語で実行したい場合や、セットアップ・プログラムが自動始動に失敗した場合には、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始することができます。

次のようにして、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始します。

- a. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」を選択します。
- b. 「開く」フィールドで、次のコマンドを入力します。

```
x:%setup language
```

x: はご使用の CD ドライブ、language はセットアップ・プログラムが実行する言語を表します。

- c. 「OK」をクリックします。
4. IBM DB2 セットアップ・ランチパッドが開きます。DB2 Information Center のインストールに直接進むには、「製品のインストール (Install Product)」をクリックします。残りのステップについて説明しているオンライン・ヘルプ

を利用できます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックします。「キャンセル (Cancel)」をクリックすれば、いつでもインストールを終了できます。

5. 「インストールする製品の選択 (Select the product you would like to install)」ページで、「次へ (Next)」をクリックします。
6. 「DB2 セットアップ・ウィザードへようこそ (Welcome to the DB2 Setup wizard)」ページで「次へ (Next)」をクリックします。DB2 セットアップ・ウィザードがプログラム・セットアップ・プロセスをガイドします。
7. インストールを進めるには、ご使用条件を受け入れなければなりません。「ご使用条件 (License Agreement)」ページで、「使用条件の条項に同意します (I accept the terms in the license agreement)」を選択し、「次へ (Next)」をクリックします。
8. 「インストール・アクションの選択 (Select the installation action)」ページ上の「このコンピューター上に DB2 Information Center をインストールする (Install DB2 Information Center on this computer)」を選択します。後で応答ファイルを使用して、このコンピューターまたは他のコンピューターに DB2 Information Center をインストールする場合には、「設定を応答ファイルに保管する (Save your settings in a response file)」を選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
9. 「インストールする言語の選択 (Select the languages to install)」ページで、DB2 Information Center がインストールされる言語を選択します。「次へ (Next)」をクリックします。
10. 「DB2 Information Center ポートの指定 (Specify the DB2 Information Center port)」ページで、着信のために DB2 Information Center を構成します。「次へ (Next)」をクリックして、インストールを続行します。
11. 「ファイルのコピーの開始 (Start copying files)」ページで、行ったインストール選択を検討します。設定を変更する場合は「戻る (Back)」をクリックします。「インストール (Install)」をクリックして、DB2 Information Center ファイルをご使用のコンピューターにコピーします。

応答ファイルを使用して DB2 Information Center をインストールできます。また、**db2rspgn** コマンドを使用して、既存のインストールに基づいて応答ファイルを生成することもできます。

インストール時に検出されるエラーの詳細については、'My Documents'¥DB2LOG¥ ディレクトリーにある db2.log および db2wi.log ファイルを参照してください。My Documents ディレクトリーのロケーションは、ご使用のコンピューターの設定によって異なります。

db2wi.log ファイルには、最新の DB2 インストール情報がキャプチャーされています。db2.log には、DB2 製品インストールの履歴がキャプチャーされています。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 「インストールおよび構成 補足」の『応答ファイルによる DB2 製品のインストール (Windows)』
- 161 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 162 ページの『希望する言語で DB2 Information Center のトピックを表示する』
- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 154 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2rspgn - 応答ファイル生成プログラム・コマンド』

DB2 インフォメーション・センターの呼び出し

DB2 インフォメーション・センターは、Linux、UNIX、および Windows オペレーティング・システム用の DB2 製品 (DB2 Universal Database、 DB2 Connect、DB2 Information Integrator、 DB2 Query Patroller など) を使用するために必要なすべての情報を提供します。

DB2 インフォメーション・センターは、以下の場所から呼び出すことができます。

- DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューター
- DB2 インフォメーション・センターがインストールされているイントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューター
- IBM の Web サイト

前提条件:

DB2 インフォメーション・センターを呼び出すための要件は、以下のとおりです。

- オプション: 希望する言語でトピックを表示するようブラウザを構成する
- オプション: コンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを使用するよう DB2 クライアントを構成する

手順:

DB2 UDB クライアントまたはサーバーがインストールされているコンピューターから DB2 インフォメーション・センターを呼び出すには、以下のようになります。

- (Windows オペレーティング・システムの)「スタート」メニューから: 「スタート」 → 「プログラム」 → 「IBM DB2」 → 「情報」 → 「インフォメーション・センター」をクリックします。
- コマンド行プロンプトから:
 - Linux および UNIX オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs** コマンドを発行します。
 - Windows オペレーティング・システムの場合、 **db2icdocs.exe** コマンドを発行します。

イントラネット・サーバーまたはローカル・コンピューターにインストール済みの DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようにします。

- Web ページ `http://<host-name>:<port-number>/` を開きます (<host-name> はホスト名、<port-number> は DB2 インフォメーション・センターを利用可能なポート番号)。

IBM Web サイトにある DB2 インフォメーション・センターを Web ブラウザーで開くには、以下のようにします。

- Web ページ `publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/` を開きます。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 162 ページの『希望する言語で DB2 Information Center のトピックを表示する』
- 170 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 161 ページの『コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール』
- 172 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセスのロケーションの設定: Common GUI help』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『HELP コマンド』

コンピューターまたはイントラネット・サーバーへの DB2 インフォメーション・センターの更新インストール

`http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/` から利用できる DB2 インフォメーション・センターは、資料の新規追加または変更によって定期的に更新されます。さらに、更新された DB2 インフォメーション・センターをコンピューターまたはイントラネット・サーバーにダウンロードしてインストールできる場合もあります。DB2 インフォメーション・センターを更新しても、DB2 クライアント製品またはサーバー製品は更新されません。

前提条件:

インターネットに接続されたコンピューターへのアクセスが必要です。

手順:

DB2 インフォメーション・センターの更新をコンピューターまたはイントラネット・サーバーにインストールするには、以下のようにします。

1. IBM の Web サイト (`http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/`) にある DB2 インフォメーション・センターを開きます。

2. 「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」ページの見出し「サービスおよびサポート」の「ダウンロード」セクションで、「DB2 資料」リンクをクリックします。
3. 最新のドキュメンテーション・イメージのレベルと、インストール済みのドキュメンテーション・レベルを比較して、DB2 インフォメーション・センターを更新する必要があるかどうかを確認します。「DB2 インフォメーション・センターによるこそ」ページに、インストール済みのドキュメンテーションのレベルがリストされます。
4. より新しいバージョンの DB2 インフォメーション・センターが存在する場合、ご使用のオペレーティング・システムに対応する最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをダウンロードします。
5. 最新の DB2 インフォメーション・センター・イメージをインストールするには、Web ページの指示に従ってください。

関連概念:

- 152 ページの『DB2 Information Center のインストール・シナリオ』

関連タスク:

- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 154 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (UNIX)』
- 157 ページの『DB2 セットアップ・ウィザードを使用した DB2 Information Center のインストール (Windows)』

希望する言語で DB2 Information Center のトピックを表示する

DB2 Information Center は、ご使用のブラウザの設定で指定された言語でトピックを表示します。トピックが希望する言語に翻訳されていない場合には、DB2 Information Center はトピックを英語で表示します。

手順:

Internet Explorer ブラウザーで希望する言語でトピックを表示するには、以下のようになります。

1. Internet Explorer で、「ツール」 → 「インターネット オプション」 → 「言語...」 ボタンをクリックします。「言語の優先順位」ウィンドウが開きます。
2. 希望する言語が、言語のリストの最初の項目として指定されていることを確認します。
 - リストに新規言語を追加する場合は、「追加... (Add...)」 ボタンをクリックします。

注: 言語を追加しても、希望する言語でトピックを表示するために必要なフォントがコンピューターにあることが保証されるわけではありません。

- ある言語をリストの先頭に移動させるには、その言語が言語のリストの先頭に来るまで「上へ (Up)」 ボタンを選択します。
3. ページを最新表示して、希望する言語で DB2 Information Center を表示します。

Mozilla ブラウザーで希望する言語でトピックを表示するには、以下のようにします。

1. Mozilla で、「編集 (Edit)」 → 「設定 (Preferences)」 → 「言語 (Languages)」 ボタンを選択します。言語パネルが「設定 (Preferences)」 ウィンドウに表示されます。
2. 希望する言語が、言語のリストの最初の項目として指定されていることを確認します。
 - リストに新規言語を追加する場合は、「追加... (Add...)」 ボタンをクリックして、「言語の追加 (Add Languages)」 ウィンドウから言語を選択します。
 - ある言語をリストの先頭に移動させるには、その言語が言語のリストの先頭に来るまで「上へ (Up)」 ボタンを選択します。
3. ページを最新表示して、希望する言語で DB2 Information Center を表示します。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

DB2 PDF 資料および印刷された資料

以下の表は、正式な資料名、資料番号、および PDF ファイル名を示しています。ハードコピー版の資料を注文するには、正式な資料名を知っておく必要があります。PDF ファイルを印刷するには、PDF ファイル名を知っておく必要があります。

DB2 資料は、以下のカテゴリーに分類されています。

- DB2 中核情報
- 管理情報
- アプリケーション開発情報
- ビジネス・インテリジェンス情報
- DB2 Connect 情報
- 入門情報
- チュートリアル情報
- オプション・コンポーネント情報
- リリース・ノート

以下の表は、DB2 ライブラリー内の各資料について、その資料のハードコピー版を注文したり、PDF 版を印刷または表示したりするのに必要な情報を示しています。DB2 ライブラリー内の各資料に関する詳細な説明については、www.ibm.com/shop/publications/order にある IBM Publications Center にアクセスしてください。

DB2 の基本情報

こうした資料の情報は、すべての DB2 ユーザーに基本的なもので、プログラマーおよびデータベース管理者にとって役立つ情報であるとともに、DB2 Connect、DB2 Warehouse Manager、または他の DB2 製品を使用するユーザーにとっても役立つ内容です。

表7. DB2 の基本情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database コマンド・リファレンス」	SC88-9140	db2n0j81
「IBM DB2 Universal Database 用語集」	資料番号なし	db2t0j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 1 巻」	GC88-9152 (ハードコピーな し)	db2m1j81
「IBM DB2 Universal Database メッセージ・リファレンス 第 2 巻」	GC88-9153 (ハードコピーな し)	db2m2j81
「IBM DB2 Universal Database 新機能」	SC88-9158	db2q0j81

管理情報

これらの資料の情報は、DB2 データベース、データウェアハウス、およびフェデレーテッド・システムを効果的に設計し、インプリメントし、保守するために必要なトピックを扱っています。

表8. 管理情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: プランニング」	SC88-9135	db2d1j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: インプリメンテー ション」	SC88-9133	db2d2j81
「IBM DB2 Universal Database 管理ガイド: パフォーマンス」	SC88-9134	db2d3j81
「IBM DB2 Universal Database 管理 API リファレンス」	SC88-9136	db2b0j81
「IBM DB2 Universal Database データ移動ユーティリティー ガイドおよびリファレンス」	SC88-9142	db2dmj81
「IBM DB2 Universal Database データ・リカバリーと高可用性 ガイドおよびリファレンス」	SC88-9143	db2haj81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター 管理ガイド」	SC88-9165	db2ddj81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 1 巻」	SC88-9155	db2s1j81
「IBM DB2 Universal Database SQL リファレンス 第 2 巻」	SC88-9156	db2s2j81

表 8. 管理情報 (続き)

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database システム・モニター ガイドおよびリファレンス」	SC88-9157	db2f0j81

アプリケーション開発情報

これらの資料の情報は、DB2 Universal Database (DB2 UDB) のアプリケーション開発者またはプログラマーが特に興味を持つ内容です。サポートされるさまざまなプログラミング・インターフェース (組み込み SQL、ODBC、JDBC、SQLJ、CLI など) を使用して DB2 UDB にアクセスするのに必要な資料とともに、サポートされる言語およびコンパイラーについても紹介されています。また、DB2 インフォメーション・センターをご使用の場合には、サンプル・プログラムのソース・コードの HTML バージョンにアクセスすることもできます。

表 9. アプリケーション開発情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド アプリケーションの構築および実行」	SC88-9137	db2axj81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド クライアント・アプリケーションのプログラミング」	SC88-9138	db2a1j81
「IBM DB2 Universal Database アプリケーション開発ガイド サーバー・アプリケーションのプログラミング」	SC88-9139	db2a2j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 1 巻」	SC88-9159	db2l1j81
「IBM DB2 Universal Database コール・レベル・インターフェース ガイドおよびリファレンス 第 2 巻」	SC88-9160	db2l2j81
「IBM DB2 Universal Database データウェアハウス・センター アプリケーション統合ガイド」	SC88-9166	db2adj81
「IBM DB2 Universal Database XML Extender 管理およびプログラミングのガイド」	SC88-9172	db2sxj81

ビジネス・インテリジェンス情報

これらの資料の情報は、さまざまなコンポーネントを使用して、DB2 Universal Database のデータウェアハウジング機能および分析機能を拡張する方法を説明しています。

表 10. ビジネス・インテリジェンス情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インフォメーション・カタログ・センター 管理ガイド」	SC88-9167	db2dij81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition インストール・ガイド」	GC88-9164	db2idj81
「IBM DB2 Warehouse Manager Standard Edition DB2 Warehouse Manager を使用時の ETI ソリューション・コンバージョン・プログラムの管理」	SC88-9894	iwhe1mstx80

DB2 Connect 情報

このカテゴリの情報は、DB2 Connect Enterprise Edition または DB2 Connect Personal Edition を使用して、メインフレーム・サーバーおよびミッドレンジ・サーバー上のデータにアクセスする方法を説明しています。

表 11. DB2 Connect 情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM コネクティビティ 補足」	資料番号なし	db2h1j81
「IBM DB2 Connect Enterprise Edition 概説およびインストール」	GC88-9145	db2c6j81
「IBM DB2 Connect Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9146	db2c1j81
「IBM DB2 Connect ユーザーズ・ガイド」	SC88-9147	db2c0j81

入門情報

このカテゴリの情報は、サーバー、クライアント、および他の DB2 製品をインストールして構成する場合に役立ちます。

表 12. 入門情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Universal Database DB2 クライアント機能 概説およびインストール」	GC88-9144 (ハードコピーなし)	db2itj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 サーバー機能 概説およびインストール」	GC88-9148	db2isj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Personal Edition 概説およびインストール」	GC88-9150	db2ilj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 インストールおよび構成 補足」	GC88-9149 (ハードコピーなし)	db2iyj81
「IBM DB2 Universal Database DB2 Data Links Manager 概説およびインストール」	GC88-9141	db2z6j81

チュートリアル情報

チュートリアル情報は、DB2 機能を紹介し、さまざまなタスクを実行する方法を示します。

表 13. チュートリアル情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介」	資料番号なし	db2tuj81
「ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド」	資料番号なし	db2taj81
「インフォメーション・カタログ・センター チュートリアル」	資料番号なし	db2aij81
「Video Central for e-business チュートリアル」	資料番号なし	db2twj81
「Visual Explain チュートリアル」	資料番号なし	db2tvj81

オプション・コンポーネント情報

このカテゴリーの情報は、DB2 のオプション・コンポーネントを使用する方法について説明しています。

表 14. オptional・コンポーネント情報

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「IBM DB2 Cube Views Guide and Reference」	SC18-7298	db2aax81
「IBM DB2 Query Patroller インストール、管理、使用法のガイド」	GC88-9154	db2dwj81
「IBM DB2 Spatial Extender and Geodetic Extender ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス」	SC88-9171	db2sbj81
「IBM DB2 Universal Database Data Links Manager 管理ガイドおよびリファレンス」	SC88-9169	db2z0x82
「DB2 Net Search Extender 管理およびユーザーズ・ガイド」	SH88-8546	N/A

注: この資料の HTML 版は、HTML ドキュメンテーション CD からインストールされません。

リリース・ノート

リリース・ノートは、ご使用の製品のリリースおよびフィックスパック・レベルに特有の追加情報を紹介します。また、リリース・ノートには、各リリース、アップデート、およびフィックスパックで組み込まれた資料上の更新の要約も含まれています。

表 15. リリース・ノート

資料名	資料番号	PDF ファイル名
「DB2 リリース・ノート」	「注」を参照。	「注」を参照。
「DB2 インストール情報」	製品 CD-ROM でのみ参照可能。	使用できません。

注: リリース・ノートは以下の形式で入手できます。

- XHTML およびテキスト形式 (製品 CD 内)
- PDF 形式 (PDF ドキュメンテーション CD 内)

さらに、リリース・ノートの中で、『既知の問題と予備手段』および『リリース間の非互換性』に関する部分は DB2 インフォメーション・センターにも表示されます。

UNIX ベースのプラットフォームでテキスト形式でリリース・ノートを確認するには、Release.Notes ファイルを参照してください。このファイルは、DB2DIR/Readme/%L ディレクトリーに収録されています。%L はロケール名を表しています。DB2DIR は以下になります。

- AIX オペレーティング・システムの場合: /usr/opt/db2_08_01

- その他のすべての UNIX ベースのオペレーティング・システムの場合:
/opt/IBM/db2/V8.1

関連概念:

- 149 ページの『DB2 資料およびヘルプ』

関連タスク:

- 169 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』
- 170 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 170 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』

PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法

DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている DB2 資料を印刷することができます。Adobe Acrobat Reader を使用すれば、資料全体または特定のページを印刷できます。

前提条件:

Adobe Acrobat Reader がインストールされていることを確認してください。Adobe Acrobat Reader をインストールする必要がある場合、Adobe Web サイト (www.adobe.com) から入手できます。

手順:

PDF ファイルから DB2 資料を印刷するには以下のようにします。

1. *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD をドライブに挿入します。UNIX オペレーティング・システムの場合、*DB2 PDF* ドキュメンテーション CD をマウントします。UNIX オペレーティング・システムで CD をマウントする方法については、「概説およびインストール」を参照してください。
2. index.htm を開きます。ブラウザ・ウィンドウにファイルが開きます。
3. 参照したい PDF のタイトルをクリックします。Acrobat Reader で PDF が開きます。
4. 「ファイル」 → 「印刷」を選択して、所要の資料の任意の部分を印刷します。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』

関連タスク:

- 133 ページの『CD-ROM のマウント (AIX)』
- 134 ページの『CD-ROM のマウント (HP-UX)』
- 135 ページの『CD-ROM のマウント (Linux)』
- 170 ページの『DB2 の印刷資料の注文方法』
- 135 ページの『CD-ROM のマウント (Solaris オペレーティング環境)』

関連資料:

- 163 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 の印刷資料の注文方法

ハードコピー版の資料を望む場合には、以下のいずれかの方法で注文できます。

印刷資料の注文方法:

一部の国または地域では、印刷された資料を注文することもできます。お客様がお住まいの国または地域でこのサービスが利用可能かどうかを確認するには、お住まいの国または地域の IBM Publications Web サイトをご覧ください。資料のご注文が可能な場合、以下のようになすことができます。

- 正規の IBM 製品販売業者または営業担当員に連絡してください。お客様がお住まいの地域の IBM 担当員の情報については、お手数ですが IBM の Web サイト (www.ibm.com/planetwide) の IBM Worldwide Directory of Contacts で確認してください。
- IBM Publications Center (<http://www.ibm.com/shop/publications/order>) にアクセスしてください。なお、IBM Publications Center から資料を注文できない国もあります。

DB2 製品がご利用可能になった時点で、印刷された資料は *DB2 PDF* ドキュメンテーション CD にある PDF 形式の資料と同じものです。さらに、*DB2* インフォメーション・センター CD に収録されている印刷された資料の内容もまた、これらと同じです。ただし、*DB2* インフォメーション・センター CD には、PDF 資料にない追加情報も含まれます (たとえば、SQL 管理作業や HTML サンプル)。DB2 PDF ドキュメンテーション CD に収録されている資料の中には、ハードコピーとしてご注文できない資料もあります。

注: *DB2* インフォメーション・センターは、PDF またはハードコピーの資料よりも頻繁に更新されます。ドキュメンテーションの更新が入手可能になった時点でインストールするか、*DB2* インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) を参照して最新の情報を入手してください。

関連タスク:

- 169 ページの『PDF ファイルからの DB2 資料の印刷方法』

関連資料:

- 163 ページの『DB2 PDF 資料および印刷された資料』

DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す

コンテキスト・ヘルプは、特定のウィンドウ、ノートブック、ウィザード、またはアドバイザーに関連したタスクまたはコントロールの情報を提供します。コンテキスト・ヘルプは、グラフィカル・ユーザー・インターフェースのある *DB2* 管理ツールおよび開発ツールから利用できます。コンテキスト・ヘルプには、以下の 2 種類があります。

- それぞれのウィンドウまたはノートブックにある「ヘルプ」ボタンからアクセス可能なヘルプ

- infopop (ポップアップ情報ウィンドウ)。これは、マウス・カーソルを特定のフィールドまたはコントロール上に置いたとき、またはウィンドウ、ノートブック、ウィザード、アドバイザー内でフィールドまたはコントロールを選択して **F1** を押すと表示されます。

「ヘルプ」ボタンを押すと、概説、前提条件、およびタスク情報が表示されます。infopop は、それぞれのフィールドおよびコントロールについて説明します。

手順:

コンテキスト・ヘルプを呼び出すには、以下のようになります。

- ウィンドウおよびノートブックのヘルプを表示するには、いずれかの DB2 ツールを開始して、任意のウィンドウまたはノートブックを開きます。ウィンドウまたはノートブックの右下隅にある「ヘルプ」ボタンをクリックして、コンテキスト・ヘルプを呼び出します。

また、それぞれの DB2 ツール・センターの上部にある「ヘルプ」メニュー項目からコンテキスト・ヘルプにアクセスすることもできます。

ウィザードおよびアドバイザーでは、最初のページの「タスクの概要」リンクをクリックすると、コンテキスト・ヘルプを表示できます。

- ウィンドウまたはノートブック上の各コントロールの infopop ヘルプを表示するには、コントロールをクリックしてから、**F1** を押します。コントロールの詳細情報を示すポップアップ情報が、黄色いウィンドウに表示されます。

注: フィールドまたはコントロールにマウス・カーソルを置いておくだけで infopops が表示されるようにするには、「ツール設定」ノートブックの「**文書 (Documentation)**」ページの「**infopops の自動表示**」チェック・ボックスを選択します。

infopop に似た別のコンテキスト・ヘルプに、診断ポップアップ情報があります。これにはデータ入力規則が示されます。診断ポップアップ情報は、無効または不十分なデータが入力されたとき、紫色のウィンドウに表示されます。診断ポップアップ情報は、以下に関して表示されます。

- 必須フィールド。
- 日付フィールドのように、正確なフォーマットを必要とするデータのフィールド。

関連タスク:

- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 172 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 172 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』
- 173 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセス: Concepts help』
- 『DB2 UDB ヘルプの使用法: Common GUI help』
- 『DB2 インフォメーション・センターへのアクセスのロケーションの設定: Common GUI help』
- 『DB2 コンテキスト・ヘルプと資料へのアクセスを設定する: Common GUI help』

コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す

メッセージ・ヘルプは、メッセージが出された原因と、エラーへの応答として実行すべきアクションを説明します。

手順:

メッセージ・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? XXXnnnnn
```

ここで、*XXXnnnnn* は有効なメッセージ ID を表します。

たとえば、? SQL30081 と入力すると、メッセージ SQL30081 に関するヘルプを表示します。

関連概念:

- 「メッセージ・リファレンス 第 1 巻」の『メッセージの概要』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す

コマンド・ヘルプは、コマンド行プロセッサでのコマンドの構文を説明します。

手順:

コマンド・ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? command
```

ここで *command* はキーワードまたはコマンド全体を表します。

たとえば、? catalog と入力すると、すべての CATALOG コマンドに関するヘルプが表示され、? catalog database と入力すると、CATALOG DATABASE コマンドのヘルプだけが表示されます。

関連タスク:

- 170 ページの『DB2 ツールからコンテキスト・ヘルプを呼び出す』
- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 172 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 173 ページの『コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す』

関連資料:

- 「コマンド・リファレンス」の『db2 - コマンド行プロセッサの呼び出しコマンド』

コマンド行プロセッサから SQL 状態ヘルプを呼び出す

DB2 Universal Database は、SQL ステートメントの結果の原因となったと考えられる条件の SQLSTATE 値を戻します。SQLSTATE ヘルプは、SQL 状態および SQL 状態クラス・コードの意味を説明します。

手順:

SQL 状態ヘルプを呼び出すには、コマンド行プロセッサを開いて以下のように入力します。

```
? sqlstate または ? class code
```

ここで、*sqlstate* は有効な 5 桁の SQL 状態を、*class code* は SQL 状態の最初の 2 桁を表します。

たとえば、? 08003 を指定すると SQL 状態 08003 のヘルプが表示され、? 08 を指定するとクラス・コード 08 のヘルプが表示されます。

関連タスク:

- 160 ページの『DB2 インフォメーション・センターの呼び出し』
- 172 ページの『コマンド行プロセッサからメッセージ・ヘルプを呼び出す』
- 172 ページの『コマンド行プロセッサからコマンド・ヘルプを呼び出す』

DB2 チュートリアル

DB2[®] チュートリアルは、DB2 Universal Database のさまざまな機能について学習するのを支援します。このチュートリアルでは、アプリケーションの開発、SQL 照会のパフォーマンス調整、データウェアハウスの処理、メタデータの管理、および DB2 を使用した Web サービスの開発の各分野で、段階的なレッスンが用意されています。

はじめに:

インフォメーション・センター (<http://publib.boulder.ibm.com/infocenter/db2help/>) から、このチュートリアルの XHTML 版を表示できます。

チュートリアルの中で、サンプル・データまたはサンプル・コードを使用する場合があります。個々のタスクの前提条件については、それぞれのチュートリアルを参照してください。

DB2 Universal Database チュートリアル:

以下に示すチュートリアルのタイトルをクリックすると、そのチュートリアルを表示できます。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウス・センターの紹介
データウェアハウス・センターを使用して簡単なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

ビジネス・インテリジェンス・チュートリアル: データウェアハウジングの上級者向けガイド

データウェアハウス・センターを使用して高度なデータウェアハウジング・タスクを実行します。

インフォメーション・カタログ・センター・チュートリアル

インフォメーション・カタログを作成および管理して、インフォメーション・カタログ・センターを使用してメタデータを配置し使用します。

Visual Explain チュートリアル

Visual Explain を使用して、パフォーマンスを向上させるために SQL ステートメントを分析し、最適化し、調整します。

DB2 トラブルシューティング情報

DB2[®] 製品を使用する際に役立つ、トラブルシューティングおよび問題判別に関する広範囲な情報を利用できます。

DB2 ドキュメンテーション

トラブルシューティング情報は、DB2 インフォメーション・センター、および DB2 ライブラリーに含まれる PDF 資料の中でご利用いただけます。DB2 インフォメーション・センターで、(ブラウザ・ウィンドウの左側の) ナビゲーション・ツリーの「サポートおよびトラブルシューティング (Support and troubleshooting)」ブランチを参照すると、DB2 トラブルシューティング・ドキュメンテーションの詳細なリストが見つかります。

DB2 Technical Support の Web サイト

現在問題が発生していて、考えられる原因とソリューションを検索したい場合は、DB2 Technical Support の Web サイトを参照してください。

Technical Support サイトには、最新の DB2 出版物、TechNotes、プログラム診断依頼書 (APAR)、フィックスパック、DB2 内部エラー・コードの最新リスト、その他のリソースが用意されています。この知識ベースを活用して、問題に対する有効なソリューションを探し出すことができます。

DB2 Technical Support の Web サイト

(<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb/winos2unix/support>) にアクセスしてください。

DB2 Problem Determination Tutorial Series

DB2 製品で作業中に直面するかもしれない問題を素早く識別し、解決する方法に関する情報を見つけるには、DB2 Problem Determination Tutorial Series の Web サイトを参照してください。あるチュートリアルでは、使用可能な DB2 問題判別機能およびツールを紹介し、それらをいつ使用すべきかを判断する助けを与えます。別のチュートリアルは、『データベース・エンジン問題判別 (Database Engine Problem Determination)』、『パフォーマンス問題判別 (Performance Problem Determination)』、『アプリケーション問題判別 (Application Problem Determination)』などの関連トピックを扱っています。

DB2 Technical Support

(<http://www.ibm.com/software/data/support/pdm/db2tutorials.html>) には、DB2 問題判別チュートリアルがすべて揃っています。

関連概念:

- 150 ページの『DB2 インフォメーション・センター』
- *トラブルシューティング・ガイド* の『Introduction to Problem Determination - DB2 テクニカル・サポートのチュートリアル』

アクセス支援

アクセス支援機能は、身体に障害のある（身体動作が制限されている、視力が弱いなど）ユーザーがソフトウェア製品を十分活用できるように支援します。DB2® バージョン 8 製品に備わっている主なアクセス支援機能は、以下のとおりです。

- すべての DB2 機能は、マウスの代わりにキーボードを使ってナビゲーションできます。詳細については、『キーボードによる入力およびナビゲーション』を参照してください。
- DB2 ユーザー・インターフェースのフォント・サイズおよび色をカスタマイズすることができます。詳細については、176 ページの『アクセスしやすい表示』を参照してください。
- DB2 製品は、Java™ Accessibility API を使用するアクセス支援アプリケーションをサポートします。詳細については、176 ページの『支援テクノロジーとの互換性』を参照してください。
- DB2 資料は、アクセスしやすい形式で提供されています。詳細については、176 ページの『アクセスしやすい資料』を参照してください。

キーボードによる入力およびナビゲーション

キーボード入力

キーボードだけを使用して DB2 ツールを操作できます。マウスを使って実行できる操作は、キーまたはキーの組み合わせによっても実行できます。標準のオペレーティング・システム・キー・ストロークを使用して、標準のオペレーティング・システム操作を実行できます。

キーまたはキーの組み合わせによって操作を実行する方法について、詳しくは キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・ナビゲーション

キーまたはキーの組み合わせを使用して、DB2 ツールのユーザー・インターフェースをナビゲートできます。

キーまたはキーの組み合わせによって DB2 ツールをナビゲートする方法の詳細については、キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help を参照してください。

キーボード・フォーカス

UNIX® オペレーティング・システムでは、アクティブ・ウィンドウの中で、キー・ストロークによって操作できる領域が強調表示されます。

アクセスしやすい表示

DB2 ツールには、視力の弱いユーザー、その他の視力障害をもつユーザーのためにアクセシビリティを向上させる機能が備わっています。これらのアクセシビリティ拡張機能には、フォント・プロパティのカスタマイズを可能にする機能も含まれています。

フォントの設定

「ツール設定」ノートブックを使用して、メニューおよびダイアログ・ウィンドウに使用されるテキストの色、サイズ、およびフォントを選択できます。

フォント設定に関する詳細情報は、メニューおよびテキストのフォントを変更する: Common GUI help を参照してください。

色に依存しない

本製品のすべての機能を使用するために、ユーザーは必ずしも色を識別する必要はありません。

支援テクノロジーとの互換性

DB2 ツールのインターフェースは、Java Accessibility API をサポートします。これによって、スクリーン・リーダーその他の支援テクノロジーを DB2 製品で利用できるようになります。

アクセスしやすい資料

DB2 形式は、ほとんどの Web ブラウザーで表示可能な XHTML 1.0 形式で提供されています。XHTML により、ご使用のブラウザーに設定されている表示設定に従って資料を表示できます。さらに、スクリーン・リーダーや他の支援テクノロジーを使用することもできます。

シンタックス・ダイアグラムはドット 10 進形式で提供されます。この形式は、スクリーン・リーダーを使用してオンライン・ドキュメンテーションにアクセスする場合にのみ使用できます。

関連概念:

- 176 ページの『ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム』

関連タスク:

- 『キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help』
- 『メニューおよびテキストのフォントを変更する: Common GUI help』

ドット 10 進シンタックス・ダイアグラム

スクリーン・リーダーを使用してインフォメーション・センターを利用するユーザーのために、シンタックス・ダイアグラムがドット 10 進形式で提供されます。

ドット 10 進形式では、各シンタックス・エレメントは別々の行に書き込まれます。複数のシンタックス・エレメントが常に同時に存在する (または常に同時に不在の) 場合、単一のコンパウンド・シンタックス・エレメントとみなせるので同一行に表示できます。

各行は、ドット 10 進数で開始します。たとえば、3 または 3.1 ないしは 3.1.1 です。こうした数を適切に聞き取るには、スクリーン・リーダーが句読点を読み取るように設定されていることを確認してください。同じドット 10 進数を持つすべてのシンタックス・エレメント (たとえば、3.1 という数値を持つすべてのシンタックス・エレメント) は、相互に排他的な代替エレメントです。3.1 USERID および 3.1 SYSTEMID という行を聞き取る場合、シンタックスには両方ではなく USERID または SYSTEMID のどちらかが含まれることが分かります。

ドット 10 進レベルは、ネストのレベルを表示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメントの後に、一連のドット 10 進数 3.1 のシンタックス・エレメントが続きます。3.1 の番号が付されたシンタックス・エレメントすべては、番号 3 の付されたシンタックス・エレメントに従属します。

シンタックス・エレメントに関する情報を追加するため、ドット 10 進数の次に特定のワードおよびシンボルが使用されます。時折、こうしたワードおよびシンボルはエレメントの最初に表示される場合もあります。簡単に識別するため、ワードやシンボルがシンタックス・エレメントの一部である場合には、円記号 (¥) 文字が先頭に付きます。* シンボルはドット 10 進数の次に使用でき、シンタックス・エレメントが反復することを示します。たとえば、ドット 10 進数 3 のシンタックス・エレメント *FILE は、3 ¥* FILE という形式になります。3* FILE という形式は、シンタックス・エレメント FILE が反復されることを示します。3* ¥* FILE という形式は、シンタックス・エレメント * FILE が反復されることを示します。

シンタックス・エレメントのストリングを分離するのに使用されるコンマなどの文字は、シンタックス内の分離する項目の直前に表示されます。こうした文字は、それぞれの項目と同一行に表示するか、同じドット 10 進数を持つ関連する項目のある別の行に表示できます。またその行には、シンタックス・エレメントに関する情報を提供する別のシンボルを表示することも可能です。たとえば、複数の LASTRUN および DELETE シンタックス・エレメントを使用している場合には、5.1*、5.1 LASTRUN、および 5.1 DELETE という行は、エレメントをコンマで区切る必要があります。区切り文字が指定されないと、各シンタックス・エレメントを区切るのにブランクが使用されると想定されます。

シンタックス・エレメントの前に % シンボルが付く場合、他の箇所で定義されている参照であることを示します。% シンボルの後のストリングは、リテラルではなくシンタックス・フラグメントの名前です。たとえば、2.1 %OP1 という行は別のシンタックス・フラグメント OP1 を参照すべきことを意味します。

以下のワードおよびシンボルが、ドット 10 進数の次に使用されます。

- ? は、オプションのシンタックス・エレメントであることを表します。? シンボルが後に続くドット 10 進数は、対応するドット 10 進数のシンタックス・エレメント、および任意の従属のシンタックス・エレメントがオプションであることを示します。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが 1 つしかない場合、? シンボルはそのシンタックス・エレメントと同じ行に表示されます (たとえば、5? NOTIFY)。ドット 10 進数の付いたシンタックス・エレメントが複数ある場合、? シンボルだけで行に表示され、その後にオプションのシンタックス・エレメントが続きます。たとえば、「5 ?, 5 NOTIFY、および 5 UPDATE」という行を聞き取る場合、シンタックス・エレメント NOTIFY および UPDATE

がオプションである、つまりそのいずれかを選択でき、どちらも選択しないこともできることが分かります。 ? シンボルは、線路型ダイアグラムのバイパス線に相当します。

- ! は、デフォルトのシンタックス・エレメントであることを表します。 ! シンボルおよびシンタックス・エレメントが後に続くドット 10 進数は、そのシンタックス・エレメントが、同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントすべてのデフォルト・オプションであることを示します。同じドット 10 進数を共有するシンタックス・エレメントのうち 1 つだけに、 ! シンボルを指定できません。たとえば、「? FILE, 2.1! (KEEP)、および 2.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、 FILE キーワードのデフォルト・オプションは (KEEP) になります。この例では、 FILE キーワードを含めてもオプションを指定しない場合には、デフォルト・オプション KEEP が適用されます。デフォルト・オプションは、次に高位のドット 10 進数にも適用されます。この例の場合、 FILE キーワードが省略されると、デフォルトの FILE(KEEP) が使用されます。しかし、「? FILE, 2.1, 2.1.1! (KEEP)、および 2.1.1 (DELETE)」という行を聞き取る場合、デフォルト・オプション KEEP は次に高位のドット 10 進数 2.1 (関連キーワードを持っていない) にのみ適用され、 ? FILE には適用されません。キーワード FILE が省略されると、どれも使用されません。
- * は、0 回以上反復できるシンタックス・エレメントを示します。 * シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントが 0 回以上使用できること、つまりオプションであり、なおかつ反復できることを表します。たとえば、5.1* データ域という行を聞き取る場合、 1 つまたは複数のデータ域を含めるか、またはデータ域を全く含めないことが可能です。「3*, 3 HOST、および 3 STATE」という行を聞き取る場合、 HOST、STATE をどちらか一方または両方同時に含めるか、どちらも含めないことができます。

注:

1. ドット 10 進数の後にアスタリスク (*) が付き、ドット 10 進数の付いた項目が 1 つしかない場合には、同じ項目を複数回反復できます。
 2. ドット 10 進数の後にアスタリスクが付き、ドット 10 進数の付いた項目が複数ある場合、リストから複数の項目を使用できますが、各項目を複数回使用することはできません。前述の例では、HOST STATE と書くことはできませんが、HOST HOST とは書けません。
 3. * シンボルは、線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当します。
- + は、1 回以上含める必要のあるシンタックス・エレメントであることを示します。 + シンボルが後に続くドット 10 進数は、このシンタックス・エレメントを 1 回以上含める必要があること、つまり少なくとも 1 回は含める必要があり、反復できることを表します。たとえば、「6.1+ データ域」という行を聞き取る場合、データ域を少なくとも 1 回は含めなければなりません。「2+, 2 HOST、および 2 STATE」という行を聞き取る場合には、 HOST、STATE、またはその両方を含める必要があります。 * シンボルと同様に、 + シンボルは、ドット 10 進数の付いた項目が 1 つしかない場合に限り、その特定の項目のみを反復できます。 * シンボルと同様、 + シンボルは線路型シンタックス・ダイアグラムのループバック線に相当します。

関連概念:

- 175 ページの『アクセス支援』

| **関連タスク:**

- | • 『キーボード・ショートカットおよびアクセラレーター: Common GUI help』

| **関連資料:**

- | • 「*SQL* リファレンス 第 2 巻」の『構文図の見方』

| **DB2 Universal Database 製品の共通基準認証**

| DB2 Universal Database は、Common Criteria の評価検定レベル 4 (EAL4) で認証
| の評価を受けています。Common Criteria の詳細については、以下の Common
| Criteria の Web サイトを参照してください。 <http://niap.nist.gov/cc-scheme/>

付録 C. 特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム(本プログラムを含む)との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Canada Limited
Office of the Lab Director
8200 Warden Avenue
Markham, Ontario
L6G 1C7
CANADA

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

著作権使用許諾:

本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。

それぞれの複製物、サンプル・プログラムのいかなる部分、またはすべての派生した創作物には、次のように、著作権表示を入れていただく必要があります。

© (お客様の会社名) (西暦年). このコードの一部は、IBM Corp. のサンプル・プログラムから取られています。 © Copyright IBM Corp. _年を入れる_. All rights reserved.

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

ACF/VTAM	iSeries
AISPO	LAN Distance
AIX	MVS
AIXwindows	MVS/ESA
AnyNet	MVS/XA
APPN	Net.Data
AS/400	NetView
BookManager	OS/390
C Set++	OS/400
C/370	PowerPC
CICS	pSeries
Database 2	QBIC
DataHub	QMF
DataJoiner	RACF
DataPropagator	RISC System/6000
DataRefresher	RS/6000
DB2	S/370
DB2 Connect	SP
DB2 Extenders	SQL/400
DB2 OLAP Server	SQL/DS
DB2 Information Integrator	System/370
DB2 Query Patroller	System/390
DB2 Universal Database	SystemView
Distributed Relational Database Architecture	Tivoli
DRDA	VisualAge
eServer	VM/ESA
Extended Services	VSE/ESA
FFST	VTAM
First Failure Support Technology	WebExplorer
IBM	WebSphere
IMS	WIN-OS/2
IMS/ESA	z/OS
	zSeries

以下は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group の米国およびその他の国における登録商標です。
他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アクセシビリティ
機能 175
小数点付き 10 進数構文図 176
アクセス
データ
DB2 Connect 経由 7
Net.Data または JDBC の使用 13
アプリケーション
ODBC 129
アプリケーション開発
DB2 Application Development Client の使用 19
Net.Data または JDBC の使用 13, 127
ODBC の使用 127
移行
DB2 Connect 23
印刷
PDF ファイル 169
インストール
DB2 Connect Enterprise Edition 27
Information Center 152, 154, 157
Java Development Kit 43
Java (UNIX) 41
JDK (UNIX) 41
S/390 での DB2 for Linux のインストール 58
インターフェース言語 144
変更
UNIX 144
Windows 143
インポート
プロファイル 124
インポート機能
クライアント・プロファイルの構成 123
エクスポート
プロファイル 124
エクスポート機能
クライアント・プロファイルの作成 121
オンライン
ヘルプのアクセス 170

[カ行]

カーネル構成パラメーター
変更
HP-UX 45
Linux 47
Solaris オペレーティング環境 48
HP-UX 46
各国語サポート (NLS)
文字データの変換 146
キーボード・ショートカット
そのサポート 175
キャッシュ・アドレス・リスト 97
クライアント
概要 101
Administration Client 102
Application Development 102
Run-Time Client 103
Run-Time Lite 103
クライアント・プロファイル
インポート機能 121
インポート機能を使用した構成 123
エクスポート機能 121
エクスポート機能を使用した作成 121
概要 121
言語
両方向サポート 146
言語 ID
DB2 セットアップ・ウィザード 145
コード・ページ
サポートされている 144
変換
例外 146
更新
HTML 資料 161
構成
接続
構成アシスタントを使用した 89
DB2 Connect ESE 27
構成アシスタント
ディスカバリー機能 89, 115
構成アシスタント (CA)
クライアント・プロファイルの作成 121
構成
クライアント・プロファイル 123
データベース接続、一般 92, 118
ホスト・データベース・サーバーへの接続 89
iSeries データベース・サーバーへの接続 89

構成アシスタント (CA) (続き)
テスト
データベース接続 94, 119
コマンド
db2licm 66, 68
db2setup 112
コマンド・センター
概要 17
コマンド・ヘルプ
呼び出す 172
コントロール・センター
概要 17

[サ行]

サーバー
通信 17
システム構成
DB2 Connect との 7
小数点付き 10 進数構文図 176
除去
DB2
UNIX 138
Windows 137
資料
表示 160
資料、注文 170
身体障害 175
製品パッケージ 4
セキュリティ
ユーザー・グループ 65
接続
概要 16
構成アシスタント 16
通信サーバーを使用した DRDA ホストとの接続 74
プロファイルを使用したデータベースへの接続 91, 117

[タ行]

チュートリアル 173
トラブルシューティングおよび問題判別 174
注文、DB2 資料 170
追加
データベース
手動で 92, 118
通信
コントロール・センター 17

- 通信プロトコル
 - DRDA ホスト・アクセス構成 74
- データ
 - 変換
 - 文字 146
- データベース
 - 構成 94, 119
- データベース管理ツール
 - 概要 17
 - コントロール・センター 17
- データベース接続
 - 構成
 - 構成アシスタント (CA) の使用 92, 118
 - ディスカバリーの使用 89, 115
 - プロファイルの使用 91, 117
 - テスト 94, 119
- データベースの手動による追加、構成アシスタント (CA) 92, 118
- ディスカバリー機能
 - データベース接続の構成 89, 115
- ディスク要件
 - UNIX 29
 - Windows 29
- ディレクトリー・スキーマ
 - 拡張
 - Windows 2000 および Windows .NET 44
- テスト
 - データベース接続 94, 119
- テリトリー・コード
 - ページ・サポート 146
- トラブルシューティング
 - オンライン情報 174
 - チュートリアル 174
- 取り付け
 - CD-ROM
 - AIX 133
 - HP-UX 134
 - Linux 135
 - Solaris オペレーティング環境 135

[ハ行]

- バインド
 - ユーティリティ 129
- フィックスパック
 - 適用 64
- プロファイル
 - インポート 124
 - エクスポート 124
 - 構成
 - データベース接続 91, 117
- ヘルプ
 - コマンドの
 - 呼び出す 172

- ヘルプ (続き)
 - 表示 160, 162
 - メッセージの
 - 呼び出す 172
 - SQL ステートメントの
 - 呼び出す 173
- 変更
 - カーネル・パラメーター
 - HP-UX 45
 - Linux 47
 - Solaris オペレーティング環境 48
 - ホスト・サポート
 - DB2 Connect 6

[マ行]

- メッセージ・ヘルプ
 - 呼び出す 172
- メモリー要件
 - UNIX 29
 - Windows 29
- 問題判別
 - オンライン情報 174
 - チュートリアル 174

[ヤ行]

- ユーザー・アカウント
 - インストールに必要な 31
 - DB2 クライアント 111
- ユーザー・グループ
 - セキュリティ 65
- ユーティリティ
 - バインド 129
- 呼び出す
 - コマンド・ヘルプ 172
 - メッセージ・ヘルプ 172
 - SQL ステートメント・ヘルプ 173

[ラ行]

- ライセンス・センター
 - インストール
 - DB2 Connect ライセンス・キー 67
 - ライセンス・タイプの設定 68
 - db2licm コマンドの使用 68
 - ライセンス・タイプの設定
 - ライセンス・センター 68
 - 両方向 CCSID サポート
 - 言語サポート 146
 - ロケール
 - サポートされている 144

A

- Administration Client
 - オペレーティング・システム 102
 - 概要 102
- Administration Server 17
- AIX
 - インストール
 - 要件、DB2 Connect Enterprise Edition 34
 - DB2 Connect Enterprise Edition 51
 - DB2 クライアント 106
 - CD-ROM の取り付け 133
- Application Development Client
 - 概要 102

C

- CCSID (Coded Character Set Identifier)
 - 双方向言語 146
- CD-ROM
 - 取り付け
 - AIX 133
 - HP-UX 134
 - Linux 135
 - Solaris オペレーティング環境 135

D

- DB2
 - インストール
 - 最新のフィックスパックの適用 64
 - インターフェース言語 144
 - コード・ページ 144
 - 除去
 - UNIX 138
 - ロケール 144
 - DB2 Administration Server (DAS)
 - 概要 17
 - DB2 Application Development Client
 - 概要 19
 - DB2 Connect
 - 概要 7
 - 旧バージョンからの移行 23
 - 接続のための DB2 for VSE & VM の準備 85
 - ホスト・サポート 6
 - ライセンス・キー
 - ライセンス・センターを使用したインストール 67
 - db2licm コマンドを使用したインストール 66
 - iSeries サポート 6
 - Sysplex サポート 95
 - zSeries サポート 6

DB2 Connect Enterprise Edition
 インストール
 AIX 51
 HP-UX 54
 Linux 56
 Solaris オペレーティング環境 59
 Windows 49
 インストールおよび構成 27
 インストール要件
 AIX 34
 HP-UX 36
 Linux 37
 Solaris オペレーティング環境 38
 Windows 30
 製品説明 4
 DB2 Connect Personal Edition
 製品説明 4
 DB2 Information Center 150
 呼び出す 160
 DB2 Universal Database
 コントロール・センター 17
 サポートされているプラットフォーム
 17
 DB2 スナップショット・モニター 13
 DB2 パフォーマンス・モニター 17
 Visual Explain 17
 DB2 Universal Database for OS/390 and
 z/OS
 システム表の更新 77
 DB2 クライアント
 インストール
 UNIX 112
 Windows 105, 111
 インストール要件
 AIX 106
 HP-UX 107
 Linux 108
 Solaris オペレーティング環境 109
 Windows 105
 概要 13, 16, 101
 データベースへのアクセス 13
 ユーザー・アカウント 111
 DB2 セットアップ・ウィザード
 言語 ID 145
 DB2 チュートリアル 173
 DB2 ブック
 PDF ファイルの印刷 169
 DB2CONNECT_IN_APP_PROCESS レジス
 トリー変数 95
 db2licm コマンド 66, 68
H
 HP-UX
 インストール
 DB2 Connect Enterprise Edition 54

HP-UX (続き)
 インストール (続き)
 DB2 クライアント 107
 インストール要件
 DB2 Connect Enterprise Edition 36
 カーネル・パラメーターの変更 45
 CD-ROM の取り付け 134
 HP-UX カーネル構成パラメーター 46
 HTML 資料
 更新 161
I
 Information Center
 インストール 152, 154, 157
 iSeries
 DB2 Connect の構成 83
 DB2 for DB2 Connect の構成 83
 DSPNETA 83
 DSPRDBDIRE 83
 WRKLIND 83
 iSeries サポート
 DB2 Connect 6
J
 Java
 インストールの注意点 (UNIX) 41
 Java Development Kit
 インストール 43
 JDK
 インストールの注意点 (UNIX) 41
L
 Linux
 インストール
 DB2 Connect Enterprise Edition 56
 DB2 クライアント 108
 インストール要件
 DB2 Connect Enterprise Edition 37
 変更
 カーネル・パラメーター 47
 CD-ROM の取り付け 135
N
 Net.Data
 インターネットへのアクセス 13
 DB2 データへのアクセス 13
 NLS (各国語サポート)
 文字データの変換 146

O
 ODBC (Open Database Connectivity)
 使用可能アプリケーション 129
 OS/390
 DB2 Universal Database の構成 77
R
 Run-Time Client
 概要 103
 Run-Time Client Lite
 概要 103
S
 Solaris オペレーティング環境
 インストール
 要件、DB2 Connect Enterprise
 Edition 38
 DB2 Connect Enterprise Edition 59
 DB2 クライアント 109
 カーネル・パラメーターの変更 48
 CD-ROM の取り付け 135
 SQL (構造化照会言語)
 Visual Explain の表示 17
 SQL ステートメント・ヘルプ
 呼び出す 173
 Sysplex
 構成要件 96
 使用 97
 フォールト・トレランス 97
 優先順位情報 97
 ロード・バランシング 97
 APPC 接続 96
 DB2 Connect サポート 95
 zSeries の考慮事項 95
 S/390、DB2 for Linux のインストール
 58
T
 TCP/IP
 構成
 ホスト接続 74
 DB2 UDB for OS/390 and z/OS 構成
 73
U
 UNIX
 インストール
 DB2 クライアント 112
 除去
 DB2 138

UNIX (続き)

DB2 インターフェース言語の変更
144

V

Visual Explain

概要 17

VSE および VM、接続

DB2 Connect での DB2 の準備 85

VTAM

サンプル定義 78

サンプルの PU および LU 定義 78

サンプルのログオン・モード表項目

78

DB2 Connect のための OS/390 または

z/OS の準備 73

W

Windows

インストール

DB2 Connect Enterprise Edition 49

DB2 クライアント 105, 111

インストール要件

DB2 Connect Enterprise Edition 30

ディレクトリー・スキーマの拡張

Windows 2000 および Windows

Server 2003 44

Windows Server 2003 44

DB2 インターフェース言語の変更

143

DB2 のインストール

ユーザー・アカウント 31

DB2 の除去 137

Z

zSeries サポート

DB2 Connect 6

z/OS

DB2 Universal Database の構成 77

IBM と連絡をとる

技術上の問題がある場合は、お客様サポートにご連絡ください。

製品情報

DB2 Universal Database 製品に関する情報は、
<http://www.ibm.com/software/data/db2/udb> から入手できます。

このサイトには、技術ライブラリー、資料の注文方法、製品のダウンロード、ニュースグループ、フィックスパック、ニュース、および Web リソースへのリンクに関する最新情報が掲載されています。

米国以外の国で IBM に連絡する方法については、IBM Worldwide ページ (www.ibm.com/planetwide) にアクセスしてください。



部品番号: CT2TTJA

Printed in Japan

GC88-9145-01



日本アイ・ビー・エム株式会社
〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12

(1P) P/N: CT2TTJA



Spine information:



IBM® DB2 Connect™

DB2 Connect Enterprise Edition
概説およびインストール

バージョン 8.2